特277-721
76W10660
特277
721

天狗の面

田中貢太郎

164

始

天狗の面　目次

壺の中を歩く石……七
狸の腹鼓……九
死人でゐた狸……一三
三度笠の旅人……一六
美人に化けた狐……一七
蔵を棄てる……一八
天氣予報……一九
お天氣祭……二三
太所の怨念石……二六
喧嘩を守る石の狐……二八
壺石の戒名……二九
石地蔵の首を締める……三〇
京都大學の祟地蔵……三三
聯隊内の怪異……三八
彈藥庫の歩哨……四一
佐倉聯隊の怪異……四四
柳原家の偶人……四六
偶人物語……四九
狐の嫁入……五二
虎杖採り……五四
天狗の面……五八
天井裏の妖婆……六二
遲塚家の怪異……六四
三千圓の借金……六六
畫家の死……六七
疫病神……六八
座蒲團大の男の顔……六九
窓に腰をかけた女……七〇
飯坂溫泉の怪異……七二
三原山紀行……七八
空を見る女……八一
按摩の阿岩……八二

怪談會の怪異……八五
亡者會……八六
天井からぶらさがる足……八八
手鏡……八八
格子戸に挾まれた老婆……九〇
お化の面……九一
病夫の身代になる……九三
海坊主……九六
欺まされた幽靈船……九九
不思議な帆船……一〇〇
海坊主と取組みあふ……一〇一
馬乘りになつてゐた海坊主……一〇二
碧い眼玉……一〇三
畫家の見た怪異……一〇四
高千穗峰の靈異……一〇七
御紋章の異光……一一〇
聖瑞……一一三
勅語は畏し……一一七
定紋の附いた提灯……一一八
白い服と赤い服……一二一
母親に憑る靈……一二四
神馬……一二六
伊勢大廟の護符……一二八
神符と銀貨……一二九
鶴見大佐の怪異譚……一三〇
戰死者の凱旋……一三二
蘆溝橋事件の決意……一三四
奇蹟の生還……一三六
身代になつた母の寫眞……一三七
隱膳の茶碗……一三九
夢に凱旋……一四〇
死せる勇士の戰車操縱……一四一
煙草の好きな兄……一四三
中屋少佐……一四三
巢籠の鶴……一四四
鷄の瑞兆……一四五
皇軍を導く瑞鳥……一四六
メーンマストの鷹……一四七
乃木將軍の愛馬……一八四
黑猫……一四九

屋根の上の黑猫……一五二
猫……一五三
煙草を喫む……一五五
靑と赤の航海燈……一五七
眞白な大きな帆……一五九
蛇の木……一六〇
鷲……一七〇
村の怪談……一七八
一つの不思議……一九二
曾我兄弟の墓……一九四
我が身の景性を探りに……一九五
四國巡禮記……二一三
四國遍路の奇蹟……二三〇
如來像の怒……二三三
掠奪した短刀……二三五
朝倉一五〇……二三七
飛行機の怪紳士……二三八
追つかけて來る飛行機……二四三
人のゐない飛行機……二四四
空中に消えた兵曹……二四六
電球にからまる怪異……二五〇
長崎の電話……二五五
日本橋まで……二五七
消えなくなつた女……二五八
王子稻荷の前……二五九
毒を仰いだ運轉手……二六〇
母親に逢ひに來た女……二六一
芦屋の家へ歸る女……二六二
自動車に乘る妖女……二六四
丸髷の美女……二六六
白い小犬を抱いた女……二六九
通夜の晩……二七〇
濠端の怪……二七二
終電車に乘る妖婆……二七三
善方寺の符籙……二七四
箱を負ひつた女の姿……二七六
焦土に殘る怪……二七八
海嘯のあと……二八〇
月光の下……二八三
骨壺が踊る……二八七

同行する怨靈……二八八
お初地藏……二九〇
袖を置いた雪……二九三
寫眞に寫つた登山姿……二九四
御嶽登山の記念寫眞……二九五
幽靈寫眞……二九六
死兒の寫眞……二九八
レンズに現れた女の姿……二九八
ブロッケンの幽靈……三〇〇
セントエルモの火……三〇一
ヒマラヤの妖婆……三〇三
高尾越の怪異……三〇五
函乞祭の怪……三〇八
大樽瀧の白蛇……三一〇
堀切橋の怪異……三一一
呪ひの繪姿……三一三
平山婆……三一六
壁の中の女の顏……三一九
結ひたての島田髷……三二二
千疋猿の鍔……三二四
子供に憑る靈……三二六

天狗の面

室の中を歩く石

大阪市住吉區阿倍野筋一丁目に、山本照美と云ふ素封家の未亡人が住んでゐた。其家には三人の子供があつて、長女を政子、長男を政重、次男を政隆と云つてゐた。

其の夏照美さんは、子供たちのために、庭へ小さな池を掘つて數多金魚を入れたが、池の周圍が淋しいので、石を拾つて來て其の中へ置いた。それは鶏卵大の石で、數は十六個あつたが、其のうち一個だけが赤みがかつた石で、他は皆白い石であつた。

子供たちは朝夕に庭へ出て金魚を見て樂んでゐたが、石を入れてから二日目の朝になつて、金魚は皆死んで浮きあがつてゐた。

照美さんは氣もちがわるいので、早速金魚を棄てて池の水を乾してしまつた。それは九月二十六日であつたが、其の夕方の七時頃、夕飯を終つた照美さんが、奥の六疊へ往つたところ、池の中へ入れてあつた彼の十六の石が、室の中に圓く並んでゐた。次男の政隆でも惡戯に持つて來たものだらうと

76W10660

思つて、見るともなしに見てゐると、それがすこしづつ動いてゐるやうであるから驚いた。

「あ」

母親の聲を聞きつけて三人の子供たちが駈けつけて來た。

「お母さん」

「どうしたの、お母さん」

照美さんは返事のかはりに石の方へ指をやつた。長女の政子さんがまづ石の動いてゐるのを見つけた。

「あれ」

長男の政重さんが續いて石の怪異を見た。

「這つてらあ」

照美さんと政子さんがまづ走り、政重さんと政隆さんがそれに續いて走つた。そして、四人は二階へ逃げあがつたが、妖石が其の後で何をするかも判らないので、其のままにはゐられなかつた。そこで、そつと階段へおりて往つて覗いた。其の時石は赤い方の石が先頭に立つて、室の中を廻つてゐたが、間もなく敷居の方へ往つて、其處からぽとりぽとりと一つづつ縁側へ落ちはじめた。

此の噂は何人云ふとなしに外へ漏れて大評判になつたので、野次馬が集まつて來た。河倍野署では

捨てておけないので、山本家へ刑事をやつて調べさした。山本家では其の石は、照美さんの兄の住吉區榮通一丁目の森岡安太郎さんが持つて往つたと云つたので、刑事はまた森岡家へ往つた。森岡家では、

「緣起が惡いから、其處の廣場へ捨てた」

と云つた。そこで刑事は石を捨てたと云ふ廣場へ往つた。其處には二三人の子供がゐて、其の石を拾つて石蹴をして遊んでゐた。

一　狸の腹皷

今の阪妻プロダクションが、まだ大日本阪妻立花ユニヴァーサルと呼んでゐた頃のことであつた。

その**スタヂオ**の所在地太秦村は、その頃森があり藪があつて、白晝狸を見かけることは珍らしくなかつた。

その狸に就いて、私は深刻な體驗がある。或晩私は、相棒のMと**スタヂオ**の一室に閉ぢ籠つて、そ

こで一夜を明かすことにした。だだつ廣い裝飾の無い部屋で、ただ一つぶら下がつた電燈が却つて物凄い感じをあたへた。

その晩は二人とも平生の無駄話もしなかつた。また無駄話をする氣分すら出て來なかつた。と、謂つて寢床の中へもぐりこむ氣にもならないので、いひ合せたやうに默りこくつてゐた。と、突然Mが、

「おや」

といつた。そして、顏をあげてぢつと耳を澄したから、

「何だ」

と訊くと、

「あれを聞け、あれを」

といつた。なるほど何處からか、

「ポン、ポン、ポン」

といふ異樣な音が聞えてゐる。

「狸の腹鼓だ」

「あれが」

最初は馬鹿々々しくて昔話でも聞くやうに思つてゐたが、そのうちにその音がだんだん近くなつて、昔話でもお伽噺でも無く、現實の音となつて聞えだした。するとMが次の間へ飛んで往つて、小道具の小鼓を持つて來て、それに合せて、

「ポンポンポン」

とやり出した。Mは腹鼓に滑稽を感じたからであつた。そして、Mと狸の鼓の競爭がはじまつた。

私はにこにこしながら耳を立ててゐた。Mのポンポンと、狸のポンポンが入り亂れた。狸もなかなか根氣が良かつた。二十分、三十分、四十分、一時間經つても、やめさうな氣配がなかつた。さうなるとMも意地づくであつた、腕の續く限りポンポンと叩く、狸も懸命に打ち立てる、そして、二時間あまりも經つたかと思はれる頃、狸の方がぱつたりと止んで、それつきり聞えなくなつた。

「到頭負かしてやつたな」

Mは勝ち誇つたやうにいつて笑つたが、體はへとへとになつてゐて、そこへ小鼓を拋り出すなり、ぜいぜいと荒い息づかひをした。その後で二人は寢床へ入つたが、眠られなかつた。そして、うつらうつらとしてゐるうちに夜が明けて、早山の連中がどやどやつて來た、と、俄に、

「狸だ、狸だ」

といつて騒ぎ出したので、私もMも飛び出して往つた。近くの藪の前に一疋の狸が腹が裂けて死ん

であた。

それから三四日經つて、夜間撮影があつたが、Mは撮影の都合でライトを藪の方へ廻はしたが、朝になつてみると、二疋の子狸が藪の中で死んでゐた、Mの廻したライトの強烈な光線にあてられて死んだものであつた。

「またM君が狸を退治した」

連中は面白がつてわいわいいつて騒いだが、本人のMは厭な顔をしながら、何もいはないで向うへ往つてしまつた。

それ以來、Mは唄と仕事が手につかなくなつた、そして、始終浮かない顔をして默りこむやうになり、朗かで快活で、いつも明るい瞳を持つてゐたMが、陰鬱で無表情で、別人かと思はれるほど性格が變つた。私は密かに氣を揉んでゐた。

某日、その撮影所へ伏見直江がやつて來た。

「狸の話をしてくれ」

といふので、すこしおまけをつけて話をしてゐるうちに、ふと氣がつくと、一間ばかり離れた處にMが來てゐて、それが怖い顏をしながら私の方を睨んでゐた。私は思はずぞつとした。

その晩になつて、夜間撮影をやつてゐると、氣狂ひのやうになつてMが飛んで來て、いきなり、

「おい、みんな——藪の中で撮影があるぞ」

と喚き立てた。私達は驚いた。Mのいふ藪は少し離れた處にあつて、その會社は勿論、日活でもマキノでも、東亞でも、そこで撮影をするはずがないのである。で、私はMの肩をつかんで、

「おい、しつかりしろ」

といふと、Mは瞳を据ゑて藪の方を指しながら、

「夜間撮影だ、夜間撮影だ」

と喚き續けた、Mは正しく發狂したのであつた。そして、それから四日目、かうした狀態の中で悶死した。

死んでゐた狒狒

昔から山には魑魅、水には魍魎がをると云はれてゐるが、明治二十年頃の事であつた。日向の山人で森林を伐採した事があつて、附近の者は元より他國からも木客が集まつて來たが、其の木客たち

は、晝は鬱蒼たる森林の中ではたらき、夜は墅に近い山小屋へ歸つて來た。

それは夏の夜の事であつた。木客たちは夕飯の後で、例によつて露骨な男女の話をしてゐると、谷を距てた前方の山から、

「おうウイ」

と云ふ聲が聞えて來た。それは何人かが此方へ向つて呼びかけてゐる聲であつた。ところで木客だちは、其のおうウイの聲を酷く忌み嫌つてゐるので、何人もそれに應ずる者はなかつた。と云ふのは、其の聲は山の怪異の呼びかける聲で、萬一それに應じでもすると、一晩中應答しなくてはならぬが、そんなに長く聲の續くものでない。それで聲が續かなくなるやうな事でもあると、得態の知れない毒素に當つて血を吐いて死ぬと云はれてゐた。木客たちは顔を見合はして默つてゐたが、前方の聲は後から後からと聞えて來た。ところで、前方の聲は魅力のある人を惹きつける聲で、うつかりしてゐると引きこまれて返事をしたくなるのであつた。

廣島縣の者だと云ふ壯い木客の一人が、其の時ふらふらと起つて外へ出て往つた。一座の者は便所にでも往つたらうと思つてゐると、小舍の外の崖の方から、

「おうウイ」

と云ふ壯い木客の聲が聞えて來た。すると前方の聲はそれに纏つくやうに、

「おうウイ」

と應じて來た。と、又壯い木客の聲がそれに應じた。

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」

壯い木客の聲と前方の聲は交互に聞えだしたが、其の聲はしだいしだいに熱を帶びて來た。小舍の中の者はぢつとしてゐられなくなつた。

「これや、いかん」

「此のままにしておかれない」

「負けたら、大變だ」

「山の者を皆呼んで來い」

小舍の中の者は蜘蛛の子を散らすやうに外へ出た。そして、壯い木客の傍へ行く者もあれば、近くの小舍から小舍へ同僚を呼びに往く者もあつた。其の時壯い木客は、月の光を浴びて狂人のやうになつて呼び續けてゐた。

「おい、おい、休め、休め、俺が代つてやる」

木客の一人は、壯い木客を突き飛ばすやうにしておいて、自分で代つて、

「おうウイ」

をはじめた。そして、其の男が疲れて來ると他の者が代つてやつた。木客の數は多いので幾何でも應ずる事ができた。と、其のうちに前方の聲が弱つて來て、小さな聲になり、やがてそれがぴたりやんだ。一同は勝閧をあげて壯い木客を伴れて小舍の中へ入つたが、其の時はもう黎明に近かつた。

朝になつて彼の壯い木客は、谷の前方の聲のしてゐた方へ往つてみた。其處に杉の大木があつて、其の根元に大きな狒狒が口から血を吐いて死んでゐた。

三度笠の旅人

小說家の畑耕一君が、某年、月夜の晩田舍道を歩いてゐると、三度笠を著て白い手甲掛をし、肩に振り分けの包みを背負うた一人の旅人に往きあつたが、其の旅人は畑君の前で、

「えへん、えへん」

と二つ咳をした。畑君は變な旅人だと思ひながら、それからまた一町ばかり往つたところで、今往きあつた旅人と同じやうな咳をした旅人がまた來た。其の旅人も畑君の前で同じやうに、

「えへん、えへん」

と二つつづけて咳をした。

美人に化けた貉

大正十四年の新聞に貉が女に化けた事が載つてゐた。埼玉縣北埼玉郡高柳村の鎭守大日如來の境內の河靈ヶ池の附近に、百數十年を經た貉が棲んでゐて、通行人に惡戲をしてゐたが、某夜十一時比、同村の大工で高田重三郎と云ふのが、用たしに往つての歸途、池の傍まで來ると、何處からか壯い妹な女が出て來て飛びかかつた。

重三郎は驚いて大聲をたてたので、附近の若い者が棒や棍棒を持つて集まつて來た。それと見て美

人は消えてなくなつたが、なくなつた處に二疋の獸の姿が見えたので、附近の者はそれを執り卷いて捕へた。それは牝牡二疋の貉であつた。新聞の記事によると、附近の者は奇貨措くべしとして、それを上野動物園へ賣るべく交渉中であるが、牡の方が後頭部に打撲傷を負つてひどく弱つてゐるとの事であつた。

墓を捨てる

明治から二三年前と云ふから慶應の初年の事であらう。石見國邑智郡粕淵村字小原の淨土寺と云ふ古刹の廊下へ、夜よる裃姿の武士が何十人となく列座してゐる容が見えるので、住職は元より村の者も怪異としてゐたが、其のうちに武士には墓が化けると云ふ傳說があるから、調べてみようと云ふ事になつて、某日村の者が大勢集まつて、境內を隈なく調べ、それから裏手になつた江の河の蛇淵と云はれてゐる深い潭の傍まで往つたところで、その潭の上に大きな岩があつて、それに穴が開いてゐるので、その中を調べてみると、大小無數の墓がうようよしてゐた。そこで、それを捕へてカマスに入れたところでカマスに一ぱいあつた。村の者はそれを蛇淵へ投げ棄てたが、それ以來寺內の怪異はなくなつた。

天氣豫報

大正五年の夏のことであつた。駒澤の新町に住んでゐた早川君は、二子玉川の料亭喜月の主人に用があつて出かけたが主人は何か氣になることでもあるのか、陰氣な顏をしてゐるので、訊いてみた。

「何かあつたのですか、どうしたのです」

「厭な物が流れて來たのですよ」

それは二三日前、その料亭の直ぐ下へ骨壺が漂着したといふのであつた。

そこで早川君は、

「それは何かの因緣ですよ、埋葬してやつたらどうです」

と云つて勸めると、主人もその氣になつて、僧侶を呼んで讀經させ、玉川閣の直ぐ近くの某と云ふ

寺の墓地へ葬つた。

それは骨壺を見つけてから一週間位してのことで、早川君もその葬式に立ち會つた。ところでその晩の一時比であつた。早川君が床へ入つてうとうとしてゐると、銀杏返しに結つた四十二の女が、映畫そのままにすゝと來て前へ坐つて、

「もし、もし」

と云つて早川君に呼びかけて、

「私は今日、お葬式をしていただいたものでございます」

と云つた。早川君はすぐその女は、骨壺の主だと思つたが、鬼魅が悪いので默つてゐた。すると

「私は大阪の相場師の妻でございましたが、五年前に歿くなりまして、生れが甲州でございますから、その方へ葬られましたが、この春、墓地が崩れて、骨壺が外へ出ましたところを、近所の子供に棒で突き落され、流れ流れて此方へまゐりましたところを、あなたのお蔭で葬つていただきまして、こんな嬉しいことはございません、お禮にあがりました印に、義太夫を一段聞いていただきたいと思ひますが」

と云つた。早川君は義太夫と聞いて鬼魅の悪いこともなくなつたが、あまり聞きたくもないので、

「私は義太夫に興味がありませんから」

と云ふと、

「そんなにおつしやらずに、それでは、せめて詠詞だけでも聞いてくださいまし」

と云つて、すぐ、

「今比は、半七さん」

と、三勝半七の臺詞をはじめたが、上手か下手か判らないが、暢びりとした聲であつた。そして詠詞が終ると、

「何も御慰がへしをすることはできませんが、わたしは天氣が判りますから、必要がおありでしたら、私の墓地へ來てくださいまし、お知らせいたします」

と云ふとともに女は見えなくなつた。その後早川君は、玉川閣の傍へ往つたので、女の詞を思ひだして墓地へ往つて見た。そして、翌翌日の天氣を知らうと思つて、塔婆の方を向いて、

「明後日の天氣は、どうなります」

と云ふと、塔婆の面に「晴」と云ふ文字がはつきりあらはれた。早川君はおやと思つて、塔婆を見なほしたが、もう何も見えなかつた。早川君はつまらん事を考へてゐたから、自分の神經の作用であんな文字が見えたらうと思つた。

ところでその翌日は霖雨のやうな天氣で、數日續ささうであつたが、その翌日になつてみると、か

らりと晴れた佳い天氣になつてゐた。

それに興味を持つた早川君は、時どきその墓地へ往つたが、やつぱり天氣は當つた。

そのうちに多摩川の花火大會が來たが、その日は朝から怪しい空模樣で、今にも降りさうな雲行であるから喜月では處置に迷つた。それは花火の材料を仕入れて置かなくてはならぬが、降られたらおじやんになつて大損になるので、主人が判斷に苦しんで躊躇してゐるところへ、早川君が往きあはして、主人を伴れて彼の墓場へ往つて、型の如く塔婆を見た。すると塔婆に「午後晴」と云ふ文字が現れた。しかも墓地を出る比には、ぽつりぽつりとやつてゐたが、午後の二時比になるとからりと晴れた。殊にその夜は宵闇だから花火には絶好の日和であつた。これには喜月の主人がひどく喜んだ。

後に早川君は、丸の内あたりにゐて、天氣を知り度いと思ふと、先づ早川君の眼の前に、彼の塔婆が浮んで、それに晴とか雨と云ふ文字があらはれた。(早川鉦三郎君談)

お天氣祭

日活では、街の暴風雨と云ふ映畫が出來あがつたので、其の年の八月十六日、九段の軍人會館で試寫會を催したところで、試寫會の最中、監督の野村芳亭が卒倒した。

其の時大阪のロケーションがきまつてゐて、俳優だちは野村に引率せられて西下する事になつてゐたが、野村が突然そんな事になつたので、同行することができない。しかし、野村の容態はそんなに悪いやうにもないので、一足遲れて來るやうにしておいて出發した。

そして、大阪へ往つて三日すると、中之島の中央公會堂で、所謂御挨拶をしなくてはならないが、當の野村が來ないので、俳優の江川宇禮雄が代つて立つて、一流の雄辯を揮ひながら、見るともなしに客席の方を見ると、野村が客の中へ交つて、莞爾にこしながら聞いてゐた。江川は來てゐながら出て來ないで、自分にやらすなんて野村さんも人が悪いと思つた。江川は御挨拶がすむなり野村の所へ往つた。

「人が悪いぢやありませんか、何時來たのです」

「失敬、失敬、今來たばかりだよ」蝙なささうに笑つて、「どうだね、お天氣祭はやつたかね」

お天氣祭とは酒徒の江川が自分だちに都合の良いやうに案出したものであつた。それはロケーションに雨が禁物であるところから、天氣が心配になる時には、お天氣祭と云ふのをやつて、大に飲んで裸踊をするのであつたが、不思議な事にはそれに利き目があつて、降り續いてゐる雨でもそれをやる

と翌日はからりと晴れるので、ロケーションにかかる時には必ずやつてゐた。野村が云つたのはそれであつた。江川はそれに對して何か云はうとしたところで、野村の姿が不意に見えなくなつた。

「おや」

江川は何處へ往つたらうと思つて、彼方此方探してみたが見つからなかつた。しかし、一行の宿はきまつてるので、後から來るだらうと思つて氣にもしなかつた。そして、宿へ歸つて床へ入り、一睡りして眼を開けてみると、傍の蒲團に野村が寢てゐた。

「ああ、野村さんか」

と安心したところで、野村が眼を開けて、

「お天氣祭をやつたかね」

と云ふので、江川は、

「盛大にやりましたよ」

と云つた。すると野村は又續けて、

「お天氣祭をやつたかね」

と云つた。江川は今晩に限つて何故こんな事を云ふだらうと思つた。で、

「やりましたとも、なんなら明日の晩、もう一度やりませうか」

と云ふと、野村は頷いて、

「それはいいね、やらう」

と云つた。それから二人は眼をつむつたが、朝になつたところで、野村の姿が見えなかつた。江川は枕頭へ來た婢に聞いた。

「野村さんは、何處へ往つた、出て往つたのか」

婢は不思議さうな顏をした。

「野村さん、野村さんはいらつしやらないぢやありませんか」

「來ない、痴な事を云ふな、其處に寢てたのを知らないのか」

「たつて、來ない方がどうして寢るのです」

「おい、眞箇か」

「眞箇ですとも」

江川は其の時はつと氣が注く事があつた。江川が顏色を變へた時、他の婢が電報を持つてあがつて來た。それは野村家から野村の危篤を報らして來たものであつた。江川はあわてて飛行機で歸京したが、野村は既に呼吸を引き取つてゐた。

本所の怨念石

明治年間の話である。本所の菊川町三丁目に一軒の古い借家があつた。ところが、どうしたものか其の借家に住むと、其の一家には必ず異變が起つて家族の何人かが病氣になるので、たいてい半年經たないうちに引越してしまふのであつた。

そこで、近所の人は其の家を妖怪屋敷と呼ぶやうになつた。さうなると、折角其の家を借りたいと云つて來た人も、妖怪屋敷の噂に脅かされて逃げ出すと云ふ始末で、何人も其の家に住む人がなくなつた。

家主も其の評判を氣にして、昭和二年の夏比、某行者に賴んで其の家を見てもらふことにした。行者は其の家を見てから、これは女の怨靈が祟をするのだと云つた。家主は驚いて家の來歴を調べて見た。すると、其の家を建てたのは幕末比のことで、當時其の家に某と云ふ旗下が住んでゐたが、其の旗下は大の好色家で、妻があるのに家の婢に手をつけた。それを知つた旗下の妻は嫉妬のあまり、婢が水を汲んでゐるところを背後から井戸の中へ突き落した。そして、聲のもれないやうに蓋をし

て、其の上へ大きな石を置いたので、婢はどうすることもできずに其のまま死んでしまつたが、後になつて其の婢の死體が發見されて、大騒ぎになつたと云ふ事實のあることがわかつた。そして、當時蓋の上へ置いたと云ふ石まで、其の家の庭から發見された。

其の話は直ぐ附近へ傳はつたので、怨念石と云つて非常な評判になつた。其の噂を聞いて其の怨念石をわざわざ見に來る人さへあるやうになつた。某日、近所の石屋が通りかかりの人に其の石のことを聞かれて、それはあれだと云つて足で其の石を數へた。すると其の時まで元氣であつた石屋が急に顏色が變つて、其の場へ昏倒してしまつた。居あはせた人びとは驚いて、石屋を助け起したが、それから石屋は熱を發して遂に足が利かなくなつた。

其のために怨念石は一層有名になつたが、人びとは其の石の怨念を怖れて其の家へ近づかなくなつた。家主はそれを聞いて氣に病んだが、滅多に其の石を動かすこともできないので、石の處分に困つてゐた。

同町内に山崎と云ふ日蓮宗の信者がゐたが、其の人が家主の困つてゐるのを見て、某日家主に殺された婢のために追善供養をしたらどうかと云つた。家主は困つてゐる時であつたから、すぐそれをやることになり、山崎の知己の日蓮宗の導師水村某師に賴んで其の怨念石にお經をあげてもらつたが、それから其の家には別にかはつたこともなくなつた。

其の後怨忘石は水村某師に引き取られ、現在でも水村師が住職をしてゐる伊豆伊東の佛現寺の境内に祀られてゐる。

喧嘩する石の狐

靜岡市新町五丁目に稲荷神社があるが、其の神社は昔から靈驗があると言つて參詣者が絶えない。其の稲荷神社の前には、二體の石の狐を据ゑてあるが、其の据ゑ方が普通の据ゑ方と違つて反對になつてゐた。大正十二年の七月になつて、何人云ふとなく不思議な事を言ひだした。それは稲荷神社の前の石の狐が毎晩のやうに、夜の二時比から喧嘩をはじめるが、喧嘩がはじまると水を流すやうな音がするので、朝になつて往つてみると、石の狐の口に生きた狐の毛が附着いてゐると云ふのであつた。

聞き傳へた附近の好奇だちは、不寝の番をして實證を見ると云つて、夜になつて稲荷の境内へ集より、時刻の來るのを待つてゐたが、周圍かめうに淋しくなつて來たので、皆こそこそと逃げて歸つ

た。同町の青年はそれを聞いて、

『何だ、意氣地がない』

と云つて交代して頑ばつてゐたところで、その時刻になると何處からともなく水の音が聞えて來た。そして、翌朝往つてみると、果して石の狐の口に獸の毛が附着いてゐた。そこで同町では町會を開いて、稲荷に伺ひをたてて石の狐の位置を改める事にした。

墓石の戒名

東京市小石川區第六天町江戸川縁から拓大の方へ往く途中の谷あひの街に、黒板塀の古い家があるが、其の家へ元松嶺の藩主であつた酒井と云ふ子爵が引越した。引越したのは不幸續きで、地所も家作も持つてゐたが、それがどうにもならない結果であつた。

ところで、其の家へ引越してみると、どうにもならなかつた地所が高く賣れたり、區劃整理で家作が買收されたりして、めきめきと有福になつたので、そこで本郷千駄木へ邸を新築して、いよいよ引

越しと云ふ時になつて、毎日踏んでゐた庭の飛石の一つに文字のあるのを見つけた。それは古い墓石に彫つた戒名であつた。

酒井家では氣が注かなかつたとは云へ、毎日墓石を踏んでゐた事であるから、其の佛に對してすまないやうな氣がして、近所の人に訊いてみると、其の家は旗本の家で、其處に非常に可愛がつてゐた一人娘があつて、それが早世したので、邸の内へ葬つてあつたが、その後其の家は人手に渡つて、墓石は何時の間にか庭の飛石になつた。しかし、其の家は緣起の佳い家で、其處へ入つた者は皆繁昌して他へ移つて往つたが、移つて往く時不思議にその墓石の戒名がはつきり見えるのであつた。松井桂陰君はそれに就いて、墓石と云ふものは踏まれると罪障が消滅するさうだと云つた。

石地藏の首を締める

栃木縣芳賀郡中村に大字若旅と云ふ一部落があつて、その部落が又上、中、下の小字に分れてゐるが、栃木縣は人も知る干瓢の產地で、その村でも干瓢は重要な耕作物になつてゐた。

明治四十三四年の比であつた。その部落の小字の下に、石島某と竹田某と云ふ二軒の農家があつて、畑を並べて干瓢を作つてゐたが、收穫期になつて干瓢がたびたび盜まれるので、石島の方では竹田を疑ひ、竹田の方では石島を疑つたが、被害が絕えないので、たまりかねて石島では、實證を摑まうと、某夜畑へ往つて番をしてゐた。すると、竹田の畑の方でがさがさと云ふ物音がした。

「何人だ」

と云ふと、前方から、

「それより汝は何人だ」

と云つて近づいて來る者があるので、石島も用心しながらその方へ往つた。近づいて來たのは竹田の主人であつた。

「あんたか」

「ほほ、これは」

と云ふ事になつて話しあつてみると、竹田の方でも干瓢の被害があるので番に來てゐるとのことであつた。

「それでは、あんたの方でも盜まれるか、私はまた盜まれるのは、自分の畑ばかりと思つてたが」

「どうして、私の方も始終盜まれる」

そこで平生親しい中であるから、打ち明け話になつて、石島が、

「失禮だが、私はあんたを疑つてた」

と云へば、竹田も、

「眞箇を云ふと、私もあんたを疑つてたよ」

と云つて、二人は大笑ひになり、それから二人で協力して盗人を捕まへる事になつた。そこで二人は、一晩おきに畑の番をする事にして、それを實行してみると被害がない。被害のないのに何時までも番をするのは痴ばかしいので、番をやめてみるとまた盗まれる。

二人は困つてしまつて、その土地で有名な地藏尊へ盗人が何人であるか、それを知らせてもらひたいと祈願して、毎晩二人で參詣したが、干瓢を盗まれるだけで何の效驗もなかつた。

二人は十四日の晩、荒縄を持つて往つて地藏の首へ巻きつけ、二人でぐいぐいと締めつけながら、

「おい、地藏、毎晩毎晩參詣しても、盗人を知らしてくれないばかりか、反對に干瓢を盗ましやがる、さあ、どうだ、地藏、痛いか、痛いか、苦しけりや、盗人に祟れ、さあ、どうだ、地藏、これが苦しけれや、盗人の首を締めろ」

と云ひ云ひ一生懸命になつて締めてゐると、生物を縛つた時のやうな手應があつた。二人は恐ろしくなつて縄をそのままにして逃げ歸つた。

すると其の翌日の事、中の某と云ふ男が、前夜急病が起つて、

「首が締まる、首が締まる」

と狂ひまはつてると云ふ噂が傳はつて來た。

石島と竹田の二人は、噂をたしかめた後で、伴れだつて某の家へ往つて、地藏の事を云つて、

「何か思ひ當ることはないか」

と嚇したりすかしたりしてゐると、某はたうとう干瓢の盗人である事を自白した。そこで二人は、地藏尊に供物を供へて願解をしたので、某の苦痛もすぐ癒つた。

京都大學の祟地藏

大正八年京都大學では、動植物學の教室を建設するために、百萬遍知恩院の東方白川街道に沿うた土地を購入して、地均工事をやつたところで、地の中から石地藏が數多出て來た。地均に從事してゐた土方たちは、

「石地藏では、石垣にもならず、濱物の押にしては、勿體ない、こないな物は、棄場にも困る」

と云つて構内の隅へ投げだし、やがて其の石地藏に腰をかけて、暢氣さうに午の辨當を喫ふ者もあれば、

「石地藏やないか、こないな物が、何で勿體ない」

と云ひながら容赦なく小便をしかける者もあつて、嘗は地藏菩薩として尊崇の的となつてゐた事もあつたと思はれる石地藏も、土方だちの前には何の威光もなかつた。所で、土方だちが石地藏を凌辱し初めてから間もなく、工事請負人の小島某が容態の判らない急病でころりと死んでしまつた。すると何人云ふとなく、それは石地藏の祟だと云ひだしたが、大學の方では、

「石地藏が祟る、そんな馬鹿なことがあるものか」

と云つて一笑に附した。

其のうちに工事はどんどん進捗して、木造ではあるが堂堂たる洋館が出來あがつた。其の時になつて、其の建築にたづさはつてゐた大工の棟梁の服部と云ふのが死んだ。續いて土方の某が死に、それから大學の建築部長山本治兵衛が死んだ。會計課長の今井と云ふのは、其の時樺太へ出張してゐて樺太で死んだ。

「それ見い、こんなに此の建築に關係した人が死ぬのは、みんな地藏さんの祟だよ」

と云つて、工事人足、出入商人、小使だちは、寄ると觸ると其の噂で持ちきつた。

變な信仰を持つてゐた出入商人の一人は、紀伊郡櫓大路村の稲荷下げの婆さんの家へ飛けつけた。八十あまりになる稲荷下げの婆さんは、神祓の後で、

「地藏の祟ぢや、石地藏と云つてもあれは元來大日如來ぢや、大學ではお祭をしないばかりか拋りだして尿をしかけたりするから、如來さんが大變な御立腹で、まだ六人まで命を奪ると云うてござる。一日も早くお祭して、特に水は毎日お供へせんとなりませんぞ、それに古狸がまだ二疋をる、それは一疋は義春、一疋は三九郎と云ふから、これもよくお祭りをせぬと怒つとる」

と云つた。出入商人は飛んで歸つた。さあ大變だ。まだ六人の命を奪る。命を奪られるのは何人も厭だ。命を奪られるのが厭なら大日如來を祭らなければならぬ。そこで動植物學教室の建設に主力を盡してゐた池田教授に、相談を持ちかけたところで、同教授は鼻端で笑つて、

「ほう、さうか、それやえらいこつちやが、まさか大學では、ね、君だちで然るべくやつたらどうだ」

と對手にならなかつた。ところが其の池田教授は、僅に四五日の病氣で大學病院で死んでしまつた。かうなると迷信だと笑つてゐられなくなつた。そこで小川、川村、郡場、小泉の諸教授が若干寄附し、出入商人も醵金して、二百餘圓で構内の東南に二坪程の臺場を築き、それに石地藏を並べ、狸

の祠も作つて花を飾り、餅や赤飯を供へて、嚴に祭典を執行し、續いて毎年盆の二十八日に、例祭を行ふことになつたので、その後は何の事もなくなつた。

京大醫科が設けられて間もない比の話であるが、まだ其の頃、吉田町は畑地で、百姓が野菜物を作つてゐた。その吉田町の百姓の一人が、某日醫科の構内を覗いてみると、空地の上へ石地藏を臺もろともに放り出してあるので、いらないものならもらはうかと、人を頼んで家へ運び、石屋に交渉して、それに穴を鑿らして手洗鉢にし、それを便所の口へ据ゑた。

其のうちに十年近くの歳月が流れたが、其の百姓の家は皆死絶えてしまつた。そこで、親類縁者が集まつていろいろ評議した。其の時、

「彼の地藏さんを、手洗鉢にしたんやで、一家がかうして死ぬるんやろ、恐ろしいことや、はよ返さんとあかん」

と云ふものがあつて、石地藏を醫科大學の構内へ運び返した。

醫科大學の方では、そのままにして放つて置いたところで、何人云ふとなく、石地藏の附近の草を刈ると祟がある。掃除夫の何人は病氣した。何人は負傷した。といろいろな風説が生れて來た。時の學長伊藤隼之博士は、石地藏の附近に草が生え繁つて見苦しいので草刈を命じた。掃除夫は困つて祟

地藏の由來を話した。伊藤博士はせせら笑つて、

「馬鹿なことを云ふな、此處を何處だと思ふ、最高の學府だぞ、大丈夫だ、乃公が保證するから刈つちまへ」

草刈を云ひつかつた掃除夫は、石地藏を三拜九拜して、

「云ひつけられて、しかたなしにやる事だから、耐へておくれやす」

と云つて草刈にかかつたが、其のためか掃除夫には何の事もなかつたが、伊藤博士の夫人が俄に病氣になつて死んでしまつた。

「それみい、伊藤先生が無理に掃除をさしたからだよ」

かうした噂がぱつと校内に擴つたが、それもやがて消えて學校の方で草原へ石地藏を捨て置いては困ると云ひだした。小使たちは鬼魅が惡いので、石地藏にお詫びしてから槻の古木の根元へ持つて往つたが、槻は何時の間にか其の石地藏を抱きかかへて、その半を捲込んでしまつた。其の一方、槻の枝の一つが醫科の事務室の軒端を覆うて室を暗くした。事務室ではその枝を伐りたいが、伐れば地藏が祟ると思ふので、何人も伐る者がない。學部長始め事務員たちは額を集めて相談の結果、出入の植木屋の山本と云ふのに頼んだ。頼まれて山本は否とは云へなかつた。

「それでは私が、生命を的にして、切りませう」

山本は七日の間、若王子の瀧で水垢離を執つて、それで念佛を唱へながら邪魔になる枝を伐り拂つたが、何の事もなかつた。これは大正十二年の出來事であつた。

聯隊内の怪異

歩兵第三十九聯隊、姫路は白鷺城の兵營で怪奇事件が起つた。それは明治三十九年の春の事であつた。

その時第二大隊と第三大隊の兵舎に接近した土堤を取り毀して、其處にある二十間程の外濠を埋めたてることになつた。それといふのは、被服倉庫や偕行社へ出入するのは不便だからであつた。

そこで三十八年兵と三十九年兵の第二と第三中隊が共同して、外濠の埋立工事に着手した。すると某夜、突然、五中隊の中の數人の兵が、夜中になつて狂氣のやうにのた打ちまはつて叫び、それと一緒に寢臺がごとごとと動いた。それがために班全體が引つくりかへるやうな騒ぎになつた。

翌日になつて、怪奇に襲はれて病人になつた兵が、軍醫に診察してもらふと、

「何處にも異常は無い」

といつた。そして、軍醫は、

「人間が確りしてゐないから、そんな目に遭ふのだ、氣をつけろ」

といつた。そこで辯解すると、

「そんな馬鹿なことがあるか、練兵が厭だから狂言をやつてゐるのだらう」

といつて叱られた。ところが翌晩になると、六中隊、七中隊の中の兵が五中隊同樣の怪異に襲はれた。そして、翌々晩は八中隊と九中隊の中の兵が、その次の晩には十、十一の兩中隊の中の兵が怪異に襲はれた。

いよいよもつて穏かでない。そして、その怪異に襲はれる兵が、日を追つて增加した。で、夜は腰掛を寄せ、顔をあつめて、雜談しながら朝になるのを待つより外に魔除けの方法がなかつた。

しかし、晝間の練兵で疲れてゐるから、眠るまいとしてゐても、知らず識らず眠りこける。すると

その兵は、眼を白黑して冷汗を流して、

「きやつ」

と斷末魔のやうな叫び聲を立てると、その聲を聞いた周圍の兵は、一齊に立ちあがつて悲鳴を揚げる。

言語道斷、形容の出來ない混亂狀態である。こんな怪奇が毎晩つづくので、とうとう練兵に影響するやうになつた。

「迷信だ、幽靈や化物があつて堪るものか」

といつて叱つてゐた將校たちも、事實をどうすることもできなかつた。結局練兵を中止して迷信打破の精神講話をやつてゐたが、怪しい患者は增すばかりで、手のつけやうがなかつた。すると今度は、週番士官のI大尉が怪異に襲はれた。寢臺がごとごとと動く。苦悶する。擧句が甲高な聲の悲鳴。

「迷信だ、妄想だ」

と訓戒してゐた當事者が、その仲間入りをしたのだ。I大尉が悲鳴を揚げた時、兵たちは驚いて駈つけた。大尉は强ひて平靜を裝うてゐたが、額の冷汗、瞳に殘る心の動搖の痕は、かくすことができなかつた。

その怪異は、明治三十九年の春から四十二年の春まで續いたが、毎朝連續して起つたのではなしに、時には二月三月も起らない事もあつた。

それについて市內では、土堤を崩した時、二匹の親狸と、三四匹の仔狸が出て來たのを、そのまま堀の中へ埋めたからその祟だといふやうなことをいつた。また、それが治まつたのは、將校連が伏見の稻荷に參詣して、魔除の祈りをしたからだといふやうな事をいふ者もあつた。

その時怪異に襲はれた兵は百五十餘人あつた。土地の新聞記者がその兵について確めてみると、呼吸が苦しくなつたといふ者もあり、胸部を壓迫されたやうに思つたといふ者もあり、また毛布で體をくるくる卷きにして、窓から投り出されるやうに思つたといふ者もあつて、その狀態は少しづつ違つてゐた。

彈藥庫の步哨

金丸ヶ原は陸軍の演習地として知られてゐた。其の金丸ヶ原の南端には、將卒の宿泊する立派な廠舍が建つてゐるが、其の廠舍の裏手に彈藥庫があつて、時とすると悲しさうに女のすすり泣く聲が聞えると云ふので、初年兵たちは彈藥庫の步哨に立つのを厭がつた。

某夜、其の鬼魅の惡い噂を聞いてゐる初年兵が、初めて其の因緣つきの步哨に立つた。初年兵は其處の步哨に立つのが厭でたまらないので、立つさうさうから交替の時間の來るのを待ちかねた。其の

うちに夜が更けて木の葉を鳴らす風の音にも物凄さが加はつて來た。初年兵は風の音に耳をやつた。と、風の音に交つて女の泣聲のやうな物が聞えて來た。初年兵はぎくりとして銃劍を取り直した。其の瞬間、初年兵の耳にがさがさと云ふ落葉を踏んで來るやうな跫音が聞えて來た。初年兵はそれでは交代が來たのかと思つた。初年兵は嬉しいので聲をかけようとして前を見た。其處には壯い女が立つてゐたが、暗い晩であるにもかかはらず、胸のあたりがはつきり見えて、眞赤な血のやうな物の附いてゐるのが見えた。

「何人だ」

初年兵は夢中になつて銃劍を揮り廻した。揮りまはしてゐる處へ交代兵が來た。

「おい、君、どうしたのだ、あぶないぢやないか」

初年兵はやつと氣が注いて廠舍の方へ引きあげて往つた。翌日になつて後から交代した兵士は銃を揮りまはしてゐた初年兵に話したが、其の兵士もやはり其の初年兵と同じやうな物を見てゐた。胸のあたりを血に染めた怪しい女の噂は、其の日のうちに全聯隊に傳はつた。聯隊の方でも其のまにしておけないので、其の班の上等兵をして取り調べさした。取り調べた結果、二人の答は噂のとほりであつた。そこで上等兵は何か出來する事はないかと思つて調べてみたところで、次のやうな事件のあつた事が判明した。

それは明治四十年の秋のことであつた。其の比は金丸ヶ原が陸軍の演習地になつて、間が無い時のことであつたし、日露戰爭直後の軍人の持てた時であつたから、若い男の軍服姿には村の娘の眼が集まつた。○○聯隊の兵士某と村の娘の某とが何時しか戀を語るやうになつた。恰度其の夜は、其の兵士が彈藥庫の歩哨に當つたので、其の時を利用して其の娘と會ふ約束をしたが、娘が時間までに來なかつたので、其の兵士はしかたなしに後の兵士と交代して引きあげて往つた。

新に歩哨に立つた兵士は、ともすれば襲ひかかる睡魔を追ひ拂ふやうに、銃を持ち直して見たり其の附近を歩いたりしてゐたところで、林の方でがさがさと云ふ跫音がして何人か來たやうな氣配がした。兵士は何人が來たらうと思つて月の光に透して見た。と、其處に壯い女が立つてゐて白い齒をちらと見せて笑つた。兵士は狐か狸ではないかと思つた。どう考へても深夜に妙齡の女がこんな淋しい地點へ近づいて來るはずがないのであつた。

「何人だ、何處へ往く」

兵士は銃劍を擬して誰何したが、女はそれに答へないで身輕に兵士の方へ近づいて來た。

「何人だ、止れ」

女は兵士の突き出してゐる銃劍を見ながらかまはずに近づいて來た。

「返事をせぬと突くぞ」

兵士は眞劍たつたが女は笑顔をしてゐた。兵士は三度目の誰何にも女が返事をしなかつたので、たうとう銃劍を閃かした。女は悲鳴をあげて倒れた。

兵士は直ぐ廠舎へ引返して其の事を報告した。廠舎は大騒ぎになつた。女は彼の前に歩哨に立つてゐた兵士に逢ひに來てゐたものであつた。

彈藥庫附近の怪異はそれがためだと云ふ事になつた。

佐倉聯隊の怪異

昭和八年の九月比のやうに思はれるが、佐倉聯隊へ入營してゐた松島吉雄君の談話として傳へられる處によると、其の九月の暴風雨のあつた日に、聯隊では習志野方面へ野營に出かけたので、各中隊には動務當番と十名ばかりの看護卒班が殘つてゐた。

暴風雨の翌日になつて、不寢當番の兵士の一人は、生なましい不鬼魅な話をした。それは、

「昨夜一時比、彼の風の最中に、白い法衣を着た坊主が、衛生司令部の方から來て、本丸の林の中へ

消え往つた」

と云ふのであつた。兵營に怪談は附物で、其の聯隊でも本丸の大松に白い首がかかるとか、井戸の中から血のやうな煙が出てゐたとか云ふ話があつたが、兵營が空つぽになつてゐる際であるから皆が顔を見あはした。すると歩哨に立つたと云ふ上等兵の一人が、

「おれも火藥庫の傍で、白い衣服を着た奴を見つけたから、何人だと云つて怒鳴つけると、何處かへ行つてしまつたよ」

と云つたので、ますます皆が鬼魅をわるがつた。そんな事があつてから數日して、それは二十一日の夜であつた。松島君は其の聯隊附屬の衞戍病院の屍室の不寢番に立つた。此の屍室の不寢番は皆が尤も厭がるものであつた。

松島君は一張の提燈をたよりにして、びくびくもので立つてゐると、一時過ぎになつて、突然落葉を踏みしめるやうな音が起つて、それが段だんと近づいて來た。松島君は冷水でも浴せられたやうにぞつとした。しかし、松島君はそれを耐へて、提燈をあげて透してみたが、別に何も見えないので、今度は屍室の内の方を覗いてみた。と、屍室の窓の外側に、蒼白な顔の而も白衣の人影がはつきりと見えた。はつと思つて見なほしたところで、ちらちら動く蠟燭の火を受けて自分の影法師が屍室一ぱいに躍り狂つてゐるやうに見えた。

松島君はわつと叫んで逃げようとしたが、逃げる事は軍律が許さなかつた。松島君は銃にしがみつくやうにして、

「何人だッ」

と云つて誰何した。同時に怪奇な自分の姿は消えて、彼の白衣は本丸寄の暗の中へ消えて往つた。怪奇な自分の姿は、蠟燭の光源と霧の作用によつて起るブロッケンの幽靈であつたとしても、白衣の姿は説明ができないのであつた。

柳原家の偶人

柳原燁子さんの實家の柳原家には、家寶として傳はつてゐる偶人がある。それは二つか三つ位の男の子の這ひ偶人で、木の臺に泥を塗つた古風な物であるが、氣品の高い中に可愛らしいところがある。

京の人形師人形屋幸兵衛と云ふ者の作と云はれてゐる偶人で、背に綠丸としてあるので、柳原家では綠さん綠さんと云つてゐるが、他に一つ其の對になつた立體の偶人がある。それは綠さんのお附の偶人で、五つか六つの稚兒髷に結つて大小をさした男の子で、それには萬吉と云ふ名があつた。

其の偶人は後水尾天皇の御代の物で、綠さんの背の文字は、後水尾天皇の御宸筆だとの事で、傳說によると、後水尾天皇が、

「綠丸」

と仰せらるると、偶人が夢爾笑つたと云ふのである。

それで維新前までは、季節季節に御內儀へ伺候して、其の都度時服を賜はつたと云はれてゐる。從つて柳原家では、朝夕に御飯を供へ、衣服の如きも季節に應じて着せて大事にしたが、何かの時に破損しないやうに、長櫃や箱の中へ納めると、聲を出して泣くので、しまつておくことができなかつた。

某時火災が起つて柳原家が全燒した事があつたが、其の時偶人は一族の女官をしてゐた人の許へ預けられた。すると偶人は、

「柳原へ歸ゥ、柳原へ歸ゥ」

と云つて泣いたので、預けておく事もならず、俄造の假邸を作つて、偶人を引き取つて來たが、俄造の邸の事であるから、室の數も多くない。そこで偶人を置いた室へ阿槃と云ふ婢が寢ることにな

つた。やがて寢る時刻になつて、阿繁が燈を消したところで、室の一方の隅に青い手毬位の火の玉が現はれて、それが螢の飛ぶやうに室の中をすいすいと飛びだしたが、其のうちに飛ぶのが止んで、ぼかりと浮んだかと思ふと、綠さんの顏が靑くぼんやりと見えた。顫へながら見てゐた阿繁は、其の時、

「わ」

と叫んで其の室を飛びだして、皆のゐる室へ逃げて往つたが、

「どうしたの、おまへ」

と云つて聞いても口が利けなかつた。其の偶人は顏も手足も眞黑に汚れてゐるが、それを拭ふ事は傳說によつて禁ぜられてゐた。某時あゝり偶人の汚れが酷いので、京の塗師に云ひつけて塗りかへさしたところで、翌日になつて其の塗師が病氣でもないのにぽつくり死んだ。

筑紫の女王と云はれた燁子さんが、赤金御殿を出て歸つた時、朝夕綠さんを對手にして苦惱をまぎらしてゐたところで、某日日蓮信者が訪問して來て、いろいろの事を話してから、

「貴女が、かうしてお歸りになるのは、何か貴女を引き戻す物があるからですよ、何か思ひ當る事はありませんか」

と云ふので、燁子さんは偶人の事を思ひ出して、

「別にこれと云つて思ひ當る事もありませんが、ただ當方に昔から傳はつてゐる偶人がありまして」

と云つて、綠さんを見せると、其の日蓮信者は、

「これだ、これだ、此の偶人だ、これが貴女を離したくないからです」

と云つた。そこで燁子さんは、宮崎家に往く時、門外不出の偶人を持つて往く事ができないので、同形の偶人を求めてそれに綠さんの魂を移してもらつて持つて往つたと云はれてゐる。

偶人物語

古道具屋の大井金五郎は、古道具の入つた大きな風呂敷包を背にして金町の家へ歸つて來た。金五郎は三河島蓮田の古道具屋小林文平の立場へ往つて、古い偶形を買つて來た處であつた。

門口の狹い店にはもう電燈が點いて、女房は穴倉の奧のやうな座敷で夕飯の準備をしてゐた。

「歸つたのですか、寒かつたでせう」

「平生だつたら、寒いだらうが、今日は寒くねえのだ」

女房は、金五郎の活活した顏を見た。

「どうしたの、今日は頗に景氣がいいぢやないの、何か掘りだし物でもあつたのかい」

「あつたとも」風呂敷の結目を解いて包を背からおろして、「おい、みろ」

金五郎は包の中から三つの古い桐の箱を執りだした。女房も好奇心をそそられたので傍へ寄つて來た。金五郎は女房の顏を見て莞やりとした。

「おい、妬くな、大變な品物だぞ」

「妬く、何を妬くの」

「見ろ」

金五郎は其の一つの蓋を開けた。中には女の偶人の頭が入つてゐた。それは二十六七に見える女で、髮を勝山髷にして紫の手柄をかけてゐた。金五郎は其の偶人を二十五兩で競り落として得意になつてゐるところであつた。

「おや、まあ、まるで生きてるやうだね、鬼魅が悪いぢやないの」

「だからよ、これで良い正月をしようと云ふのだ、どうだ、鬼怒川温泉へでも伴れてつてやらうか」

「鬼怒川はいいね」

金五郎はそこで更めて偶人の顏を見た。と、其の偶人の眼が動いて淋しさうに笑つた。

「わッ」

金五郎は後へ仰けぞつたが、直ぐ跳ね起きて外へ走り出た。

「生きてる、生きてる」

其の偶人は頭と胴と手足の三つに分けて、箱に入れてあつたが、合はせると五尺二三寸の脊丈になるのであつた。金五郎は其の時から狂人のやうになつて、夜も晝も暴れまはつた。

金五郎の女房は、鬼魅の悪い偶人を一刻も早く始末をしたいと思つたが、同僚にはもう其の噂が弘まつてゐるので、何人も買はうと云ふ者がなかつた。女房はしかたなしに人を頼んで、荒川へ持つて往つて流してもらつたが、箱は投げこんだ處へ錘を附けたやうに浮んだままで流れなかつた。箱を流しに往つた者は、忌いましいので竹竿で突いて流さうとしたが、突いた時はすこし流れるが、直ぐ又元の處へ戻つて來た。

もてあました女房は、町屋の火葬場の前にある地藏院へ往つて、理由を話して其處へ封じこめてもらふ事にした。地藏院の住職森徹信は、仔細に其の偶人を調べて見た。偶人の箱に古風な筆蹟で小式部と書いてあつた。そこで住職は小林文平に就いて調べたところで、これは同じ町屋の林田雪次郎と云ふ老人の家から出た事が判つた。

住職は林田老人の許へ往つて偶人の來歷を聞いた。それによると文化年間、吉原の櫛本樓に小式部

太夫と云ふ妓がゐて、それに三人の武士が深い執着をもつて、主家を浪浪するもかまはず、通ひつめて自分の有にしようとした。小式部はいろいろと考へた結果、自分の生き妾の偶人を三體造らしてそれぞれ送る事にした。

小式部の依頼を受けた人形師は、其の翌日から小式部の許へ通つて、小式部の顔を見ながら、偶人を作つたが、小式部は其の半比から病氣でもないのに寢れだして、いよいよ完成と云ふ日になつて呼吸を引きとつた。そして、其の偶人は遺書によつて、三人の武士に贈られたが、其の一つが林田老人の知りあひ熊本の武士へ往き、それを後に林田老人が讓り受けたものであつた。林田老人は熊本の武士が、其の偶人の髪を結うてやる處を時どき見たと云つた。

狐の嫁入り

望月百合子さんが狐の嫁入を確に見たと云ふ談話筆記があつた。それによると望月さんは、山梨縣長知澤の生れで、三つか四つの時、秋の彼岸の日、祖母になる人に負はれて小室山のお寺へ往つた

が、其處は山坂路で、路の左右には粟や稗を作つた段だら畑が續いてゐた。

其の山坂路を登つて、中程へ往つた時、ふと一方の畑をみると、其處の畑の隅に一疋の白い犬のやうな獸がゐて、それが兩足を前へ出して這ひつくばつてゐた。望月さんはすぐそれを狐と思つたので、祖母の肩を叩いて、

「きつね、きつね、おばあさん」

と云つて祖母に知らさうとしたが、獸は其の聲に驚いたやうに周章てて傍の雜木林の中へ姿を消して往つた。

「あれ、おばあさん、逃げた、狐が逃げたよ」

「さうかね、おまへは眼が早いね、わしはよう見なかつたよ」

祖母は望月さんの機嫌を取り取り山坂路を登つて往つた。頂上が近くなつたところで、陽が照つてゐるのに時雨のやうな雨がばらばらと降つて來た。と其の時、祖母は何か見つけて、

「あ、狐の嫁入だ、百合ちやんや、それ、狐さんのお嫁入だよ」

と云つて、體を斜にして望月さんに路の上か見えるやうにした。望月さんはそこで眼をやつた。長持や箪笥を擔いだ輿入の行列が頂上の方へ向つて歩いてゐたが、其の行列の中程に、白い襠袴を著て白い角隠をした新人がゐたが、みるみる其の行列は山の峽間に隠れて往つた。其の時日照雨もやんで

秋の日が華やかに山路を照らしてゐた。

虎杖採り

閨秀畫家の伊藤美代乃女史は、秋田の出身であるが、其の女史が小さい時、それは晩春の事であつた。某日隣の友達と裏の田圃へ出て、虎杖を採つて遊んでゐると、何處からともなく六十位の優しさうな老人が來て、

「わしにもおくれ」

と云ふので、採つてゐた虎杖を二つ三つやると、老人は皮も除らないでべろりと喫つてしまつて、また手を出して、

「もうすこし、おくれよ」

と云つた。そこで又二つ三つやると、又べろりと喫つてしまつて、直ぐ又手を出すので、子供だちはありつたけの虎杖をやつたが、老人は幾何喫つても喫ひたりないと云ふやうに喫つて、

「わしは、虎杖が好きで好きでたまらない。どつさりある處へ伴れてつておくれ」

と云つた。子供たちは舌切雀のお爺さんのやうな人の良ささうな老人に、すつかり懐いてゐるので、

「杉林の方へ往くとあるわよ」

と云つて、老人を伴れて汽車の線路づたひに往つた。往つてゐると小溝が流れてゐた。子供だけは平生其の小溝を飛び越えてゐるので、老人と同時に飛び越えようとすると、老人は畝へべつたりと坐りこんで、

「こんな大きな川は、わしには飛べない」

と云つた。子供たちは老人の云ふ事があまりおほげさであるから、をかしくてたまらなかつた。

「飛べないなんてお爺さんは弱蟲ねえ、こんなとこ、何でもない事よ」

と云つて、皆で老人の手を曳いたり腰を押したりして、其の溝を越して前方の杉林へ往つたが、其處には虎杖が一面に生えてゐた。老人は酷く喜んで、いきなり五六本ぽきぽきと折つて喫ひ、それから懐から嚢口を出して二十錢銀貨を掴みだして、

「さあ、褒美にあげるよ」

と云つて、皆に一枚づつくれた。そして、嚢口をしまひこむなり、其處へ這ひつくばつて虎杖を喫

ひだした。子供たちは老人が夢中になつて虎杖を喫ふ容が面白いので老人の傍に立つて見てゐた。

此の時はもう夕方で、鴉の啼聲が聞え、附近が灰色になつて來た。子供たちは不安になつた。

「歸らうよ」

「お母さんに叱られるわ」

そこで子供たちが歸らうとすると、それまで子供たちの事は忘れたやうにして虎杖を喫つてゐた老人が、不意に顔をあげて、

「わしの家は、何處だよ」

と云つた。老人が變な事を云つたので、子供たちは老人が怖くなつた。子供たちは後退しながら逃げようとした。すると老人は子供たちの方へ指をさして、

「きつね、きつね、きつね」

と云つて體を起すなり、べたんと坐つて何かに怖れるやうに、

「觸るな、觸るな、觸るな」

と顫へ聲で早口に云つたが、やがて兩掌をあはせて子供たちの方を拜んで、

「賴む、賴む、此のとほり賴む、賴む」

と云ふので、子供たちは意味は判らないが逃げる事もできないので、遠くから老人の方を見てゐる

うちに、子供の一人が、

「きつねだア」

と云つて逃げだしたので、他の子供たちも口ぐちに狐狐と叫びながら逃げ歸つた。

子供たちの奇怪な話を聞いて、好奇な村の者か杉林の方へ往つてみた。杉林の出口の田圃の中に、彼の老人が素裸になつて倒れてゐた。村の者は傍へ往つて、

「おい、どうしたのだ、おい」

と云つて聲をかけると、死んだやうになつてゐた老人は、機械仕掛の偶人のやうにぴよこんと跳び起きるなり、犬か何かの走るやうに逃げだした。

「をかしな奴だな」

「なんだ、あれは」

村の者は老人の正體を突きとめようと思つて追つかけたが、別に惡いこともしてゐないから、惡人を追つかけるやうに追つかけることもできない。そこで足をゆるめると、老人も足をゆるめて、後の方を顧眄つてきよときよととしたが、其の態が如何にも人間らしくないので、又追つかけた。追つかけると、また逃げだしたが、足をゆるめると、また足をゆるめて顧眄つたが、其のうちに一本杉の方面へ姿を消して往つた。一本杉は昔から、狐が出ると云はれてゐるところであつた。

天狗の面

某君の家は栃木縣那須郡某村、日光の裏山續きの深い山の中であつたが、家は代代庄屋で、領主が鷹狩に來る度に其の家で宿泊したと云ふから、相當な世家であつたのは云ふまでもない。

其の某君の家に昔から傳はつてゐる天狗の面があつたが、それは丈が二尺もある大きな朱塗の面で、鼻は元より高く、眼玉は青くぎよろぎよろ光り、それで白い髯が拂子を數多喰つ汁けたやうになつて、何所か普通の物と違つたところがあつた。

某君は子供心にそれが怖ろしくてたまらなかつた。それで遊びに夢中になつて、家へ歸る事を忘れてゐる時など、ひよいと其の天狗の面が見えるのだが、面と云ふよりは生きた眞個の天狗か傍へ來たやうに、其の青い眼玉がぎよろぎよろ見えるので、平生顫ひあがつて家へ歸り、それを母親に話すと、

「お前が洟子にならないやうに、天狗さんが番をしてるから、遲くまで遊んでてはいけないよ」

などと云つた。そんな事で某君は、あんな物は早く何處かへ打つちやつちまへばいいと思つてゐたが、其のうちに一家が離散するやうになつて、天狗の面も人手に渡つてしまつた。

一家の離散には怪異がまつはつてゐた。それは某君が七つか八つの時であつたが、それまで眞面目であつた父親が、性格が一變したやうに朝から酒浸りになり、家業も嫌みないのみか、狂人のやうに暴れまはるので、すつかり土地の信用を無くして、從つて家產は傾く一方であつた。

其の父親が某日、平生のやうに鉾つばらつて、春の夕陽によろよろした影法師を曳いて歸つて來たが、丁度其の時、裏手の稻荷の傍で作男が薪を割つてゐた。父親は斧の音を聞いて作男に眼を注け、

「おい、きさまは薪をさすつてるのか、そんな事で割れるか」

と云ひながら、ひよろひよろと作男の傍へ往つて、斧を引つたくるやうに執つて薪を割りだした。

と、其處へ白い小蛇がちよろちよろと這つて來た。それは稻荷の祠の中に棲んでゐて、家の者からお稻荷樣のお使ひだと云はれてゐる蛇であつた。父親はそれを見るなり、

「野郎」

と云つて斧を振りあげた。白い小蛇の出た事を知つて、其處へ來た母親は周章てて止めた。

「そ、それは、お稻荷樣のお使ひぢやありませんか、罰が當りますよ」

それを聞くと父親は物凄い顏をした。

「なに、くそ」

同時に斧が閃いて小蛇の胴は二つになり、刃尖は土に喰ひいつた。

「あれ、たいへんだ」

母親は顔を眞蒼にして顫へた。其處には作男はじめ二三の家族の者も來てゐた。二つになつた蛇の胴體はびんびんと跳ねてゐたが、不意にそれが見えなくなつた。

「おや」

「ゐなくなつた」

「まあ」

父親が白い小蛇を斬つたのは四月の末であつたが、家族の者はそれ以來、今に稲荷様の神罰があるか祟があるかと思つて、戰戰兢兢としてゐたが、別に何事もなく、夏が過ぎて秋になつたところで、果して怪異が起つた。それは家の周圍に植ゑてあつた果樹が皆枯れた事であつた。家の者はいよいよ神罰が來たと思つた。

其のうちに年が明けた。そして其の年の秋になつたところで、他の家は豐作であつたが、某君の家だけは收穫が皆無であつた。從つて一錢の收入もなかつたが、父親の放蕩はすこしもやまないうへに、八方塞がりになつた父親は、何處ともなく姿を隱してしまつた。

それがために家は忽ち潰れて、一家は離散し、某君は氏家と云ふ處にゐる親戚の家へ預けられたが、某君はそれによつて天狗の恐怖から逃れる事ができた。ところで、十二三の比になつて又天狗が現はれるやうになつたが、それは元の自分の家の長廊下の衝當になつた閉扉を開けて出て來るのであつた。

「これから、又以前のとほり、お前の身を守つてやる、何かあつても心配する事はないぞ」

天狗は月に一回必ず現はれたが、某君ももう其の時は年も老つてゐたし、またつまらない夢がはじまつたと思つて、怖いよりも痴ばかしかつた。

やがて某君は十八になつた。其の時になつて某君は麻疹に罹つた。年を取つての麻疹の事とて非常に重く、熱が高かつたうへに、季節が盛夏の候であつたから、某君は晝夜なしに苦しみとほした。

其の時であつた。日中に彼の天狗が大勢の小天狗を伴れて來た。そして彼の天狗は、某君の枕頭に坐り、他の小天狗たちは、某君の蒲團をめぐつて坐つた。そこで某君は又夢でないかと思つて、眼をぱつちりと開けて見たが、それは夢でなくて確に現實であつた。其の時彼の天狗に注意すると、繪に描いた天狗のやうに廣口の長袖を着て、頭に兜巾を戴き、手に羽團扇を持つてゐた。小天狗たちも大小の相違はあれ、皆同じやうな恰好をしてゐた。

「えらい熱ぢや、とにかく、熱をさましてやらう」

と云つて、彼の天狗が羽團扇で煽ぎはじめると、小天狗たちもそれに續いて煽ぎだしたが、其の風は氷よりも冷たかつた。すると苦しかつた某君の氣もちがよくなつた。と、彼の天狗は團扇の手をやめて、

「其の方の體には、もう心配な事も起らぬから、以後姿を見せぬぞよ」

と云つた瞬間、彼の天狗も小天狗も消えてしまつた。某君の病氣は其の後一週間もたたないうちに全快した。

天井裏の妖婆

鎏木清方畫伯の夫人が產褥熱で入院した時の話である。

、其の夫人が入院した時は夜で、しかもひどく遲かつた。夫人は其の時吊臺で病院に運ばれたが、其の途中吊臺の被の隙から外の方を見ると、寒詣らしい白衣の一面に卐を書いた行者らしい男が、手に

した提燈をぶらぶらさせながら後になり前になりして歩いてゐた。そして、目的の病院へ著いたが、玄關の扉が締つてゐるので、しかたなく死體を出入する非常口から入つた。

それから二三日してのことであつた。夜半比、何かのへうしに眼を覺ました夫人が、やるともなしに天井の方へ眼をやつたところで、其處に小紋の衣服を著て髮をふり亂した老婆がゐて、それが折釘のやうな頸をさしのべて夫人の顏をぎろりと見た。夫人はびつくりしたが、すぐ、かかる際に取るべき傳說に氣が注いた。

（此奴に負けてはたいへんだ）

と思つたので、きつと唇を嚙んで老婆の顏を睨みかへしたが、一所懸命であるから數瞬もしなかつた。と、老婆が忌いましさうに舌打ちをして、

「おまへさんは、剛情な女だね」

と云つたかと思ふと、後ずさりして隅の方へ往くなり、消えて見えなくなつた。其處へどたどた足音がして、受持の看護婦が飛びこんで來たが、看護婦は呼吸をはずませながら、

「何か變つたことはありませんでしたか」

と云つた。夫人が、

「べつに、なにも」

と云ふと、看護婦ははじめてほつとしたやうな顏をして、

「今、奧さんの室から何人か出て往つたやうな氣配がしますから、不思議に思つてますと、此の次の次の病室にゐる患者さんが、ふいに天井へ指をさして、何か來た、何か來たと云ひながら、呼吸を引きとりました」

と云つた。それを聞くと氣丈な夫人も思はずぞつとした。

遲塚家の怪異

小說家遲塚麗水の家に傳はつてゐる怪談で、私も一度麗水翁の口から聞いたことがある。

遲塚家はもと旗下で、當時常州鹿島郡東下村に知行所があつた。それは弘化二年の五月のことであつた。その時麗水翁の祖父は知行所へ往つてゐたが、某日江戸の邸から飛脚が來て夫人に男の子が生れたと云ふ知らせがあつた。祖父は初產でしかも男の子だといふので非常に喜んだ。それに翌日がちやうど端午の節句であつたから、村役人や知己を陣屋へ招いて祝宴を催した。

そして、酒宴が終つて來客が歸つたので、祖父も良い氣持で床に就いて寢てゐたところで、境の襖が開いて何人かが入つて來た。洗ひ髮を麻で束ねた蒼白い顏をした女で、それが嬰兒を大事さうに抱いてゐた。それは江戸の邸でお產をしたばかりの夫人であつた。夫人は枕頭へ坐るなり抱いてゐた嬰兒を見せて、

「この子は丈夫でございますが、私は產後がわるくて、今夜はもうだめでございます、どうかこの子を可愛がつて育ててくださいませ」

と云つてから烟のやうに消えてしまつた。祖父は不思議でたまらないので、急飛脚を爲たてて江戸へやつた。すると入れちがひに江戸の邸から飛脚が來て、節句の夜、夫人が產褥で歿くなつたといふ知らせがあつた。

後で調べてみると、夫人は其の夜附き添ひの者に、知行所の方向を問うて其の方の小窓を開けさせ、涙をいつぱい溜めた眼で、嬰兒の顏を見たり、知行所の方を見たりしてゐて歿くなつてゐた。その嬰兒といふのが麗水翁の父で、父はよくそれを麗水翁に話して、「おれは、幽靈に抱かれて銚子へ往つた」といつたさうである。

三千圓の借金

もう故人になつた尾上梅幸がまだ壯い時のこと、夜遲く橋の名は判らないが歌舞伎座近くの橋を渡つてゐたところで、橋の中央に唐草模様の量ばつた袱衣包が落ちてゐた。梅幸は一度其處を往きすぎたが、氣になるので引返して、結目の間から手をやつてみると紙幣のやうであるから、これこそ天の與へだと其のまま持つて歸り、そつと包を解いてみると十圓紙幣ばかり入つてゐるので壁厨の中へ匿くしたが、いくらあると云ふことが知りたいが、うかつり數へてゐては家内の者に見られるので、最眉客で日本銀行へ往つてる者に逢つて、それとなく、

「十圓紙幣か、これ位あるといくら位あります」

と云つて量を手つきで見せると、銀行員は、

「さあ、それ位あると三萬圓は動かないだらう」

と云つた。梅幸はひどく喜んで、三萬圓あるならせうせう遊んでもいいだらうと、それから盛に遊びだして、三千圓位借金をこしらへたので、拂つてやらうと思つて、壁厨の奥深くしまつてあつた袱衣包を出さうとしたが、影も形もなかつた。しかし、盜人の入つたけいせきもないので考へ考へして

ゐると、袱衣包を拾つたことは夢であつたと云ふことが判つた。

畫家の死

横井春野君が某日神宮球場へ野球を見に往つての歸途、牛込納戸町まで來たところで、向うから友人の月岡耕漁畫伯がやつて來たので、

「やあ、しばらく」

と云つて懷かしさうに寄つて往くと、ふと月岡君の姿が見えなくなつた。おやと思つて其のあたりを見まはしたが、何處にも見えないので、不思議に思ひながら歸つて來た。するとまもなく月岡君の令息から、

「チチシス」

と云ふ電報がとどいた。横井君は月岡君が病氣してゐることとも知らなかつたので、驚いて月岡君の家へ往つてみた。耕漁畫伯の死んだのは、横井君が納戸町の街路で其の姿を見たのと同時刻であつ

た。

疫病神

長谷川時雨女史の實驗談であるが、女史が佃島にゐた比、令妹の春子さんが腸チブスに罹つて離屋の二階に寢てゐたので、其の枕頭につきつきりで看護してゐた。

それは夜であつたが、其の時病人がうなされてゐた。女史は何の氣なしに床の間の方へ眼をやつた。其處の床の間の隅に十五六ぐらゐの少年がゐて、それが腕ぐみしてぢつと蹲んでゐたが、其の髪の毛は焦げあがつたやうで、顏は細長い茄子の腐つたやうな顏であつた。女史はびつくりしたが、かねて疫病神のことを聞いてゐたので、此處で負けては病人が死んでしまふと思つて、下腹へぐつと力を入れて其の少年を睨みつけた。すると、少年の姿が煙のやうに消えるとともに、うなされてゐた春子さんが夢から覺めたやうになつた。

其のうちに春子さんの病氣もすつかり癒つたので、女史は箱根へ出かけて往つた。國府津で汽車をおりて、其處から電車で小田原へ往つたが、電車が小田原の幸町の停留場へ著いた時、何の氣なしに窓の外を見ると、停留場の名を書いた大きな電柱に寄りかかつて、ぼんやりと腕ぐみしてゐる少年があつた。それは彼の茄子の腐つたやうな顏色の少年であつた。

女史はそこでまた下腹へ力を入れてぐつと睨みつけた。と、少年の姿はまた消えてしまつた。

座蒲團大の男の顏

長谷川時雨女史が牛込の赤城下に住んでゐた時のことであつた。某時阿郎の三上於菟吉君が、銚子にゐた詩人の今井白楊君に誘はれて、銚子へ遊びに往つてゐたところで、齒に故障が出來たので歸つて來た。阿郎が歸れば留守居があるので、女史は其の翌日、久しぶりに鶴見の實家へ往つて夕方になつて歸つて來た。女史は阿郎が待ちかねてゐると思ふし、己でも早く阿郎の顏が見たいので急いで歸つて來たが、女史の家は煉瓦塀に沿うた巷の奥で、其處には櫟があつて、頭の上に其の青葉が覆ひかぶさるやうに繁つてゐた。

女史は薄暗くなつた其の青葉の下を通つて門口まで歸りつき、耳門の扉を開けて入らうとして何氣なく耳門の上になつた青葉の中へ眼をやつた。と、其處に座蒲團大の男の顏があつて、それが此方のはうを覗きこむやうにして美しい白い齒を見せてゐた。それは今井白楊君の顏であつた。

女史はびつくりして家の中へ駈けこんだ。家の中は眞暗で三上君はゐなかつた。女史は急いで電燈を點けた。机の上の原稿紙に三上君の筆蹟で、

「三富と今井が死んだ、死骸を探しに銚子へ往く」

と書いてあつた。三富とはやはり詩人の三富朽葉君のことで、今井君とともに銚子の別壯に住んでゐたが、其の日二人は銚子の海で溺れて死んでゐた。

窓に腰をかけた女

これは子母澤寛君の直話であるが、某年の夏、子母澤君は青森縣の日本海に面した小さな町へ旅行して、某と云ふ一軒の小さな旅館へ入つた。僻遠な田舍町に氣のきいた旅館のあらうはずはないが、

それにしてもあまりに汚い家で、其のうへにランプであつた。

其處は二階が二室になつて、階段の昇り詰に堺の襖があつた。子母澤君は其の左の室へ通されたが、燈明がランプで薄暗いので物を讀む氣もしない。それに疲れてゐたので假がすむとすぐ寢たが、幾時比であつたか眼が覺めた。すると、隣の室から微な女の啜り泣くやうな聲が聞えて來た。寢る時まで何人もゐなかつたが、それでは遲くなつて客が來たのか、何にしろ覗いてやれと、そつと這ひ出して往つて襖の隙間から覗いてみた。其處には一方に角形に切つた窓があつて、それに一人の女が前方向に腰をかけてゐた。無論前方向になつてゐるので、顏も年齡ごろも判らなかつた。と、女は、

「何人、其處から覗いてゐるのは」

と云つて咎めたが、此方はランプを消してゐるので見えるはずがなかつた。それに其の聲が陰氣であつた。子母澤君は厭な氣がして寢床の中へ潛りこみ、朝になるのを待ちかねて、再びそつと覗いてみたが何人もゐなかつた。それでは早く發つて往つたのかと思つて、火を持つて來た婢に聞くと、何人も泊つた者はないと云つた。

飯坂溫泉の怪異

今はもう故人になつた小說家佐佐木味津三君がよく人に話した話である。

某日佐佐木君の友人がやつて來て、

「君、えらい物を見て來たよ」

と云つた。佐佐木君は其の友人が數日前、飯坂溫泉に往くと云つてゐたので、其處で何か見て來たものだらうと思つて、

「鼻のかけた美人でも見て來たのか」

と云ふと、友人はひどく眞面目な顏で、

「いや、美人は美人だが、たいへんな奴だよ」

と云つた。そこで、

「私窩子か」

「そんなものぢやない、ぞつとする奴だよ」

「お化か」

「さうだよ」

「まさか」

「いや、ほんとだ、僕は飯坂のかつてが判らないものだから、汽車の中で聞いた××館と云ふのへ行つたのだ、ところが、それがたいへんな處だつたよ」

「ほう」

佐佐木君もついつりこまれた。

「飯がすんで、机に向つてたが、さうだなあ、十一時比だらう、睡くなつたから、湯にでも入らうと思つて、下へおりて往つて、湯につかつてゐると、浴場の一方になつた硝子戸へ、髮の毛をもじやもじやと垂らした顏の眞蒼な、男とも女とも判らない者が、はつきりと映つたぢやないか、僕はぞつとして立ちすくんだよ」

「何かの錯覺だらう」

「いや、さうぢやない、僕も今時分お化なんかあつてたまるものかと思つて、見なほしたのだ、すると、其奴がふらふらと風のやうに往つて、すぐ見えなくなつたのだよ」

佐佐木君はもうまぜかへさなかつた。

「さうか、なあ」

「そんなわけで、僕は、一晩で其の家を逃げだしたよ」

友人はそれから他の旅館へ往つて二三日ゐたが、其の夜のことが頭にひつかかつて、仕事をする氣にもなれないので歸つて來たと云つた。其の友人が歸つた後で、佐佐木君は夫人と友人が見たと云ふ怪しい物に就いて話しあつてゐたところで、佐佐木君の許へ出入してゐる大學生が遊びに來た。で、早速其の話をすると、學生が、

「それはおもしろい、僕が往つて調べて來ます」

と云つて、其の夜のうちに一人の朋友を伴れて出發して、飯坂へ往き、問題の××館へ往つた。そして、夜の十一時になるのを待つて、學生は伴れて往つてゐる朋友に、

「それでは、僕が先へ往く」

と云つて、一人で手拭を持つて浴殿へおり、そして、湯に入つたが、何かしら鬼魅がわるくてぢつとしてゐられない。それを強ひて押へて、手を洗つたり顎のまはりを洗つたりしてゐた。と微に物の氣配がするので、おやと思つて硝子戸の方を見た。髑髏のやうに變せて、眞蒼な顏をして髮を振りみだした怪しい人の姿が映つてゐた。

（これだな）

學生の心は顫へた。同時に怪しい物の姿はちらちら動いて、風のやうに向うの方へ消えて往つた。

學生は夢中になつてゐた。學生は浴槽から飛び出すなり、體も拭はないで浴衣をひつかけたまま廊下へ出た。廊下には電燈が明るく點いてゐた。

廊下の行詰めには二階へあがる階段があつた。學生はどかどか階段をあがつた。中程へ往つたところで、微な衣ずれの音がした。何人か人が來たなと思つたので、學生はほつとした。華美な振袖姿の女の子が、其の袂をひきずるやうにして降りて來るところであつた。それは十六七の可愛らしい芸妓であつた。學生はますます心に餘裕ができた。

「こんばんは」

すると芸妓は莞としながら摺れちがつておりて往つた。

朝になつて學生は、朋友を伴れて主翁の室へ往つた。主翁は勘計處で新聞を讀んでゐたが、二人が來たので急いで眼鏡を除つた。

「お早いぢやありませんか」

主翁はさう云ひ云ひ愛想笑ひをした。學生は主翁をきつと見た。

「へんなことを聞くやうですが、此の家には、何か變つたことがないのですか」

「へんなことと申しますと」
「怪しい物だよ」
「それぢや、見なすつたか」
主翁は膝をなほした。
「やつぱりほんとですか」
「何處で見なすつた」
「昨夜おそく湯に入つてると、彼處の硝子戸へ」
「どんな恰好をしてました」
「眞蒼な顏をした髮の長い」
主翁はちよつと眼をおとした。
「お客さん、それは、家の伴ですよ、お恥かしうございますが、高等學校の試驗をしくじつて、氣がへんになつたものですから、十一時までは出さないことにしてありますが、それなら何でもありませんよ」
それなら何でもないと云ふからには、他になんでもあるものがなければならぬ。
「それでは、他に、何か」

「他にはなにもありませんが、あなたは他に、べつに變つたものにでも、お遇ひにならなかつたでせう」
學生はちよつと考へたが、べつに怪しい物にも遇つてゐなかつた。
「さうだなあ、べつに何にも遇はなかつたが、湯殿から飛び出して、二階へあがつてく時、上から雛妓のやうな女がおりて來たが、其の他には」
「雛妓のやうな女に、其の女に遇ひましたか」
主翁の眼が光つた。學生はそれが氣になつた。
「遇つた、遇つたが、あれは、なんだね」
「お遇ひになつたなら、隱しませんが、それですよ」
「それ、それとは、其の雛妓が、お化に關係があるのか」
「關係ぢやない、あれが、さうですよ」
「え」
「さうだと云ふのですよ、昔から此の家にゐるのですが、家内には見えませんよ」

三原山紀行

市川猿之助の弟の八百藏が商業學校へ往つてた時、十九であつたが、青春の惱みとでも云ふか、ひどく厭世的になつて、ふらふら家出して伊豆の大島へ往つた。家では八百藏が居なくなつたので心配したが、其の夜紅葉館でお母さんの踊りがあつたので、其の方へ往かなくてはならないし皆で困つた。

一方靈岸島から船に乘つて大島へ渡つた八百藏は、元村の旅館に二晩ゐて考へた結果、いよいよ投身自殺することに腹を定めて、遺書を書き、所持品は小包にして船著場へ持つて往き、萬端準備が調つたので三原山へ向つた。

其の日は朝から雲行が惡くて暴風雨の兆があつたが、死ぬる身に天氣なんかどうでもよかつた。二時頃になつて頂上へ辿り著いたが、無論投身自殺の流行しない時であるから、登山者もなく山の上は横なぐりに吹く風ばかりであつた。八百藏は其の風に吹かれて噴火口の傍まで往つたが、すぐには飛び込むこと亦できなかつた。そこで風をさけながら強い衝動の興つて來るのを待つてゐた。と、其の眼に兄の猿之助の姿が映つた。八百藏はほつと吐息した。

其の時はもう夕方になつてゐた、ふと見ると噴火口の中から噴出してゐる水蒸氣が赤くなつてゐた。八百藏は噴煙の赤いのがたまらなく厭であつた。八百藏はふらふらと起つて引返すともなしに引返した。

風はますます酷かつた。八百藏は火口原の砂をあびながらへとへとになつて旅館へ歸つたが、其の晩から暴風雨になつて翌日も其の翌日も東京行きの船も出ないので、船著場へ托してあつた郵便物は旅館へ歸つて來た。八百藏は金はないし郵便も出せなければ電報も打てないので、やつぱり死んでしまはうと思つて室の中で考へこんでゐた。すると學生の一人が入つて來た。それは其の旅館へ著いた時から、時をり顏をあはせてゐる美術學校の學生であつた。

「君は兼光君の知つてる喜斗慰君ぢやありませんか」

兼光は家の知りあひであつた。八百藏は煩さかつたが返事をしないわけにはいかない。

「さうです」

「さうですか、どうもさうでないかと思つてましたよ、君はひどく沈んでるやうですが、どうかしたのですか」

八百藏は困つた。

「いや、べつに」

「何もなけれやいいのですが、厭世感でもおこしてはいけないですから、それを聞きに來たのですよ、どうです、此の家へは、大學生も三人來てゐるのです、話さうぢやありませんか」

八百藏は其の日から四人の友人ができたので、氣もちも晴やかになつた。ところで、其の晩になつて暴風雨の前から八百藏の隣の室に止宿してゐた女客がゐなくなつたので、宿では大騒ぎになつた。八百藏はじめ學生だちの一行も傍觀してゐられないので、宿の人に協力して提灯を點けて探しに往つて、御岬の上で女客の履いてゐた下駄を見つけた。

いよいよ投身自殺したと云ふ事になつて探してゐると、其の夜の明け方になつて磯に打ちあげられてゐる女客の死體を見つけたが、それには眼と云はず口と云はず砂が一ぱいつまつてゐた。

同時に天氣もよくなつたので、八百藏は東京へ電報を打つた。すると、東京から伯父さんが迎へに來ると云ふ返電があつた。

其の日の夕方のことであつた。八百藏はじめ學生の一行が湯に入つてゐたところで、大學生の一人が湯槽から出て窓の方へ往つた。其處は宿の裏庭に面したところであつた。と、その學生は窓の外で何か見つけたのか、

「うわッ」

と云つて逃げて來た。

「どうした」

「おいどうしたのだ」

大學生は眞蒼な顏を見せて窓の方へ指をやつた。そこで皆が一齊に窓の外へ往つてみた。微暗くなりかけた庭へ乾したままになつてゐた女物の衣服の兩袖から蒼白い手がぶらさがつてゐた。それは自殺した女客の身につけた衣服を乾してあるところであつた。

空を見る女

小說家の綿貫六助君が、仙臺の歩兵聯隊にゐた比、大工の家に下宿してゐたが、其處は廣瀨川に沿うた微暗い樹立の中の二階家であつた。

ある蒸し暑い月の明るい晩であつた。一ぱい飲んで良い氣もちになつて眠つてゐた綿貫君は、ふと何かの氣配を感じて眼を開けた。開け放した窓の外に夜更の濕つぽい風をうけて、廂に覆ひかぶさつた桐の葉がかさかさと鳴つてゐた。と、枕頭になつた緣側で、ばさりと云ふ音がした。おやと思つて

顔をあげたところで、すぐ眼の前に墨繪のやうな黒い影がぼんやりと浮んだ。綿貫君はぢつと瞳をこらした。と、其の時黒い影がするすると動きだしたが、同時にそれが美しい女の姿になつた。眞白い襟元へ亂れかかつた鬢の毛を夜風になぶらせて、うつむきかげんに歩いて往く其の女は、大柄な紺と茶の縱縞銘仙を着て、淡紅色の伊達卷を締め、朱鷺色の袖口をちらちらさせながら梯子段の方へ往つた。綿貫君は數瞬もせずそれを見つめてゐたところで、女はやがて梯子段の處まで往つてちらと此方を振り返つた。それは何とも云ひやうのない凄艶な顔であつた。それには綿貫君もぞつとした。

翌日になつて綿貫君は、氣もちがわるいので、近くの下宿へ移つたが、其の夜のことが氣になるので調べてみると、其處には此の春まで肺を患つてゐた壯い娘と老夫婦が住んでゐたが、其の娘はいつも二階の窓から華美な模樣の衣服を見せて、寂しさうに空を見てゐたが、やがて病氣が重くなつたので他へ越して往つたと云ふことであつた。そして、まもなく其の娘の死んだのと、綿貫君が怪異を見た時刻が同一であると云ふことも判つた。

按摩の阿岩

昭和八九年の事であらう。俳優の中村時藏が兄の吉右衛門と九州を巡業して、其の歸りに東海道を登つて來た。そして、某市で興業した晩、唯ある旅館へ泊つたが、ちやうど夏の月の佳い晩であつた。其處は離屋になつてゐて、廊下を距てて吉右衛門と時藏が向ひあひに泊つてゐるばかりで、他には客がなかつた。其の晩は蒸し暑い晩で、時藏は眠れないので電燈を消して、廊下へ出て涼んでゐた。もう一時を過ぎてゐた。と、吉右衛門の聲がした。

「おい、どうだ、おまへも按摩を執らないかね」

注意すると吉右衛門は、按摩を執つてゐるやうであつた。時藏もそれと知つて按摩を執らうと思つた。

「執つてもいいです」

「それでは、後でやつてもらふがいい」

「さうですか」

「それで・按摩がすんだら、名を聞くといい」

名を聞いて何にするだらうと思つたが、別に氣にもとめないで蚊帳の中へ入つて、横になつてゐるうちに眠つてしまつた。そして、暫くして眼を覺してみると、按摩が來て脚を揉んでゐた。其の時開けつ放しにしてある室の中へは、蒼白い月の光がさしこんでゐた。時藏はどんな按摩だらうと思つて

月の光に透してみた。髪の毛の薄い中年の女で、それが左の眼の縁に黒い大きな痣があつて、其のうへ眼が赤んべいをしたやうに瞼が捲くれあがり、おまけに鐵漿を附けてゐた。時藏は一眼見るなりぞつとして總毛だつた。

「あ、あんたは、何と云ふのだ、何と」

按摩はすましたものであつた。

「いはと申しますよ」

「い、いはだ」

「はい、阿岩でございますよ」

時藏ははじめて兄が名を聞けと云つたのは、これだなと思つてやつと安心はしたものの、氣もちが惡いので按摩の手を蹴除けるやうにして脚を引いた。

「いいいい、もういいから歸つてくれ」

「よろしうございますか、それでは按摩代をどういたしませう」

「帳場でもらつて往け」

時藏は按摩が往つたので淸せいした。時藏は苦笑しながら枕をなほしてゐると、又其の按摩が入つて來て蚊帳の外へ立つた。

「帳場は、みんな休んでをりますが」

時藏は忌いましいので枕頭の鞄から銀貨を摑んで放りだした。按摩は其の銀貨を大事さうに拾つて出て往つた。

怪談會の怪異

震災の前であつた。白畫堂の三階で怪談會をやつたことがあつた。出席者は泉鏡花、喜多村緑郎、鈴木鼓村、市川猿之助、松崎天民などで、蓮の葉に白い强飯を乗せて出し、燈明は電燈を消して盆燈籠を點け、一方に高座を設けて、譚をする者は皆其の高座にあがつた。

數人の怪異譚がすむと、背廣服を着た肥つた男があがつた。それは萬朝報の記者であつた。

「此の話は、私の家の秘密で、公開を禁ぜられてをりますが、もう時代もすぎましたから、話してもいいと思ひますから話しますが、これは田中河内守を殺した話でありますが、それを殺した者は、私の祖父……」

と云ひかけて詞がもつれだした。一座の者はおやと思つて記者の顏へ眼をやる間もなく、其の記者は前のめりになつて高座の下へ落ちたので、怪談會はしらけてしまつて、未明までやるはずのものが、一人歸り二人歸りして、十二時頃には何人もゐなくなつた。そして、其の記者は腦溢血のやうな病氣で、三日ばかりして歿くなつた。これは市川猿之助の實話を其のまま。

亡者會

蒲田の某撞球場で御家連の天狗たちが集つて某夜亡者會と云ふのを催した。それは最も成績の悪い者を亡者に仕立てて笑ひあふといふ悪戯半分の會であつた。其の晩には十人ばかりの仲間が集まつてゐた。皆負けて亡者にせられてはたまらないと思つてゐるので、一生懸命になつて技を戰はした。其の結果七勝を得たものが其の晩の優勝者になり、一勝を得たものが三人あつて、それが競技によつて其の中から亡者を定めることになつた。そこでいよいよ亡者戰がはじまつた。

「おい、慎重の態度で」

「しんちうのパイプで」

もう亡者にせられる恐れのない者は面白かつて半壜を入れた。そして、平生仲間からガチと云はれてゐる勝負運の強い男で、負けこすなんぞと云ふことは信ぜられない會社員某氏は、其の晩にかぎつて當りが出ず、殊に彼が最も得意とするマッセーが全然駄目になつたので、たうとう亡者になつたのであつた。此の大きな番狂はせは仲間のものをいやがうへに喜ばした。

「いよう、亡者先生、」

「おめでたう」

「痛快、痛快」

仲間の者ははしやぎながら、某氏の額に三角の紙を貼り、經帷子を被せて慰勞會を開き、例によつて夜の更けるまで騒いだが、亡者になつた某氏は氣が欝して面白くないので、ビールを飲んでもうまくはなかつた。そして、會が終つて皆に別れて家へ歸つたところで、病氣でもないのに祖母が歿くなつたと云つて大騒ぎをしてゐた。

後になつて某氏が時間を繰つてみると、祖母の歿くなつた時は、己が亡者に決定した時であつた。

天井からぶらさがる足

小説家の山中峯太郎君が、廣島市の幟町にゐた比のことであつた。それは山中君がまだ九つの時で、某夜近くの女學校が燒けだしたので、家人は裏の畑へ往つてそれを見てゐた。其の時山中君は、ただ一人臺所へ往つて立つてゐたが、何かしら惡寒を感じたので、ふと見ると直ぐ頭の上の天井から不意に大きな一本の足がぶらさがつた。婢室の燈は其の足の皮膚の色から生えた毛まではつきり見せたが、殊に驚かされたのは、其の指が大人の腕ぐらゐあることであつた。山中君は怖いと云ふよりもただ呆氣にとられてそれを見つめてゐると、二三分も經つたかと思ふ比、其の足は烟のやうにだんだんと消えていつた。

手鏡

ある夏、詩人の瀬田彌太郎君の友人が旅に出たことがあつたが、時間のつがふで次の部落へ往くことになり、月の夜路を歩いてゐるうちに、道に迷つて野の中の一本路へ出た。

友人はしかたなしに悲觀しいしい歩いてゐると、後の方から何人か來た。友人ははつとして其の人の近づいて來るのを待つてゐた。きやつきやつと云ふやうな變な女の笑ひ聲が聞えて來た。淋しい野中でしかも女が一人で何を笑つてゐるのだらうと思つた。友人は不思議でたまらなかつた。

うしろから來た者は、ますます近づいて來たが、それがどうも髮を振りみだした女のやうであつた。友人は足が硬ばり體が縮んだが、それでも怕いものみたさにおそるおそる對手を見た。と、其の對手の頭の上に圓いきらきらする鬼魅わるい光があつて、それが消えたり光つたりしてゐた。

友人は其處へへたばつてしまつたが、それでも正體を見きはめないと猶さら怕いので、また恐る恐る眼をやつた。同時に怪しい女は其の前を通りすぎた。それは壯い女で、それが小さな柄のついた鏡を空へ投げ投げしてゐるところであつた。きやつきやつと云ふ笑ひ聲は、投げた鏡をうまく受けとめた時の喜びの笑ひであつた。それは狂人であつた。友人はやつと安心して女の後から歩いて往つた。

格子戸に挾まれた老婆

新橋の花千代と云ふ歌妓がしてゐたと云ふ話である。

麻布の市兵衛町に常磐津の師匠をしてゐた老婆があつて、新橋方面へも時どき出稽古に來てゐた關係から、花千代も其の弟子の一人になつてゐたが、其のうちに老婆が病氣になつて死んでしまつた。

老婆が死んでから數日して、老婆の遺族が一枚の葉書を持つて花千代の許へ來て、

「こんな葉書をいただきましたから、彼方此方差出人を探しましたが、どうしても判りません」

と云つて來た。其の葉書には、

「御病氣と承はりましたので、×月×日の午後×時すぎにお見舞にあがりますと、お宅の格子戸を細く開けて、痩せたお婆さんが格子戸に挾まれたやうに家の中を覗いてゐましたので、ぐあひが惡くてどうしても入ることができませんから、其のまま失禮して歸りましたが、どうぞ一日も早く御全快あそばしますやうに」

と書いてあつたが、其の日時がちやうど老婆の呼吸を引きとつた時刻とぴつたりあつてゐた。

お化の面

怪談浪曲師浪華綱右衛門の家に、怪奇なお化の面があつた。縦が二尺横が一尺で、左の眼は乳房が垂れさがつたやうに垂れて、右の眼は初月のやうな半眼、それに蓬蓬の髪の毛、口は五臓六腑が破れ出た血に擬はして赤い繪具を塗り、其の上處どころ濃鼠の布で膏藥張をしてあつた。

それは初代林家正藏が秘藏してゐた物であつた。其の正藏が百六歳の長壽を保つて、沼津で歿くなつた際、形見として弟子の中川海老藏に與へたが、海老藏は昭和五年の秋、女房に逃げられて、其の苦惱のうちに病氣になり、久しく病床に呻吟してゐたが、某日杖に縋つて、弟子の綱右衛門の家へ現はれ、

「人間は、今日在つて明日無い命だ、これをおめえにやるぜ」

と云つて風呂敷包の中から執りだしたのが、其のお化の面であつた。綱右衛門は喜んだ。

「師匠、これを、わつしに」

「形見だから、執つといてくんねえ、乃公の後を繼いでくれるのは、おめえだけだ」

海老藏はそれから夕陽の影法師のやうな力ない足どりで歸つて往つたが、それから一週間して綱右衛門は、海老藏の死亡の通知に接した。

其の後綱右衛門は、お化の面を用ひて人氣を博するつもりで、深川の櫻館でそれを冠つて四谷怪談をやつたところで、前晩まで三四百人來てゐた客が、次の晩には十四五人になり、其の翌晩は、木戸で喧嘩が起つて血の雨が降つた。

綱右衛門は恐れをなしてお化の面をしまひこんだが、昭和七年になつて、久しぶりに執り出して、弟子の綱行に冠せ、記念の寫眞を撮つて、其の後でビールを飲んでゐたところで、平生は猫のやうに溫和しい綱行がちよつとした事で綱右衛門に喰つてかかつたので、

「なにを、此の野郎」

と云つてビール瓶で毆りつけたので、綱行は負傷するし、つづいて女房が病氣になつてなかなか癒らず、そんなこんなで家作は人手に渡つてしまつた。其の時遊びに來たのが伊藤靜雨であつた。

綱右衛門は靜雨に不吉なお面の話をして別れたが、翌日になつて靜雨から夫人の歿くなつたと云ふ通知を受け取つた。

そこで綱右衛門は、すつかり怖氣をふるつて、昭和十一年三月、菩提寺の淺草玉姫町の永傳寺へ奉納して、永久に同寺に封じこめる事にした。

病夫の身代になる

神靈科學研究會員藤本峰太郎氏の令兄は勝太郎氏であつた。生れは甲州北都留郡初狩村。二人の父の淸左衛門と云ふのは、郡長までやつた地方の名家であつたが、明治二十三年に病死したので、家政の改革をよぎなくされた。

其の結果、藤本家は勝太郎の妹に分家させて、分家に老母の扶助を賴み、勝太郎夫妻は上京して、國產品を賣買することになり、明治二十五年二月十一日上京して、麴町區飯田町一丁目二番地に家を持つた。

其の勝太郎の妻女の登宇は、小學校時代の成績が群をぬいてゐたのみならず、氣質もしつかりしてゐたから、土地でも一目おかれてゐた。さうした登宇であつたから、三人の子女の世話をする傍、一切婢僕を使はず、主人の商賣の手助けは云ふもさらなり、家計の事から炊事裁縫の事まで一身に引受けて、身を粉に碎いて働いたが、明治二十八年の九月になつて、勝太郎が突然腦脊髓症に罹つて、

一方の手と一方の足が動かなくなつたので、登宇は大役がまた一つ殖えたのであつた。其の時手傳に來たのが峰太郎の妻女になつた彌生で、其の時十三であつた。其の彌生と登宇の一心不亂の看護の効も無く、勝太郎の病勢は日一日と募つて、十一月になつて醫者から絶望の宣告を受けた時には、登宇の失望は非常なものであつたが、やがて一大決心をした。

それは十一月二十五日の事であつた。登宇は彌生に、これは尋常一様の事では到底癒らないから、此の上は神様にお縋りするより他に途がない。私はこれからお願ごめに往くから、病人をよろしく頼むと云つて、三女の濱江を抱いて、人力車に乘つて高輪の方へ往つたが、往つたきりで、待つても待つても歸つて來なかつた。彌生はじめ家の者は、夜遲くまで心配してゐると、ちやうど夜半の十二時比になつて、臨終に近い勝太郎の耳にはつきりと登宇の聲が聞えて、

「私は貴郎の身代になつて水死しますが、其のかはり貴郎の病氣は、夜明け前にすつかり癒りますから、驚かないでゐてください」

と云つたが、無論それは病人だけに聞えたもので、彌生は後になつて勝太郎からそれを聞いたのであつた。

登宇の聲が聞えてから約小一時間して殆んど死んでゐた勝太郎が、忽ちうウんと云つて唸るとともに、

「水を、水を」

と云つた。泣きながら勝太郎の枕頭にゐた人びとは、慌てて水のあるコップを差しだすと、病人は手を出してそれを受けた。それも不隨であつた方の手であつた。おや彼の手が動いたと一同が驚いてゐると、勝太郎も正氣になつて、やつぱり不隨になつてゐる方の足を屈めたが、これも譯なく屈むのであつた。おや足も動くと一同がまた驚いてゐるうちに、勝太郎は床をすべりおりて正座した。彌生を初め枕頭の人びとは、今更ながら鬼魅わるくなつて立ち騒ぐのを勝太郎は靜に制して、

「登宇が俺の身代になつたからだ、先刻登宇が來て話しをしたから、まちがひはない、とにかく濱邊を探してくれ」

と云つた。そこで藤本家では夜の明けるのを待たずに、人を頼んで海岸を探したところで、朝になつて其の捜索人の一人が高輪署で女の死體を引き執つたと云ふ事を聞いたので、驅けつけてみると果して登宇であつた。死體發見の順序は、其の夜十二時過、高輪署の巡査が海岸を巡邏してゐると、子供の啼き聲が聞えたので、往つてみると、二十五六の女の死體の傍で[illegible]頭是ない女の子が啼いてゐるのであつた。そこで死體とともに女の子を警察へ引き執つて、心あたりを調べてゐると、品川の宿屋から、一人の女客が小さな女の子を伴れて、晩飯を喫つて出て往つたまま返つて來ないと云つて品川署へ屆け出てゐると云ふ事が判つた。

藤本家では登宇の死體を日暮里で荼毘に付して、郷里の墓地に埋葬した。法名を俊芳院賢室貞操大姉。

勝太郎は其の後すつかり健康を恢復したが、事件の三日目から一種の神憑狀態になつて登宇の姿を見たり、又時どき登宇から不思議な事を敎へられた。

勝太郎はそれから淺草の正覺寺へ日參して、登宇の菩提を弔つてゐたが、二十年ばかり前に歿くなつた。彌生は事件の二年後、峰太郎と結婚した。此の話は大正十三年、彌生の話したもので、其の時彌生は四十六歳であつた。

海坊主

これは小說家泉鏡花氏の話である。

房州の海岸に一人の壯い漁師が住んでゐた。某日其の漁師の女房が嬰兒の守をしながら夕飯の準備をしてゐると、表へ何處からともなく薄汚い坊主が來て、家の中をじろじろと覗込んだ。女房はそれを見て、御飯でも貰ひに來たのだらうと思つて、早速握飯をこしらへて持つて往つて、

「これを」

と云つて差しだしたが、坊主は横目でちらと見たばかりで手を出さなかつた。女房はやさしかつた。それでは御錢がゐるだらうと思つて、今度は錢を持つて出て、

「それでは、これを」

と云つたが、坊主はそれにも見向きもしなかつた。女房は鬼魅わるくなつて、金を持つたまま後ずさりして庖厨の方へ引込んで往つたが、怕ぐて脊筋から水でもかけられたやうにぞくぞくして來たので、早く所天が歸つて來ればと思ひながら慄へてゐた。其のうちに四邊がすつかり暗くなつて、時化模樣になつた海がすぐ家の前でざわざわと浪をたてだした。坊主はと見ると最初の處に突つたつたまま身動きもしない。其の影のやうな眞黑い坊主の姿を見ると、女房はもうゐてもたつてもゐられないので、そつと裏口から隣へ遁げださうとした。と、其處へ附近の壯い漁師たちがはしやぎながら船からあがつて來た。それと見て女房は驅け出して往つて、

「何人か來ておくれよ」

と云つて事情を話した。皆血の氣の多い連中のことだから、

「そいつは怪しからん、やつつけろ」

と云つて、坊主を取り圍んでさんざんに撲りつけ、倒れるところを曳きずつて往つて、浪うち際へ投げだした。

まもなく所天の漁師が歸つて來たので、女房は其の話をすると、漁師は何かしら氣になるとみえて、飯の後で磯へ出てみたが、其處には暗い海が白い牙をむいて猛り狂つてゐるだけで、それらしいものは見えなかつた。

漁師はそれから間もなく寢たが、夜が更けて往くにしたがつて外はますます荒れ、物凄い浪の音が小さな漁師の家を搖り動かすやうに響いた。そして、一時すぎと思ふ比何處からともなく、

「おういい、おういい」

と云ふやうな悲痛な呼び聲が聞えて來た。眠つてゐた漁師ははつとして眼を開けた。悲痛な人聲はまた聞えて來た。

「あ、難船だ」

漁師は飛び起きて女房のとめるのも聞かず、裏口から飛び出して磯の方へ走つた。と、すぐ眼の前の岩の上に一人の坊主が突つ立つてゐた。それを見ると漁師は思はず、

「やい、何してるのだ」

と云つた。すると坊主は、ぐつしよりと濡れた法衣の中から手を出して、默つたままで漁師の家の方へ指をさした。

「何だ」

漁師が突つかかるやうにすると、坊主はまた默つて家の方へ指をさした。漁師が不思議に思つて振りかへつたところで、己の家の方から火のつくやうな嬰兒の泣き聲が聞え、それに交つて女房の悲鳴が聞えて來た。漁師は夢中になつて、

「何しやがる」

と云つて、いきなり坊主に掴みかからうとした。と、坊主は白い齒を見せてにたにたと笑つたが、其のまま海の中へ飛びこんで見えなくなつた。そこで漁師は己の家へ駈けこんだ。家の中では女房が冷たくなつた嬰兒を膝にして、顏色を變へ眼を引きつつてゐた。

欺まされた幽靈船

數年前のことであつた。第十八宇和島の船長をやつてゐた小野田君が、土佐沖にさしかかつたとこ

ろで、前方から赤と青の航海燈を點けた一艘の帆船が走つて來たが、長い間經驗のある小野田君は、其の帆船がどうしても普通の船でないと云ふことを直覺したので、帆船がすぐ眼の前へ來ると、

「おうい、其の航海燈はなんぢや、それや反對ぢやないか」

其の時帆船の航海燈は、正規のとほり赤を右に青を左に點けてゐたが、小野田君がさう云ふとともに、ふいと其の燈が消えて同時に船も見えなくなつた。小野田君はそれを人に話して、

「違つてると云はれると、違つてなくても火を消すところを見ると、やつぱり此方の云ふことが判るのですね」

と云つて笑つた。

不思議な帆船

大正八九年のことであつた。鳴島魚市場の專務理事をしてゐた三善定雄君が、某夜急に激しい暴風雨になつたので、持船をしつかり繫がうと思つて、數人の雇人を伴れて海岸へ出た。ところで、其處に繫留してあつた己の舟の眞向うから、一艘の帆船がするすると入つて來たが、それが今にも己の船へ衝きあたりさうになつたので、三善君があわてた。

「あ、いかん、これは」

三善君は夢中になつて駈けだした。そして、磯際まで往つたところで、もう其の帆船は影もかたちもなかつた。

海坊主と取組みあふ

壯い漁師が某夜一人で漁に往つてゐた。其處は愛媛縣の深浦の附近であつた。烏賊か何かをかけてゐたのであらう。舟には松明を點けてあつた。そして、せつせと釣つてゐたところで、不意に舳へ來て立つたものがあつた。おやと思つて見ると、それは大きな海坊主であつた。氣性の烈しい壯い漁師のことであるから、それと見るやいきなり摑みかかつた。

「やい、糞坊主、何しに來やがつた」

しかし、坊主も強かつた。二人は組んづほぐれつどたんばたんとやつてゐたが、其のうちに夜が明けかかつて來た。すると坊主は何處へか消えてしまつた。

馬乘りになつてゐた海坊主

愛媛縣の某と云ふ汽船の船長が、まだ帆船に乘つて近海を往復してゐた比のことであつた。某夜甲板に出てみると、大きな坊主が何かに馬乘りになつたやうにして、うんうんといきんでゐた。船長は飛んで往つて、

「こら」

と云つて喚鳴りつけると、其のまま坊主の姿が消えてしまつた。

碧い眼玉

大阪船場の料亭S氏の話。

黒田雅子姫がエチオピアへ往くとか往かないとか云つてゐた頃、S氏の知合の少女が憂鬱症に罹つたので、少女の兩親は心配して、紀州の白濱溫泉の近くにある伯母の家へやつて靜養さした。

少女の名は澄ちやん、年は十三。其の澄ちやんは、澄ちやんのお母さんが壯い頃、上海へ往つて、猶太系の英國人との間に出來た混血兒であつた。

白濱へ往つてからの澄ちやんは、別人のやうにおとなしくなつて、毎日海岸へ出て海を見てくらしてゐた。其の海岸に千疊岩と云ふ景色の佳い處があつた。某日の夕方平生のやうに海岸へ往つてゐた澄ちやんは、嬉しいことでもあるのか、ひどくはしやいで何か唄ひながら歸つて來た。

「今日はばかに佳い氣もちぢやないの」

伯母さんもよろこんで、いつしよに夕飯をはじめたところで、澄ちやんは不意にきやつと云つて茶碗を放りだした。

「おう、眼玉だ、碧い」

海のやうな碧い眼玉が二つ茶碗の中に映つたと云つて慄へるのであつた。

「碧い眼玉だ、碧い眼玉だ」

澄ちやんは其の眼玉を見まいとするやうに悶え狂つた。そして、伯母さんの急電によつて、大阪から澄ちやんのお母さんたちが駈けつけた時には、澄ちやんは碧い眼玉の幻影からのがれぬためか、家を脱け出して千疊岩から投身してゐた。

そこで死體の始末をして、それから澄ちやんのゐた室をかたづけてゐると、机の引出からひどく錆た銀の小函が出て來た。澄ちやんのお母さんは、澄ちやんが海岸からでも拾つて來たものだらうと思つて蓋を開けた。中には生なましい碧い眼玉が二つ光つてゐた。澄ちやんのお母さんはそれを見て氣絶した。

畫家の見た怪異

數年前、町田と云ふ壯い畫家が、越後と越前の國境へ寫生に往つた時のことであつた。町田は其の

時某山の中で一枚の風景畫を畫いたが、繪に夢中になつてゐるうちに日が暮れたので、驚いて麓の方へおりて彼方此方宿を探して歩いたが、どうしても見つからなかつた。

町田は途方にくれて、何處でもいいから夜露を凌ぐ處を見つけたいと思つて、重い足を曳きずり曳きずり歩いてゐるうちに小さな山寺を見つけた。町田は喜んで山門を入つて案内を乞うた。すると五十位の農夫のやうな男が出て來た。それが住職であつた。町田が事情を話すと、住職は、

「こんな貧乏寺で、本堂から他に寝る處もないがね」

と云つた。其のばあひ町田は贅澤なことを云つてゐられなかつた。

「けつこうですよ、どうかお願ひします」

町田は本堂へあがつた。そして、持つてゐたパンを噛つてゐると、彼の住職が一枚の雑巾のやうな雑園を持つて來てくれたので、早速それを被て横になつた。

町田はひどく疲れてゐたので、すぐ眠つてしまつたが、其のうちに庭の方でさうざうしい物音がしだしたので眼をさました。庭には數人の男が來てゐると見えて何か云ふ聲がしてゐたが、やがて本堂の扉が開いて、數人の男が白い箱のやうな物を持つて入つて來て、それを本堂の眞中へおろすなり出て往つた。

町田は此の夜更けに何人が何を持つて來たのだらうと思つて、ぢつと其の方へ眼をやつた。白い細

長い箱が扉の際から漏れて來る月の光にはつきり見えた。それは棺桶であつた。

町田はぞつとした。町田は蒲團を冠つて小さくなつてゐた。と、棺桶の方からめりめりと云ふ音が聞えて來た。町田は頸へあがつた。そして恐る恐る蒲團の間から棺桶の方を見た。經帷子を著けた人間が棺桶の中に衝立つてゐた。町田は夢中になつてまた蒲團を被つた。

同時に疊を踏む足音がして、それがだんだんと町田の方へ近寄つて來た。町田は蒲團にしがみつくやうにした。其の町田の蒲團はすうと捲くられた。町田ははつとして眼を開けた。蒼ざめた女の顏が町田の顏の上にあつた。町田は、

「わ」

と叫んだ。同時に捲くられてゐた蒲團が元のとほりになつた。町田は蒲團の中で半ば氣を失うてゐたが、やつと我にかへつたところで、本堂の横になつた住職の室から激しい物音とともに、鬼魅惡い叫びが聞えて來たが、間もなく靜になつて四邊がひつそりした。

町田は一刻も早く其處を逃げだしたいと思つたが、外へ出るのも怕いので、蒲團を被つて頸へてゐるうちに夜が明けた。見ると、彼の棺桶の蓋が開いて、それが室の中へ轉がつてゐた。

そこで町田は、そこそこに荷物を取り纏めて外へ出ようとしたが、鬼魅惡い叫びの聞えた住職の室も氣になるので恐る恐る其の室へ往つた。

住職の室には、住職が咽喉を血に染めて倒れてゐる傍に、これも口元を血みどろにした經帷子の女が横たはつてゐた。町田はいきなり表へ駈けだした。

山門を出ようとしたところで、外から入つて來た一人の男に往きあつた。町田はやつと氣が注いて其の男に昨夜の怪異を話した。すると其の男が眼を睜つた。

「へえ、和尙さんが、それぢや和尙を喉ひ殺した」

其の男は昨夜棺桶を擔ぎこんで來た一人であつた。そして町田の見た經帷子の女は、好色の住職に欺されて同棲してゐた女であつたが、住職に捨てられたので、村で淋しく暮してゐるうちに、其の前日になつて死んでしまつた。で、村人たちが氣の毒がつて、棺桶へ入れて寺へ屆けて來たところであつた。

高千穗峰の靈異

明治二十七八年の日淸戰役の際、日向國高千穗嶽の山麓官幣大社霧島神宮の前に、數萬の巨火が現

れて、列を爲して朝鮮と思はれる方角へ飛んで往つたので、王師を擁護したまふ神軍であると云ひはやしたが、明治三十七八年の征露の役にも亦其の靈異が現れた。それは明治三十七年二月八日の夜の事であつた。東霧島山麓に數萬の巨火が紛紛として現れ、それが西北方に延びて一里位の長さに見えてゐたが、約三十分位して見えなくなつた。同地方では、これこそ王師擁護の神軍の遠征であると云ひはやした。

それに就いて霧島神社宮司從六位稅所篤人は、同社主典桑原武熊を遣つて事實の有無を調査さした。そこで桑原主典は、始良郡東國分村へ往つて、其處の池田清兵衞と云ふ者に就いて、それを調査して復命した。其の復命書は當時の報知に掲載せられた。

「二月二十六日未明出發、午前十時五十五分始良郡東國分村大字小村池田清兵衞方に著、同人に面會の上左の如く承糺せり。

（桑原主典問）高千穗に火の現れたるを見しは何日何時なりや。

（池田清兵衞答）舊十二月二十二日（二月八日なり）時計無けれども凡そ午後七時頃、私妻の父村内後藤熊次郎方へ參り、十一時頃歸路、小字時任といふ所にて、子丑の方に當り火を見受たり。

（問）火の色又は數、並に大きさ等は如何。

（答）色は常の火の如く赤く、數は幾萬とも知れず、數十萬の多きに見え申、高千穗嶽の半腹より西韓國嶽の半腹と覺しき處へ凡そ一里餘りも一直線に連なり、實に見事にて、大きさは凡そ一尺程の圓みに見えたり。

（問）誰も他に見し者はなきや。

（答）凡そ三十分間程も見て、近所に住みし原口猪右衞門、宮永三造の兩人を起し火の現れし事を申し、早く參れと申置、又元の處へ立戻り暫く待ちしも參らざるに付再び參り、兩人とも參り俱に見申候。併し其時火は餘程減少致し申せり。

（問）其の火は動かざりしや。

（答）火は韓國嶽の西北の方より漸漸に消ゆる如く見え申、何分暗夜にて嶽の姿も見え兼ねるに付、原口猪右衞門方の垣根に寄添ひ方角を篤と見定め置き、翌朝再び來り昨夜見置きし方角等を見れば、韓國嶽の西北を向うへ廻れば嶽に隱れる故に、自然に消ゆる如く見しも、消えしにあらず西北へ向ひ、し事ならむ。

（問）原口猪右衞門、宮永三造は如何見しや。

（原口猪右衞門答）私は老人（本年六十歳以上）其上少少不快にて清兵衞が參り起したるも其夜は別に寒氣強く參り兼ね、暫くして再び參り呼び起したるに付參り申、火の數は減少せしも確に見受申したり。

（宮永三造答）私は二人の小兒と共に臥し居り、殊に其夜は寒氣も強き故、起き出難く猶豫せし處、再び呼び起されたるに依つて出來し處、火の數は減少せしも確に見認申した。

明治三十七年二月二十七日

『豫島神宮主典桑原武熊』

御紋章の異光

昭和十年二月に北海道におこつたことである。競馬の騎手飯塚伴五郎は、春の競馬に用ゐる馬を買ふべく妹脊牛町へ出かけて往つて、望みどほりの逸物を手に入れ、其の日は同地の得永慶三郎と云ふ知人の許へ一泊した。

そして、夜になつて夕飯をすまし、九時すぎまで話して、それから表座敷へ案内せられて寢たが、寢床がかはつたせゐか寢つかれない。それに何かしら氣になるので、暗い中で右枕になつてみたり左枕になつてみたりして、いろいろと寢つく工風をしたがそれでも睡れない。

そこで、眼を開けて室の中を見た。室の中は暗いうへに寒さがひしひしと迫つてゐた。飯塚は書間あんなにして疲れてゐるのに、何故睡れないだらうと思ひ思ひ、やるともなしに右の眼を床の間の上になつた欄間の方へ眼をやつた。と、欄間に黄ろな小さい光があつた。

（おや）

飯塚は不思議に思つて枕頭の電燈のスキッチを拈つた。其處には　聖上の御眞影の額があつた。

（これは御眞影だ）

飯塚は起きあがつて敬禮した後で、さて今の黄ろな光はなんだらうと思つて注意した。

御眞影の上部に金泥にした菊の御紋章があつた。飯塚はそれでは今の光は御紋章のであつたかと思つた。しかし、微い金泥の光が暗い中にあんなに光るものでない。ついすると、次の室の電燈がそれに反射してゐるのではあるまいかと思つた。そこで燈を消して次の室を調べ、それから外の燈の有無を調べたが、それらしい物はなかつた。

（をかしいぞ）

起きてゐてもしかたがないので、それから横になつて御眞影の方を見た。御眞影は眞暗で何の光もなかつた。

（それでは、眼のせゐであつたのか）

飯塚は己の粗忽に氣が注いて苦笑した。苦笑したが今一度見てやれと云ふ氣になつて、また御眞影の方へ眼をやつた。其處には黄ろな小さい圓い光があつた。

（これは、何かの前兆だ）

飯塚は飛び起きて主人の室へ往つて、寢てゐる得永を起して、

「何かの前兆ですよ、用心しなくてはいけないですよ」

と云つたが、得永は、

「まさか、今の世に」

と云つて笑つて對手にならなかつた。飯塚はしかたなしに己の室へ歸つたが、何か異變があるかも判らないと思つて、衣服を著かへ手提も傍へ引き寄せて、すはと云へば避難ができるやうに準備して、腰をおろしたところで半鐘が鳴りだした。それは十一時頃であつた。

（それやこそ）

飯塚の命から二番目の物は、たくさんの金をかけて求めた馬である。其の馬は其處から數町離れた民家の厩に置いてもらつてゐた。飯塚は先づ其の厩へかけつけて馬を引き出して來たところで、燃えひろがつた火の手はまたたくまに其の附近を一嘗めにして、馬を預けてあつた民家も灰になつた。

聖瑞

楠瀬如龍君は高知市福井の生れで、長く高知新聞の主筆をしてゐたが、昭和九年十二月になつて惜くも長逝した。孔門の子路を思はすやうな君子人で同人間に推服せられてゐた。晩年になつて佛教を信仰するやうになつたが、自宅の前を流れてゐる鏡川で年年溺死する者があるので、其の災厄をはらふために、自宅前の隄に地藏尊を建立した。楠瀬君逝去の翌年、歸省した筆者は、一日楠瀬君の遺族を弔問したが、其の時鐘鐵の地藏尊を見た。

其の楠瀬君は逝去の先年上京してゐたが、筆者はかけちがつて逢ふことができなかつた。其の時楠瀬君は、東海道蒲原驛の田中光顯翁を訪うたが、其の時田中夫人から明治天皇の奇瑞を聞いて、それを高知新聞に發表したので、茲に再錄して聖德をしのび奉ることにした。

「目下靜岡縣蒲原の別莊に病臥中なる田中光顯翁の許に、先日突然服裝卑しからぬ氣品ある未知の一女性が尋ね來り、夫人に面會して、

「當家の御主人は土佐の御出身か、目下御病氣か」

とまづ念を押し、夫人の然る旨を答ふるや、

「實は私は、此の頃毎夜の夢に、畏くも明治天皇陛下が御現れになり、土佐出身のもので田中光顯と云ふ者があるが、目下病氣に苦しんでゐる。然し、此の者は國家のため如何にしても生かして置かなければならない人物だから、早く藥を持つて往つて飲ませよと、其の藥品の名まで御指示遊ばされたので、其のあまりの奇瑞に一度は打ち驚いたが、國家のため一日も猶豫なり難しと思ひ、甚だ唐突ながらただ今ここに藥を持參して來た」

と云ふに、面接した田中夫人も聊か狐にでもつまれたやうな氣にて、精神病者かそれとも近頃よくある一種の賣名の徒かと疑ひ、暫く返答にも躊躇したが、仔細に其の女性の談を聽くと次のやうである。

「かやうな事を出しぬけに申しあげては、御不審は御もつともと存じますけれど、私は女學校を卒業すると間もなく、宮中の女官として天皇陛下に六年間奉仕したのだが、先頃御暇を賜つて家に退り、やがて勸めらるるままに、現在東京市四谷荒木町海軍大佐大橘才輔の妻として嫁した桂子（三七）と申すものである、茲に何もかも自分の恥を叩けば、私は生來虚榮心が強く、人樣が佳い服裝でも指環でもつけてをれば、自分も負けずに買はうと云つた風であり、殊に宮中に出仕中は、自己の局に歸れば一切萬事女中どもにさせる習慣で、何一つ雜用を手づからした事もなかつたのだから、一旦家庭を

持ち、夫に何かと小言を言はれるのが腹立たしく、下女もゐるのに殊更私に買物や使を云ひつけるやうな時は、悔しくてたまらない位であつた、然るにふとした機緣から觀音樣を信仰するやうになつて、一切の虚榮だの我見だのと云ふものが、極めてつまらない泡沫のやうにからりと消え去り、今では如何なることも苦にならない。全く別人のやうになつたことを我れながら不思議に思つてゐる位であります。夫もいたつて一剋ものので、在役中も同僚や上司と氣の合はないことが多く、夫が或る事業で大儲けをなし、幾箇所も別莊を置いて妾を蓄へ、其のため母に心配させたのでしたが、家督相續する時、自分の母を苦しめたやうな不義の財産は、見るもけがらはしいと云つて振り向きもしないと云つた氣質です。で、退職して豫備役となるや、現在の四谷の自宅に玄武堂と云ふ道場を設け、青年や學生を集めて、武道を練つてゐる變りものでございます。ところで私が一夜右に申すとほり、明治天皇の御夢を見奉たので、不思議に思つて夫に話すと、ばかな事を云へと一喝されました。然し、次ぎの夜も再び同樣の夢を見、更に其の次も見るので、餘りに奇妙だと思ひましたが、其のつど夫からは馬鹿な事を云へと叱られてをりましたけれど、四度目に同じ夢をくりかへし見るに及んで、夫もさすがに不審いたしまして、とにかく其の藥を持つて、果して田中と云ふ土佐出身のものがあるか、又目下病氣されてゐるか確めて來いと云ふので、今日突然ながら推參したわけです」

と事細かに語り、

「全く未知の者がかやうなことを申出でては、さぞ御不審でもありませうが、私は右申すとほり何等怪しいものでないのは、東京で身許をお調べくださればすぐお判りになる」

とも云ひ加へた。

そこで田中夫人も初めて來訪の女性に對する疑念は晴れたが、それにしても事がらがあまりに奇瑞だと病褥中の翁にこの由を告げ、大橋桂子女史と云ふに厚く謝して還し、早速其の藥を翁にすすめたと云ふことであるが、先日田中翁を見舞つた記者は、翁の病床のかたはらで夫人から此の談を聞き、如何にも不思議だと思つたが、其の際褥中の翁は、

「もし其の夢が反對に、田中と云ふ奴は、國家のためにいけないのだから、活かしておけないとあつたら、きつと毒藥を持つて來てくれたかも知れない」

と夫人を顧みて冗談を云ひ、呵呵大笑されてゐたけれども　明治天皇の御仁慈は神去り給ひし後も、なほ老臣を思はせ給ふ大御心かくまでかと内心感激の情を掩ひ得ず、心なしか翁の眼には露の玉が宿つてゐるやうに見られた』

勅語は畏し

日露戰役中、即ち明治三十七年十月十日　明治天皇陛下には桂内閣總理大臣を御前に召されて左の勅語を賜はつた。

開戰以降朕ノ陸海軍ハ、克ク其忠勇ヲ致シ、官僚衆庶其心ヲ一ニシ以テ朕カ命ヲ遵奉シ、著著其歩ヲ進メ今日ニ及ブ、然レドモ前途尚遼遠ナリ、堅忍持久益奉公ヲ竭シ、以テ終局ノ目的ヲ達スルコトヲ努メヨ

聖勅はそれぞれ手續を踏んで陸海軍に傳達せられた。左翼軍の聯隊長川村大佐は、勅語を部下一般に知らすは、士氣振興上最も必要なりとして、勅語の寫しを謹成して、森脇佐市一等卒に命じて各隊に傳達せしめた。

森脇一等卒は、命令に從つて其の寫しを三箇所に傳達したが、傳達の證として寫しの入つてゐた封筒を受け取り、殘りの一通を第一中隊に傳達すべく進行中、敵の猛射をあびて左手に負傷した。其の時握つてゐた空の封筒には、敵彈が貫通してゐたが、勅語の寫しの入つてゐた封筒は、すこしの損傷もなかつたので、川村聯隊長は是れ全く　天皇御威德の然らしむるところであると云つて、師團長に

報告し、師團から順次隊を追うて軍に報告した。東京朝日の從軍記者秋鞘子は、河村高級副官の室で

それを見たと云つて、

「貫通せる封筒と貫通せざる勅語寫し入りの封筒を報告書に添付して眼前にあり、余等も今更ながら事の奇異なるに驚いて、諸將士と共に皇威の斯くまでにいやちこなるを感佩するの外なかりき」

と戰報の中に書いてゐる。

定紋の附いた提灯

日露戰役中、遼陽近傍の戰の際、大野上等兵は斥候として某夜敵陣地に潛入し、命ぜられた任務を遂行して引返してゐると、忽ち敵の感知するところとなつて追擊せられた。

幸その夜は闇夜で眞黑であつたから、大野はそれを唯一のたのみにして、右に走り左に避けてどんどんと走つたが、其のうちに銃聲も止み、追擊して來る氣配もなくなつたので、ほつと一息したものの敵情報告の大任務を負つてゐるから、一刻も早く所屬部隊へ歸らなくてはならぬ。大野はまたど

んどんと駈けだしたが、往つても往つても所屬部隊が見つからない。

大野はそこで足を止めて闇の中を注意した。大野は幾多の經驗によつて方角の見當位はつくのであつたが、あまり盲滅法に走つたせゐか、どうしても見當がつかなかつた。萬策盡きた大野は、運を天に委せることにして、現在足の向いてゐる方角へそのまま往つたが、敵陣地に迷ひこんでは大變だから用心しなくてはならぬ。彼は前後に用心しながら疲れて棒のやうになつた足を曳きずつて歩いた。

大野の頭はわくわくして氣もちが上ずつてゐた。從つて大野の眼はぼうとなつてゐる大野の眼に、小さな火の光がちらちらと見えた。それは遙か彼方にある提燈の火のやうな光であつた。

（おや、人家か）

大野はその正體を見きはめようとした。火は小高い森の中のやうに思はれるが、距離がよほど距つてゐるのではつきりしなかつた。

（鬼火か）

大野は一心になつて見つめてゐた。と、その火は飛んで來たやうに直ぐ眼の前の丘の上になつた樹木の枝にぶらりとかかつて、その枝葉をはつきりと見せた。それは提燈の火であつたが、それには丸に大の字の定紋が附いてゐた。大野の家の定紋も丸に大の字であつた。

（おや）

眼をやるとすこし古びた鉢にも紙にも見覺えがあつた。

（自家の提燈だ）

大野は夢が醒めたやうになつた。大野はその提燈に向つて丘を走りあがつた。あがつてその下へ往つたところで、提燈の火はふつと消えたが、それと同時に周圍に人のうごめきを感じた。それは所屬部隊であつた。

大野はその奇蹟を郷里の親許へ云つてやつた。すると父親から返事が來たが、それによると彼が出征以來、一家擧つて皇軍の勝利と息子の安全を祈願してゐるが、母親はそればかりでは氣がすまず、村の鎭守へ願をかけて、丑滿參詣をはじめ、毎晩のやうに半里ばかりある鎭守の森へ往つて、提燈を社頭の樹木の枝に懸け、其の明りで水垢離をとつて祈願を怠らなかつたが、恰度其の夜は三七二十一日の滿願の日であつた。そして、社頭の樹木の枝へ懸けた提燈は、丸に大の字の定紋の附いたものであつた。（富田嶺風氏談）

白い服と赤い服

夏山新一郎君が某席上で天佑に就いて講演したが、其の中で日露の戰役に捕虜となつて、我國に護送せられてゐた一露西亞兵の話をした。その露兵は、媾和になつて本國へ歸らうとした時、陸軍當局に向つて願ひ出た事があつた。

「これから本國に歸るに就きまして、一つのお願ひがございます、それは赤い服と白い服を著た貴國の軍人に逢はせていただきたい」

日本の軍人は皆カーキー色の軍服で、赤い服や白い服を著けた者はない。當局では不思議に思つて、いろいろと考へたが判らない。

「それは何かの覺えちがひだらう、日本の軍隊には、そんな服を著た者は一人もゐない」

と云つたが、露兵は承知しなかつた。

「ゐない事はない、われわれは平生其の赤い服と白い服の貴國兵に惱まされました、とても勇敢で、擊つても突いてもびくともしない、われわれは其の貴國兵が貴國の陣地に現れると顫ひあがつたものです」

當局では此の露助は、戰爭で頭が變になつてるから、そんな事を云ふだらう位に考へて其のままにしてしまつた。

夏山君の此の天佑の講演は、聽衆を感動させたが、其の講演が終つたところで、羽部重吉と云ふ名刺を出して面會を申しこんだ者があつた。夏山君が用件を聞いてみると、

「私は今、貴君から赤い服、白い服の兵士のお話を伺ひましたが、實は私も、赤い服ではないが、白い服を著た者に助けられた經驗があります」

と云つて、其の經驗談をした。羽部君は遼陽の戰ひで捕虜となつて、露軍の穴倉のやうな樞倉に打ちこまれた。羽部君は其のうちに銃殺せられるだらうと思つて、覺悟してゐたところで、五六日しての晩、樞倉の扉が重おもしく開いた。昏昏と睡つてゐた羽部君は、むつくりと頭をあげて入口の方を見た。入口には白い服を著た背の高い大きな軍人が、霧の中に突立つてゐた。羽部君は露兵が殺戮に來たと思つてびくりとした。同時に白い服の軍人は、重おもしい聲で、

「こらつ、こらつ、此處へ出て來い」

と云つた。羽部君は手を摑んで引きたてられるやうな氣かして、よろよろと扉口へ出て往つた。

「俺に跟いて來い」

白い服の軍人はどんどん歩きだした。羽部君は夢中になつて其の後を追つた。外は闇夜の上に霧が深いので眞黑であつた。羽部君は宙に浮いてゐるやうな氣もちであつた。其の羽部君の耳へ白い服の聲が聞えた。

「此處でいい」

此處でいいとは何處へ來たのであらう。羽部君はきつとなつて四邊を見た。其處は見覺えのある陣地で、所屬部隊であつた。忽ち數人の聲がした。

「羽部君ぢやないか、羽部か」

「捕虜になつてやしなかつたか」

それは羽部の戰友であつた。戰友の一人は羽部の背をどんと打つた。

「おい、しつかりしろ、どうしたのだ」

羽部は氣もちが落ちついたので、捕虜になつてゐて、白い服の軍人に助けられて歸つた事を話した。

「白い服なんか何人が著てる、日本兵士はカーキー色たぞ」

「支那の狐に化かされたらう」

戰友は何人も本氣にする者がなかつた。

母親に憑る靈

大正八年二月二十六日、西比利亞出征の田中中佐の一隊は、過激派軍のために包圍せられて、クスラムスコエ附近で全滅したが、悲壯極まるその戰鬪で、名譽の戰死を遂げた小島勇次郎と云ふ軍曹は、大分縣大野郡東大野村の出身であつた。

その勇士小島勇次郎が戰死してから半ケ月ばかり經つてのこと、その生家では年とつた母親が、某夜突然寢床の上に飛び起きて叫んだ。

「起きてくれ、お父さんも、弟も妹も、皆起きて此處へ來てくれ、話がある」

それは鋭い男性的な聲であつた。父親は勇次郎の戰死の通知があつて以來、老妻が非常に落膽してゐたので、ついすると發狂したかも判らない。病氣になつたとすれば逆らつてもいけないと思つて、すぐ家内中の者を起してその前へ往つた。すると、

「よし、皆來てくれたか、俺は勇次郎だ、俺はお國のために戰死したのだ、それだのに、お母さんは、毎日毎日、佛壇の前へ來て泣く、俺はそれが何より辛い、だから泣いてもらはないために、戰爭の容子を話して聞かせる」

と云つて、話しだした。それによると、二月二十五日の朝、田中支隊を乘せた汽車が待避線に着くと、香田小隊が將校斥候になつて出發したが、その夜九時頃になつて、その將候斥候から報告が來た。で、緊急集合の命令が出た。そこで眞暗い中で糧の準備をして出發したが、なかなか寒かつた。何と云ふ村であつたか其處で食事をして、夜明けになつて出發した。そのうちに、森の中で敵と遭遇して大激戰が開始されたが、敵は大勢味方は無勢、だんだん死傷者が出るので心細くなつたが、俺は日本男兒だ、後へ退くものかと思つて奮鬪してゐるうちに、敵彈が頭部に命中して、その後の事は判らなくなつたと云つて、態度なり詞なりが全く勇次郎になつて、

「だからもう歎いてくれるな、俺はお國の役に立つて死んだのだから、きれいに諦めて、それでもお父さんもお母さんも、達者で暮してもらひたい、弟や妹は、俺の分まで孝行してくれ」

と云つた。それを聞くと父親が、

「お前は、今夜來るくらゐなら、死んだ時何故知らせなかつた」

と云ふと、

「お父さんやお母さんに知らせると、歎くと思つたから、二人の弟にだけ、その晩に知らしてゐる」

と云つた。そこで父親は、次男と三男に尋ねてみると、

「その通りだ、あの晩、私等二人は、兄さんが顔を血だらけにして歸つた夢を見たが、皆が心配するといけないと思つて默つてゐた」

と云ふと、

「さうとも、それで皆判つたらう、これだけ理を話したから、もう默いてくれるな」

同時に母親は其の場に倒れて昏睡狀態に陷り、翌日の午過ぎになつてやつと正氣づいた。で、宵の事を訊いてみたが何も知らなかつた。この話は田中支隊の戰況がまだ內地に達しない時で、その後戰況が判つてみると、すべて勇次郎の云つたとほりであつた。

神馬

昭和十二年十二月十三日、皇軍が南京を攻略するとともに、國民政府の密令を受けて、抗日青島最後の公安局長として、其の十七日青島へ入つた寥安甫は、部下を督勵して邦人經營の紡績會社を始め

邦人の權益を破壞したが、其の破壞の手は青島神社にも及んで、境內にあつた神馬の銅像を打ち倒して俱二つにした。

寥の目的は、邦人の權益を破壞するばかりでなく、青島を焦土と化して、日本軍が上陸しても住む家のないやうにする事にあつた。其の翌日になつて寥は、邦人所有の競馬馬を何處からか見つけ出して來て、それに乘つて爆破地點を物色しながら、青島神社にさしかかつた時、それまで羊のやうに柔順であつた馬が、忽ち氣が狂つたやうに暴れだして、寥を振り落すなり、其のまま何處ともなく姿を消して往つた。

一方寥は、石のやうな堅い路面に投げ出されたので、重傷を負つて起きあがる事もできなかつた。部下は驚いて寥を自動車に乘せ、病院へ伴れて往つたが、途中で其の自動車が顚覆したので、寥は重傷の上に重傷を負つて絕命した。

寥の部下は寥の怪死を見て顫へあがつた。銅像の神馬一つ破壞してさへこれである。青島を燒打ちし、社でも燒かうものなら、如何なる神罰があるかも判らないと云つて、青島の焦土化を中止したので、青島の被害は邦人の權益破壞に止まつて、他は其の難を免れる事ができた。それで同地の支那人は、寥の乘つてゐた馬は、ただの馬でなくて天が青島を救ふために、降した天馬であるから、馬廟を造らなくてはならぬと云ひだした。

伊勢大廟の護符

正定の攻撃に、神田、猪木の兩部隊が猛撃を續けてゐる時、一人の兵士が二丈餘の城壁へ繩梯子を かけて、猿の如く攀ぢ登つて往つたが、城壁の上へあがるなり、敵彈に的つてばつたり倒れた。倒れたかと思ふと直ぐ跳ね起きて、城内目がけて飛びこんで往つた。其の兵士は神田部隊に屬する南城正成と云ふ通信手であつた。

やがて正定の攻撃が終つて身體を調べてみた南城君は、其處に奇蹟を見出して驚いた。城壁の上で受けた敵彈は、右の腹部から千人針の糸と糸の間を縫つて、内ポケットの伊勢大神宮の護符を貫二つに割り、それから右の袖を貫いて外へ出てゐて、かすり傷一つも負つてゐなかつた。

南城君は二十六、神戸市湊東區楠町に住んで、自動車の運轉手をしてゐる者であつた。其の南城君は、昨年七月召集せられると、愛妻の淑子さんを伴れて伊勢大廟へ參詣して、内宮で護符を戴いたが、其の時淑子さんは、豫て用意の千人針を神前で南城君に渡した。それは淑子さんが心を籠めて作つた木綿に眞綿を詰めた物であつた。南城君はそれを其の場で腹に卷いて歸り、八月一日出發して、北支に活躍してゐるところであつた。

神符と銀貨

砲兵一等兵入交春樹君は、高知縣香美郡明治村字原の出身である。膂力がすぐれてゐるところから相撲が好きで、土佐相撲協會で春日野と名乗つてゐるが、郷里への通信によれば、「敵彈が胸部に命中したが、神の力か五十錢銀貨五枚貫いて六枚目で止まつてゐた、生きて歸れたら記念に持つて歸ります其の時は神様を拜みましたよ」と書いてあつた。同君は香美郡山田の八王子神社の護符と、五十錢銀貨七枚を左のポケットに入れてゐたとの事であつた。

鶴見大佐の怪異譚

熱河攻略の前、古賀聯隊が錦西城外で匪賊の襲撃を受けて全滅した時、聯隊本部となつてゐた錦州城内の某民家に〇〇聯隊長の鶴見大佐を訪問した岩崎榮君が、同大佐から聞いた怪談である。

鶴見大佐の部下に石野中尉といふ才氣縱横の壯い將校があつた。これが古賀聯隊の輜重監視隊として、一箇小隊をつれて錦西へ從軍したのであつたが、古賀聯隊長最期の日に、同じく名譽の戰死を遂げた。

鶴見大佐は其の石野中尉の戰死の報告を受けて、悲憤してゐるところへ、佩劍をがちやがちやさせて一人の壯い將校が入つて來た。

それはやはり大佐の部下で、石野中尉の親友の福田と云ふ中尉であつた。福田中尉は、思ひ迫つた表情で、是非石野の弔ひ合戰に自分をつれてつてくれと歎願した。

「聯隊長殿、私は、昨晩、石野に逢ひました。決して夢ではありません。昨晩私が寢てをりますと、石野が蒼い顏をして私の傍へ來て、おい福田、今歸つたよ、と云つて私の手を握りますから、おお石野か、よく歸つて來たな、と私が抱きつかうとすると、ふつと消えてゐなくなりました、それですから、どうか私をつれてつてください、石野が私を待つてゐるだらうと思ひます」

と云つた。そこで大佐は、福田中尉を伴れて往く事にした。岩崎君が大佐を訪問したのは其の時であつた。大佐は石野中尉の話をした後で、

「しかし戰場で友人の亡靈に逢ふといふことは、確にあるよ、戰場の怪、不思議なことだが、確にあり得ることなのだ、俺も其の經驗を持つとる、怪奇にもまた悲しき夢物語さ」

と云ひさして、傍にゐる部下を呼んで、

「まあ、みんな其處へかけろ、俺は昔からかういふ夢を見た、夢と云つたつて、俺のは寢ぼけた夢ぢやない、眞晝間の活きた夢だよ、所謂白晝夢といふやつさ、

日露戰爭のとき、俺は旅順で戰に參加したがね、多くの上官や、部下が毎日ばたばた斃れて往つたものだつた、

某日、何だよ、二百三高地攻擊の行軍をやつてゐると、向うから馬に乘つて、自分の上長官閣下が此方へ駈けてくる、おや、彼の人は二三日前に戰死なすつたはずだが、と妙な氣になつて見つめてゐるうちに、俺の三メートル前あたりまでやつて來た、そこで俺は擧手の禮をして、

閣下、御健在ですか、

と呼びかけたと思へ、すると閣下は、ぢつと俺の顏を見たきりで、表情一つ動かさないで、ふうつ

と影のやうに消えてしまつたぢやないか、俺は一生に、あんなにぞつとしたことはなかつた、

それからまた水師營の近くで、これは夕方であつたが、可愛い俺の下士が前の日の戰爭で戰死した、其の時俺は、其の下士の事を思ひだして、何氣なく前方を見ると、其の下士がどんどん駈けてゐるではないか、俺は、はてな、あいつ生きてゐたのか、と涙が出るほど嬉しくなつて、おうい待て、待たんか、とどなりながら追つかけると、道の向うに楡の林があつて、そこから道が右に迂回してゐた、俺は、どんどん往つて、其の道の曲り角まで追つて往つたところで、もう何處へ往つたのか影も形もなかつた、

某時親友の某が、俺の前を見向きもしないで往き過ぎようとするので、

おい、汝、何處へ往くのか、

と云つても、知らん顏で往つちまつた、變な奴だな、と其の時はいささか癪に障つたが、後で聞くと、ちやうど其の時刻に、彼は戰死したと云ふぢやないか」

戰死者の凱旋

此の話は長谷川伸君から聞いた話であるが、長谷川君は日露役の際、即ち明治三十七年の暮に、補充兵として國府臺の野砲聯隊へ入營した。其の時長谷川君のゐた第六中隊には、中隊長代理として畑俊六將軍がゐた。

長谷川君は其の野砲聯隊に入營中、不思議な事を經驗した。それは昔から良く云ふ草木も眠る丑滿時で、午前の二時頃の事であつたが、衞兵勤務に服してゐると、兵營から三四町離れた根本の邊に、突然ドッ、ドッ、ドッと云ふやうな微ではあるが數多な靴音が起つて、それが兵營の方へ向つて近づいて來た。耳を澄ましてゐると、靴音は段だん高くなつて、衞門の前へ來たが、其處になると靴音は一段と高くドッ、ドッ、ドッと歩調を取るやうにして營庭へ入つて往くのであるが、無論何も見えない。そして、聯隊本部のちよつと手前になつた、朝夕喇叭を吹く邊まで往くと、不意に消えたやうに森となつてしまひ、兵營は何事もなかつたやうに元の靜けさにかへるのであつた。

其のうちに其の跫音は戰死した勇士の靈が懷しの原隊へ歸つて來るのだと云ふ事がわかつた。しかし、其の靴音の聞えるのは控兵と不寢番の者ばかりで、同じ衞兵でも衞門や火藥庫を守つてゐる者には全然聞えなかつた。そして其の靴音を聞いた者は、互に眼と眼を見あはしながら、

「來るぞ、來るぞ」

と云ひあつたが、それは出動の命令が來ると云ふ事であつた。其の跫音が聞えて二三日するときつ

と武器庫から被服が運び出されて、それを著て新しい補充兵が出征するのであつた。長谷川君はそれに就いて、

「二三日すると戦死の知らせとともに、新しい補充兵が出かけて往くから妙です、今でもはつきり其の足音が耳に残つてをります」

と云つた。

蘆溝橋事件の決意

昭和十二年七月八日未明、支那事變の序幕たる蘆溝橋事件突發の際、最初の攻撃命令を下した鬼部隊長牟田口廉也大佐は、少將に榮進して十三年五月一日帝都に凱旋したが、壯絶無比の其の夜の思ひ出を話した。

「去年の七月八日の午前零時ごろだつたよ、われわれが蘆溝橋で夜間演習をしてゐると、突如馮治安麾下の第三十七師の一隊が包圍態勢をとつて、數十發の射撃を浴びせて來た。早速謝罪を要求したが、謝罪どころか、却つて逆ねぢをくはせて來たので、若い第一線の部下たちは火のやうになつて怒つた。それをまあまあとなだめてゐると、午前四時廿分になつて、敵は再び猛烈な射撃を浴びせて來たので、部下だちはもう我慢ができなくなり、早く射てと云つてくれと詰め寄つて來た。しかし重大な結果を豫想すると迂闊な事はできない。苦しい作り笑ひをしながら、待て待てあわててはいけないなどとなだめてゐると、電話がけたたましく鳴つて來た。受話器を耳に當てると、それは謝罪要求の交渉に往つてた一木〇長で、交渉に往つて歸つてゐると、不法射撃を受けたとの報告であつた。自分はそれに對して何と返事をしていいか息がつまるやうで何も云へなかつた。一木君は一木君で早く何とか云つてくれと怒鳴るが、どうにも返事ができない。そこでまあまあ待てと云ひながら、ぐつと下腹へ力を入れて考へを纒めようとしたが、皇軍に對する此の侮辱をどうして許せようと云ふ憤と、國を擧げて重大事に立ち到るから熟考しなくてはならぬと云ふ考へとが頭の中で闘つて、自分はゐてもたつてもゐられなくなつた。と、その時ちらッと頭の中に閃いたものがあつた。それは平生どんな事があつても決して驚くなと云ひ聞かされてゐる母親の聲であつた。すると自分はやつと心が落ちついて來て、頭の中がすうとなり、近くで鳴いてゐる虫の聲さへ聞えて來た。そこで自分は、よしッ、射てと云ふ決意がついた。此の間僅かに二三分であつたが、此の二三分の僕の苦惱は、何にたとへようかたとへようがなかつた。」

奇蹟の生還

昭和十二年十一月、南京攻略の際、仙鶴門の敵の大部隊の眞ただ中へ突擊を敢行した星部隊は、周章狼狽して手榴彈、チエッコ機銃、小銃の雨をふらせる敵を蹴散らして前進したが、其の時奥村良平曹長は、腰部に盲管銃創を受けてもひるまず、倒つて前進を續けてゐるうちに、道路の横からピストルを持つて飛びだして來た敵兵の手を引掴んで斬り倒し、自分も其のまま動けなくなつたところを病院へ送られ、傷が癒えて退院して、はじめて軍服を脱ぎ、ゲートルを解いたところで、十二發敵彈を受けてゐる事が判つた。

それは一發はズボンの腰部、一發は膝を掠め、皮脚絆には二箇の手榴彈の創痕があり、一發は拳銃に當つて拳銃が壞れ、それから肩に一發、左腕に一發、鐵帽に二發の彈痕、殘る一發は、危く首筋の襟を掠めてゐた。星部隊では忽ち評判になつた。

「全く奇蹟だ、あれだけの彈痕があつて、腰部の盲管たけで助かるなんて、全く神佑だ」

其の奥村曹長は、名古屋市千種區若竹町の奥村穎君の實弟で昭和五年入隊、現役志願兵で獨身の青年下士であつた。名古屋新聞の記者が實兄穎君を訪へば、

「一度戰死したと云ふ事でしたから、もすこし生かしておいて、お國のためにはたらかしたかつたと思つてをりましたが、幸ひ負傷で、再び第一線へ出ると手紙がありました、詳しいことは何も書いてよこしませんでしたが、あれは運の良い奴で、滿洲に出征した時も、戰友が、多く戰死したのに無事でした、こんな奇蹟も神樣が、もつともつとお國のために盡すやうにと護つてくだされたのでせう、戰死しても恥かしくないやうに、大いに働いてくれるやうに祈つてをります」

と云つた。

身代になつた母の寫眞

昭和十二年九月九日、上海戰線の病院では、其の日の拂曉に行はれた軍工路上の大激戰で、腹部に盲管銃創を受けた石井部隊の森内銀次上等兵を收容して、熊谷軍醫大尉が治療すべく脱服さしたとこ

ろで、胸のポケットが銃彈で裂けてゐるので、驚いて中を調べてみると、敵のダムダム彈がポケットの内へ入れてあつた寫眞に附著いたやうになつてゐた。それは森内上等兵が出征以來、肌身放さず持つてゐた母親の寫眞で、それで彈丸の止まつてゐたところは其の胸元であつた。

母親の寫眞が我が兒の身代になつた奇蹟を見て、熊谷軍醫は元より、其處にゐた他の軍醫も看護婦も、亦收容せられてゐる將士も、顏を見あはして驚きあふとともに、今更のやうに皇軍擁護の神明の加護と親の慈愛に頭がさがつた事と思はれる。

森内上等兵は同盟通信の松尾記者に、ダムダム彈に傷つけられた母の寫眞を見せて、兩親の慈愛に就いて話した。

「私の母は、私が出征する時に、お國の爲につくして立派に死ねと激勵してくれましたが、母もさうでありますが、父も私を非常に愛してくれました、母は奈久、父は熊吉と云ひますが、其の父は本年六月十三日死にました。其の時も私は重病で、醫師の手の下しやうがない程でしたが、父が急病で死にますと、私の病氣がけろりと癒りましたので、其の時も近所の者から、お父さんが身代になつてくれたと云はれましたが、今度も母が身代になつてくれたのでせう、これを思ひますと、親にこれと云ふ孝行をしてない事が恥かしくてなりません」

森内上等兵は靜岡縣の出身である。森内上等兵を治療した熊谷軍醫大尉は語つた。

「私は軍醫になつて既に六年になりますが、其の間樣樣な事件にも遭遇しましたが、僅か紙一枚の寫眞がダムダム彈を喰ひ止めると云ふやうな事に、打つかつたのは初めてですが、奇蹟と云ふのはこんな事を云ふのでせう、普通の常識では考へられない事です」

陰膳の茶碗

飯塚部隊の歩兵伍長相宮和三郎君の許へ、二月二十日の朝、夫人房子さんから、「先月八日に陰膳につけてあつた貴郎のお茶碗が二つに割れました、その時の驚きましたこと、もしかと思ふとその心配は一通りではありませんでした、三度三度の御飯を差し上げるお茶碗なので不吉に思はれて、あの當時不安な氣がして無事なお便りを神に願ひながら、どんなにお待ちしたか知れません、やつと今日お便りに接し、丁度その時あなたが危險な場所にお出での時だつたことがわかり、なんだかお茶碗が身替りになつたやうに思はれます」との手紙が屆いたが、相宮伍長は丁度茶碗のかけた十一月八日午後八時ごろには、戰友數名と蘇州河の敵前渡河を敢行、敵前五十米の最前線に突進した際、突如敵大

部隊の夜襲を受けて包圍せられ、彈丸も射ちつくして全滅にひんしたので、單身彈丸雨下の中を這つて後退し、九日の未明に危急を友軍に知らせる事が出來た。

飯塚部隊では相宮伍長の茶碗の身替の話が有名になつた。其の相宮君の家は、神田區仲町の價錢問屋で、家は母堂、夫人、五歳と三歳の愛兒、店員四人、女中一人の家族である。東京日日の記者が同家に就いて眞僞をたしかめると、

「實は先月八日の朝、朝食がすんだ後でした。家の宏一が轉びましたが、其の途端、主人の膳に使つてゐた茶碗が、勝手元の棚から突然落ちて割れましたので、心配してゐましたが、主人から便りがありまして、十一月の八九十の三日間は、激戰であつたが、無事に突破することが出來たと云つてまゐりました、便りによりますと、ちやうど此方で茶碗が割れた同時刻に、戰地でも主人の持つてゐた茶碗も割れたらしいのです、全く不思議です」

と房子さんは語つた。

夢に凱旋

昭和十二年十月十二日、趙州城の攻略の時、津田部隊の上等兵寺島德藏君は名譽の戰死を遂げた。寺島君は東京市淀橋區諏訪町の八百屋さんで、近所でも評判の律義者。現役當時は銃劍術の名手だつた。留守を守る妻女初美さんは、姙娠五ヶ月の身重で、長男靖雄ちやんを抱へ、德藏君の妹美喜野さんを對手に家業を營んでゐたが、二十四日東京朝日の記者が同家を訪ふと、初美さんは、

「一週間程前に、激戰したが傷一つ負はずに頑張つてゐるぞと云つてまゐりました。今日も子供に添乳しながらうとうとしてゐますと、無事に凱旋して來た夢を見ましたが」

と云つて顏を伏せた。

死せる勇士の戰車操縱

昭和十二年九月、楊行鎭攻略後、吳家宅附近の戰鬪で、敵陣間近に進擊した岡林准尉の指揮する戰車隊は、阿修羅の如く荒れまはつて、敵の野砲陣地を打つ潰して、三百五十メートル手前の味方の陣地へ悠悠と引きあげて來た。

其の日岡林准尉の乗つてゐた戦車は、藤野清人上等兵が操縦して、甲斐大作一等兵が砲撃してゐたが、甲斐一等兵が重傷を負つたので、其の後は岡林准尉と岡村一等兵が代つて砲撃してゐた。そして、味方陣地へ歸りついてみると、藤野上等兵もとうに戦死して、戦車のハンドルを握つたまゝ操縦席を離れずに冷たくなつてゐた。其のエンヂンを見ると、エンヂンも止つてゐて、かけてもかけてもかからなかつた。エンヂンが止つてゐる上に、操縦者が戦死してゐて、どうして戦車が其處まで動いて來たのか、藤田部隊長以下一同は、

「これは死んだ藤野の靈が操縦して來たのだ」

と云つて、何人もそれを疑ふ者がなかつた。

煙草の好きな兄

助川部隊の森脇熊一と森脇善一の二人は兄弟であつた。二人は出征して天津で閃と顔を合せたきりで逢はなかつたが、東馬村附近の戦の前夜、弟の善一君は、夢ともなく現ともなく、兄の熊一君が負傷姿で來てすうつと傍を通るのを見た。善一君はさては兄が戦死したのではないかと心配したが、朝になつて前進してゐると、傍へ來た味方の一隊の中に兄がゐたので安心した。善一君は兄は煙草が好きだから、逢つたらやらうと思つて、配給せられた煙草を背嚢へためこんでゐたので、早速渡さうと思つたが、其の暇がなかつたので、聲をかけあつたままで別れてしまつた。

ところで、其の日の戦闘で熊一君は戦死した。熊一君の墓標は、本派本願寺派南部法雷師によつて建てられた。善一君はそれに背嚢の煙草を供へて燒香しながら法雷師に云つた。

「兄は私を守つてくれてゐます、私は兄の分と合せて二人分きつとはたらきます、兄さん、見てゐて下さい」

中屋少佐

高知縣長岡郡三里村、その三里村の種崎に中屋と云ふ陸軍少佐があつて、筆者は親しくはないが、郷黨の先輩として尊敬してゐる。

この中屋少佐は、日露戰役に遭遇してゐるが、某夜將校斥候に往つたところで、暗くはあるし方角が判らないので、ひどく困つたものの任務は重く且つ大きい。何の糞と勇を鼓して進んでゐるうちに、乘つてゐた馬がぴたりと止まつた。少佐はどうしたのかと思つて前の方を見た。と、その時ぼつかり提燈の火が見えた。一人の媼さんが、提燈を點けて馬の前を横ぎつて往くところであつた。少佐はその邊の支那人が何處かへ往つてるだらうと思ひながら、一鞭くれて前へ往かうとしたが、馬は後退してどうしても進まない。

その時少佐の一行は、良い場所を見つけて一睡りすることにしてゐたので、其處へ寢て翌朝になつてみると、一行の前には斷崖絶壁があつて、その緣に少佐の乘馬の蹄痕があつたが、それは墜落を支へるために努力したやうな蹄痕であつた。

巢籠の鶴

明治三十七年五月、露西亞膺懲の師が起つて間もない時の事、兵庫縣出石郡宰植村櫻尾の國有林で巢籠の鶴を發見したので、これこそ皇軍全勝の奇瑞だと云つて、觀覽する者が多く、出石町の某は、其の奇瑞を天覽に供するために、其の實景を撮影して十二葉の寫眞を作り、服部兵庫縣知事を經て、田中宮相の許まで差出した。

其の寫眞はそれぞれ日を措いて撮影したものであるから狀態が多樣であつたが、其の中に四方に逃なつた峰巒を背景にして、さながら仙境のやうな處に一株の松の大木があり、それに四羽の雛をはぐくんでゐる母鶴のゐる物もあつた。

鷄の瑞兆

昭和十三年二月二日午前十一時、火砲數門を有する頑強な敵を蹴散らして鳳陽城占領の一番乘をした森田豐秋部隊長は、高知縣高岡郡浦ノ内村立目の出身で、元の高知市第二中學から士官學校に入り、少尉任官後は、高田、旅川、基隆、近衞等の各聯隊に在官した典型的武人で、其の間しばしば支那に駐在して、民國高官の間に知人もあり、陸軍稀に見る支那通である。

嚴父は森田豐和翁で、五人の子供があつて、豐秋部隊長はその四男であるが、豐和翁はじめ一家は軍務に服してゐるので、先年向西元十一師團長から表彰された名譽の家庭である。高知新聞の記者が同家を訪ふと、豐和翁は欣然として語つた。

「舊正月の午後、村の有志や近親の者が來て、屠蘇を汲みながら、出征軍人の話などをしてをりますと、何處からか 鶏 が入つて來て、朗かにコケツコーを唄ひましたから、何かの瑞兆ぢやないかと皆で云ひあひましたが、彼の時が四男が入城を完了した時であつたと思ひます」

皇軍を導く瑞鳥

昭和十三年五月十三日の朝八時、永城占領の地上部隊と協力するために、針之宮清二大尉機が澮河に沿うて飛翔し、丹城集附近にさしかかつたところで、下の方を一羽の大きな鳥が地上部隊を導くやうにすいすいと飛んでゐた。針之宮大尉は不思議に思つて、

「なんだ、あれは」

と云つて、ぐつと下降してみると、その鳥は繪のやうな丹頂の鶴で、それが兩翼を一つぱいに張つて飛んで往く後から、背嚢に日章旗をかざした吾が北進部隊の縱列が續いてゐた。そして、その鶴は地上部隊が遲れると、その度ごとに大きな輪を描いて待ちあはしながら、先導して北へ北へと飛んで往つた。針之宮大尉は、この不思議な瑞祥に思はず襟を正したが、基地に歸つて、

「徐州の包圍攻略近き喜びの日、江北の空に描かれたこの光景は、感銘の深いものがあつた」

と語つた。

メーンマストの鷹

海陸軍協力の下に行はれる皇軍の敵前上陸大作戰には、何時も瑞祥の鷹が現はれることになつてゐるが、昭和十四年十一月十五日の作戰に當つても鷹がその姿を現はした。

それは東京灣敵前上陸直前、南支派遣艦隊旗艦○○が、上陸豫定地點を偵察するために、北海沖を游戈中、八日午前八時ごろ、何處からともなく一羽の鷹が飛んで來て、メーンマストに止まつた。大

作戰を目前に控へた將兵たちは、

「それやこそ、鷹だ」

と云つて、大騷ぎをして捕へ、海南島製の鳥籠に入れて、好物の鼠の餌を與へて飼つてゐたが、間もなく十五日朝の壯烈無比の敵前上陸の大成功となつた。

乃木將軍の愛馬

日露の戰爭の時、乃木希典將軍と、露將ステッセルが水師營に會見して、旅順開城のことを議した時、ステッセルが水師營の棗の木の下で、乃木將軍に贈つた愛馬は、なかなかの逸物で毛並が眞白であつた。

其の馬は乃木將軍が歿くなると、島根縣選出の某代議士の許に引きとられてゐたが、昭和五年になつて其の馬は死んでしまつた。ところで昭和七年になつて、それをひきとつてゐた代議士も歿くなつたが、其の代議士の葬送の寫眞を撮つて現像したところで、葬列の中に交つて彼の白い馬の姿が鮮

に映つてゐたので、それを見た人びとは奇異の思ひをした。

黑猫

話は二十年昔に遡る。

神戸市の中央、何某町に赤川鐵工所といふのがあつて、五十餘名の職工が威勢よく働いてゐた。その鐵工所の經營者は、赤川助六といつて、腕一本で叩きあげた小成功者の一人であつた。某日その工場へ一疋の黑猫が迷ひ込んで來た。黑猫の肉を食ふと胸の病氣が癒るといふ傳說があるので、それを知つてゐたのか、職工の中から、

「黑猫は體に利くといふぜ、食つたらどうだ」

といふ者があつた。すると三人の者が飛び出して往つて、それを追ひ廻はして捕へ、火の中へ拋りこんで燒いて、三人で食つてしまつた。それを見て、

「猫は祟るといふぜ」

といつて鬼魅を惡るがる者もあつた。三人は、

「今時、そんな馬鹿げたことがあつてたまるものか」

といつてゐたところで、數日して工場の入口から火が出て、物凄い勢で燃え出した。そして、赤川の家族はじめ他の職工は、皆に身をもつて逃れたが、不思議にも猫を食つた三人だけが、猛火に包まれて燒死した。

さうなると赤川は滿鬼魅が惡い。そこで新に建築した工場の片隅に祠を建てて、猫の靈を祠つたが猫の怒がをさまらないのか、思ふやうに仕事が廻はつて來なくなつた。たゞに廻つて來たかと思ふと、手違を生じて損失ばかりした。その結果赤川は、工場を他人に渡して神戸から姿を消したが、間もなく淡路の海岸へ死體となつて流れ寄つた。そして、殘された二人の子供のうち、男の方は自宅で縊死を遂げ、女の方は嫁入先から歸つて發狂悶死した。

「黒猫の祟だ、怖しいことだ」

こんな噂がぱつと立つて、一時はその建物の周圍に見物人が黒山を築いたが、人の噂も七十五日、間もなく工場は立ち腐れたままで長い間風雨に晒されてゐた。

すると四年前、その工場を取り毀はして、その跡へ四十餘軒の長屋を建てはじめた者があつた。ところが、上棟式の間際になつて、作業中の大工が屋根から落ちて死んだ。と、幾何もなく、今度は人足の一人も屋根から落ちて死んだ。しかも、二人とも墜落の直前に、

「黒猫を見た」

といつた。だが、普請に從事してゐる者の中には、氣の強いものがあつて、

「そんな馬鹿なことがあるものか」

といつて嘲笑したが、翌朝それが屋根へあがつたところで、足を辷らし墜落した。傷は淺かつたが嘲言をいひつづけながら、二三時間位して死んでしまつた。

そこで忘られてゐた因縁話がまたむしかへされるやうになつた。

そのうちに工事はどうにか進んで昭和十年の春、四十餘戸が出來上つたが、誰一人入らうとする者がなかつた。ところで六月の初旬になつて、噂を信じないのか、それと知らなかつたのか、山脇といふ者が入つて店を出したが、引越した翌日、主人が病氣になつて幾何もなく死亡した。

そこで噂の上に噂の花が咲いたが、その中に松本といふ借手が現れた。それは噂を知つてゐる者であつた。

「たいしたこともあるまい」

といつて引越して來たが、四日目になつてころりと死んだ。しかし、死ぬる間際に黒猫の姿を見た上に、啼聲を聞いたとのことであつた。昭和十年十月の現在、二三戸が塞がつてゐるだけで、他はが

らんとした空屋敷を形成してゐる。

屋根の上の黒猫

昭和九年の夏、横井春野君が三田稻門戯の試合が見て歸つて來たところで、其の時千葉の市川にゐた令弟の夫人から、

「病氣危篤、すぐ來い」

と云ふ電報が來た。横井君は令弟の容態を心配だから、夜もいとはずに市川へ駈けつけた。そして、令弟の家の門口を潜らうとして、何氣なく屋根の上へ眼をやつたところで、其處に一匹の黒猫がゐて、それが糸のやうな聲で啼いてゐた。瞬間横井君は、

「しまつた」

と思つた。それは横井君のお父さんがまだ壯い比、酒興のうへで、一匹の黒猫を刺し殺したことがあつたが、それからと云ふものは、横井君の家には、何か不幸なことでもあると、きつと黒猫が姿を

あらはした。お父さんが歿くなつた時にも、また四人の兄弟をはじめ二人の子供の歿くなつたときにも、やはり黒猫が來て屋根から離れなかつた。横井君は其のつどそれを見てゐるので、

「此の野郎」

と云つて、其處にあつた小石を拾つて投げつけた。すると猫は屋根の向う側へ姿をかくしたやうであるから、家の中へ入らうとすると、すぐまた出て來て淋しさうに啼いた。横井君は令弟のことが氣になるので、もいちど小石を投げつけておいて家の中へ入つた。と、令弟は氣息えんえんとして、今にも呼吸を引きとらうとしてゐるところであつた。

横井君は猫が氣になるので、また外へ出て猫を追つたが、猫は依然として屋根の上から離れなかつた。そして、曉けがたになつて其の猫の聲がぴたりとやむと同時に、令弟が呼吸を引きとつた。

猫

備後の尾道市の向うに、向島と云ふ小さな島がある。大正三年比其の向島に阿島と云ふ婆さんがゐ

た。阿島は所天に先だたれて、一人で糸を紡いだり洗濯したりして暮してゐた。其の阿島は酒も飲まず煙草も吸はず、べつにこれと云ふ道楽もなかつたが、ただ猫が好きで、平生二疋か三疋かの猫を飼つてゐた。

某日、近所の女房が洗濯物を持つて阿島の家へ往つた。それは夏の白晝のことで、外には焼きつくやうな陽の光があつた。其の時阿島は縁側で糸繰臺を傍へ置き、一方の手に糸を持つたなり假睡をしてゐた。女房はそれを見て、

「姐さん、姐さん」

と云つて呼んでみたが起きないので、無理に起すのも氣の毒だと思つて、洗濯物を其のまゝ其處へ置いたものの、縁側では不用心であるから、座敷の内へ投げこんで置かうと思つてひよいと座敷の方を見た。

其處には阿島が可愛がつてゐる三疋の猫がゐて、それがそれぞれ手拭で鉢巻して、前脚に椀や杓子などを持ち、後脚で立ちながらかつぽれのやうなものを踊つてゐた。女房は鬼魅が悪いので逃げだした。

それから半年も經つた比、其の阿島が病氣になつたので、近所の人びとは獨身者の婆さんを氣の毒がつて、代る代る見舞に往つて雑用をたしてやつた。

某夜、阿島の家の隣の女房が、平生のやうに阿島の病氣を見舞に往つたところで、阿島の枕頭に彼の三疋の猫がちよこなんと坐つてゐた。女房は不思議に思つて容子を見てゐると、其の中の一疋の猫が、まるで人間のするやうに、一方の前脚を阿島の額へやつて何か考へるやうに首をかしげた。女房はちよつと驚いたが、歸ることもできないので、

「姐さん」

と云つてあがつて往つた。すると猫は何處かへ往つてしまつた。

そこで女房は、阿島の枕頭へ往つて聲をかけたが阿島は何も云はなかつた。女房はもしやと思つて阿島の額へ手をやつた。阿島の額は氷のやうに冷たくなつてゐた。阿島は死んでゐたのであつた。そして、彼の猫は何處へか往つてしまつて、その翌日から姿を見せなかつた。

煙草を喫む

濱崎文太郎君は高知縣吾川郡浦戸村の産、貧しき漁師の兒から船長になり、後には造船會社などを

經營してゐたこともあつて、著者の鄕里では立志傳中の一人とせられてゐた。

其の濱崎君が十八の時、巽丸と云ふ和船の炊事夫をしてゐた時のことで、それは大晦日の夜であつた。大阪からの歸りに、室戸岬を廻つて奈半利沖まで來たところで、今まで何も見えなかつた船の向うに、數多の魚船が見えて來たが、何を釣つてゐるのかそれぞれ船の中で漁火を焚いてゐた。其の晩は曇つてゐたが追手で申分のない航海であつた。ところで、船がそれに近くなると不意に動かなくなつた。船頭が船方を呼び集めた。

「おうい、みんなこうい」

濱崎君も其の聲に應じて胴の間へ往つた。胴の間には船頭はじめ二三人の者が坐つて、煙草を喫んでゐた。

「おぬしも、煙草を喫め」

そこで、濱崎君も皆の眞似をして煙草を喫んだ。

「それ、みろ、あれを」

漁船の火は其の時一つ二つと消えはじめてゐたが、間もなく消えてしまつた。同時に船が動きだした。船頭は起ちあがつた。

「もう、これでええ、これでええ、それ、取り梶いイ」

船は其の夜の明け方に無事浦戸港入へつた。

青と赤の航海燈

濱崎文太郎君が村井汽船の船長をしてゐた時のことで、其の時は三千五百トン位の荷物船に石炭を積んで、若松から東京へ往つてゐた。

其の船は熊野灘にかかつてゐた。ちやうど暗みかけた時で空はまだ明るかつた。六時であつたらう交替時間が來たので、濱崎君は上へあがるために上衣を着はじめたところで、甲板の方で、

「ばんざあい、ばんざあい」

と云ふ數人の聲がした。それは船員たちが何かを嘲弄してゐるやうな聲であつた。濱崎君は何事だらうと思つて、急いで甲板へあがつて往つた。甲板には五六人の水夫がゐて、それが勝浦沖から來てゐる青と赤の航海燈を見てはやしたててゐるところであつた。其の航海燈は早い速度で近づいて來たが、どう云ふものか船は見えなかつた。水夫たちはそれを見てまた一齊に、

「ばんざあい」

を浴びせて嘲弄した。すると、航海燈はふいと消えてしまつた。消えてしまつたかと思ふと、亦す

ぐ向うから來るのであつた。來ると水夫たちはまた萬歳。そこへ水夫長が來た。濱崎君は、

「蜃氣樓ぢやないか」

と云つた。水夫長は妙な顏をしてゐた。

「船長、あれがやつたのは、今日ですよ」

濱崎君はちよつと其の意が判らなかつた。

「あれとは」

「昨年、此處からやつたぢやありませんか」

それは細君に男が出來たので、憂鬱になつてゐた船員の一人が、其處から投身自殺したことであつた。濱崎君はぞつとした。

「おう」

濱崎君が長い間の海員生活に、怪異を見たのは、これと、漁船の火に對して煙草を喫んだ時の二つであつた。

眞白な大きな帆

高知と阪神の間を往復してゐる汽船は、今でこそ船體も大きく千トン前後になつてゐるが、日露戰爭比までは非常に船體が小さくて、船に弱い人たちはひどく惱まされたものだ。

明治の末年の事であつた。土佐航路に當つてゐる船に高新丸と云ふのがあつた。某時雪のちらちらする晩、例によつて神戸を出帆して紀淡海峽へかかつたところで、眞白な大きな帆の帆船が舳へ近くぽつかりあらはれた。高新丸の方では衝突しては大變であるから、左の方へ船首を向けたが、向ける

に從つて其の帆船も左の方へ曲つて來るので、此方でもしかたなしに左へ左へ船首をやつた。

と異樣な音がして船は座礁してしまつた。同時に帆船はふつと消えた。

高新丸の座礁したところは紀州の海岸であつた。其の時高新丸には高知の名士で辯護士の宮地鱗君が乘つてゐた。これは宮地君の話。

蛇の木

私は此の比ちよとした仕事があつて、家で物を書かない日は、毎日川崎の方へ出かけて往くことになつてゐるが、時間の都合で午前から往つた時には、十二時までの食事の時間を散歩に費すのが例になつてゐる。

四月三十日、其の日も十二時が來ると急いで會社の食堂へ入つて、一ぱいの紅茶を啜り、一皿の菓子を喫つて、江戸と云ふ親しくしてゐる壯い社員と二人で散歩に出かけようとしてゐると、是れも親しい山本と云ふ壯い社員と、女事務員の二人が後から食堂を出て來たのでそれを誘つて四人で出かけて往つた。

それは生溫い南風が吹いて、沙埃がざらざらと顏にかかるのはきみが惡いが、散歩には持つて來いの日であつた。私達は會社の裏門を出て、レールを敷いたすぐ眼の前の六郷堤に眞直に往つてゐるトロ路の脇から下におり、南河原の新開地を左へ左へと往つた。そして、往つてゐるうちに其の路は往き詰つて、左右に別れてしまつた。左右に別れた路の手前には淺い小さな泥川が流れてゐた。私達は其の泥川に沿うた路を右に曲つて往つた。路の前には田圃がひらけて粟を蒔いた水田も處ところにあつた。路を曲つたところで江戸君が、

「山本さんが、今日も、また、あれですか」

と云つて微笑を見せた。それは山本君が蛇を捉へて衣兜に入れたり首に卷いたりして、女達をいやがらすと云ふことを聞いてゐるので、そんなことだらうと思つて女事務員の顏を見た。すると女事務員も笑つてゐるので、やつぱりさうだなと思つて今度は山本君の方を見た。まだ學生氣の多い山本君は黑い惡戲さうな眼をくるくるとさしてゐた。

右側は泥川を隔てて新開街の通路に入口を持つた小さな新しい平家の横手になつてゐた。一行が其の平家の裏口と並行した時、江戸君が、

「をる、をる」

と、云つて怖さうに一足すさりながら泥川の緣の蘆の芽などの出た草の中へ指をさしさしした。私はすぐ蛇だなと思つて眼をやつた。長さが一間位もありさうな赭鼠の縱縞のある青大將が、微濁のした水の中に胴體を沈めて泳ぎながら、平家の裏口の方になつたむかう緣に往くのが見えた。

「大きいなあ」

酒屋の御用きききらしい壯佼が味噌包みのやうな竹の皮包を持つて、其の平家の裏口へひよいと出てきた。

「蛇が、蛇が」

と、云つて指をさすと、壯佼は脚下にある釣竿を持つた。私は釣竿を折つては釣竿の主が困るだらうと思つたので、

「それは、釣竿だよ、釣竿だよ」

と云つて注意した。と、山本君が、

「捉へようか」

と、云つて女事務員から紙をもらつて、それを持つて平家の横手へ往つて、櫟のやうな木の下にあがつてゐる蛇の尻尾を捉へて、

「こら、來んか、來んか」

と、云つて引ぱつたが、蛇は體の半分を川の中へ落して、それで木の根に卷きついたのであからなかつた。忌いましくなつた。忌いましい中にはそれを其のままにして置いては、其の平家をはじめ人家へあがつて人家の者を驚かすから、どうかしなくてはならないと云ふ焦慮さもあつた。

「殺さうか、殺してしまへ」

私はどうしても其のままにして置けなかつた。何かえものはないかと思つて四邊に注意した。路の左側に一處紫色の花の一面に咲いた豌豆畑があつて、それには木の小枝を立てて垣にしてあつた。私はそれを見るなり畑へ往つて、毒どくしい其の花の絡んでゐる一本の小枝を拔いて來て、それで卷きついてゐる蛇の頭を放さうとしたがはなれなかつた。と、山本君が、

「放します、そつちへ執つてください」

と云つた。私は、

「よし、來た」

と、云つて小枝を持ちなほしたところで、尻尾を放された蛇はするすると泥水の中に泳ぎでた。私は小枝の端をやるなり、それですくつてはねあげた。蛇はかなりな重量を持つて路の眞中にのたりと横たはつたが、すぐ這ひ出さうとした。私はいきなりなぐりつけた。一度二度三度。そして、其の胴體をすくつて傍の畑の中へ小枝といつしよに投げこんだ。それは我ながらすばらしいやりかたであつた。私はそれでほつとしたが、それとともにめうな空虛を感じた。

蛇はと見るとまだ死にきれてゐなかつたのか體をぴりぴり動かしてゐた。と、山本君が蛇の傍へ往つた。其の時平家の裏口へ車夫のやうな年とつた男がのそりと出て來た。年とつた男は、

「殺すなら、一思ひに殺してやるがいい、なま殺しはいけねえ」

と云つた。すると山本君が、

「それぢや殺してやらうか」

と、云つて石を拾つて其の頭を目がけて二三度叩きつけた。蛇はもう胴體を動かさなくなつた。

年とつた男のそばには、其の平家の細君であらう年増女と、其の子供らしい少年が來て立つてゐた。私達は其のまま蛇を殺して歩いた。後から自轉車に乘つた醫麥屋の出前持が來たが、私達の傍へ來て一度自轉車を停め、それから再び駈け出さうとするはずみに、隻手にしてゐた二つ三つの丼を乘つけた盞をとり落した。丼が碎けて中の醫麥が路の上に散らばつた。

「まあ、おいしさうな匂ひ」

と云ふ者があつた。私は、

「蛇の祟だね」

と云つた。すると江戸君が、

「あなたが殺して、醫麥屋に祟るのですか」

と笑つた。私も笑つて、

「氣の弱い者に祟るさ」

と云つたが、内心己でも蛇をころしたのが氣になつてゐた。私は其の時、人類が蛇を嫌ふのは、人類の過去の歴史に於て、何か重大な關係があつたがためで、先天的の原因に基いてゐると云ふ動物學者の說を思ひだすとともに、親子三人が大蛇に執り卷かれてゐるラオコオンの彫刻の寫眞を眼の前に浮べて、蛇を殺した辯解を見つけようとしたが見つからなかつた。

私達はそれから小さな田圃路に入つた。數日前、山本君が大きな青大將を捉へたと云ふ寺の裏手の蓮華草の咲いてゐる草原を通つて、すこし往つたところでまた一つの小さな青大將が堤下の草の中に尻尾を出してゐるのを見つけた。私は一疋殺したからにはそれも殺してしまへと云ふやうな棄鉢な氣もちになつてゐた。

「これも殺さうか」

私と同じやうな氣もちでゐたのか、山本君がさう云つた。私はまた傍の豌豆畑から小枝を執つて來て山本君にわたした。山本君は其の小枝で蛇を突いた。蛇は其のまま穴の中へするすると入つてしまつた。私達はそれをすてて歸りかけた。

「蛇が數多ゐる木がありますよ」

と、江戸君が云ひだした。私達は其處へ往くことにして路のむかうの梨畑の前に見える二三本の松を目標にして、田圃の中の畔路を通り、電車の線路のやうなレールを敷いた路の上へあがつたところで、五分前の汽笛が鳴つたので中止して歸つて來た。

私は其の時、輕い迷信的な憂鬱にとざされてゐたが、其のうちに、數日來漱をしてゐた喉の苦しみが除れてゐることに氣が注いた。私は何んだか已に纏つてゐた物の影が除れたやうに思つた。私は晴れ晴れとした氣もちで仕事にむかふことができたが、夜になつて二階の書齋で物を讀んでゐると、何時の間にか晝間の迷信的な憂鬱が返つて來た。と、天井の方でぱちりぱちりと云ふやうなちひさな音がした。おやと思つてゐると其の音は窓の外へ往つた。私はふと晝間殺した蛇が來たのではあるまいかと思つた。さう思ふと其の蛇が二階の梯子段の何處かにによろによろとしてゐさうに思はれて來た。電燈を消して寢ようとすると、眼の前に大きな網の目のやうなものが一面にかかつて、それがみるみる紺青色の蛇の胴體のやうになつたが、しかし、夢にまでは入つて來なかつた。

翌日は日曜であつた。私はもう蛇のことは忘れてゐた。そして、其の翌日即ち五月二日になつて、朝十時比、また川崎へ往くつもりで、家を出て切支丹坂をあがつてゐると、坂の右側の樹木の茂つた崖の中腹、苔の黑くなつた石垣の上の木の根の出た處に、後半身を隱した小さな青大將が此方を見るやうにして頭を見せてゐた。夏になると其の邊にはたまに見ないこともないが、私には前前日のことがあるのでびつくりした。そして、やや心に餘裕が出來て來ると、もし此の蛇が殺された蛇の怨靈であつたらどうだらうと思つた。私は坂の上から電車に乘りながら、之をでつちあげたなら怪談が出來るだらうと思つて、ちよと考へてみたがまとまらなかつた。

其の翌日は雨であつた。雨の翌日は即ち五月四日、其の日は雨は止んでゐたが雨雲が濃くて、今にも降つて來さうであつたが、十二時近くなつてやつと晴れて暑い日が照つた。私は紅茶と菓子、江戸君は丼飯を喫つて、そこそこに食堂を飛び出して、會社の裏門を出たが、何日の新開街におりずにトロ路をすこし往つて、其の前から左に折れ、人家の建ち並んだ狹い巷のやうな通路をつき拔けると、ちよつと廣い田圃路に來た。私達は其の田圃路を二三間右に往つて、そこの四辻をまた左に折れて往つた。路の左側は雨あがりの濁水の流れてゐる泥溝であつた。

すこし往くと路の右側に見覺えのある寺の門があつた。門の前を通り越すと寺の建仁寺垣、それから木の古い小さな鳥居のある社の入口、社の入口の次が生垣になつて、其の次が煙草の看板の出てゐる新らしい大きな雜貨店であつた。蛇の木と云ふのは其の雜貨店の簷口にある二本の楓の老木であつた。楓は雜貨店の正面から左に寄つた路傍にあつた。灰色の幹をしたゴヂック式の禿た楓は、頭の毛のやうに上の方に微紅い嫩葉をちよつぴりとつけてゐた。江戸君は其の手前の楓から見るとすこし小さい前の楓の梢をじろじろと見てゐたが、

「をろ、をる」

と云つて、上に向けて指をさした。路の上の方へ出てゐる灰色の幹を、尻尾の方を見せないで胴中で一卷きした小さな青大將か、幹のこぶこぶした處に其の鎌首を乘つけてゐた。

「なるほど、ね」

「ある時になると、十疋も二十疋もあるのですよ」

「さうですか、ね、え」

私は江戸君と話しながら彼方此方に眼をやつた。其の幹の上の方に出た小枝の嫩葉の中に小さな尻尾があつた。

「あすこにもをります」

と云つて、私は江戸君に知らした。江戸君はそれから店へ入つて往つた。五十前後の盲目縞の野良着を來た主人が上框に腰をかけてゐた。江戸君は煙草を買ひながら蛇のことを聞いた。

そこは石井と云ふ家であつた。主人は日露戰役に兄弟で從軍した人であつた。主人は外へ出て來て私達と同じやうに楓の木を見あげながら話した。主人の話では、其の楓は主人が少年の時とすこしも變らないとのことであるから、非常に年數を經てゐることが判る。それは女夫楓で、秋になると黄いろに染まる大きい方の楓が雄で、眞紅に染まる小さい方の楓が雌であるとも云つた。

「蛇について、何か云ひ傳へでもありますか」

と、云つて聞いてみると、主人は、

「べつにそんなことはありませんが、大事にしてやれと云はれてをります」

と云つた。今、雜貨店の建つてゐる處は、震災當時まで石井家の土藏があつた處で、蛇は其の土藏の中にもゐた。そして、八十八夜の農家の種蒔をする比から楓の木に集まつてうようよとしてゐたが、夏になつて楓の葉が茂つて來るに從つて、遠く出歩き、秋になつて歸つて來るのであつた。

其の蛇の中に尻尾の切れた大きな蛇がゐて、雨の前にはきつとおりて來て其の邊を這つた。

「こんないい日和だのに、蛇が出て來た、をかしいぞ」

と云つてゐると、きつと雨になつた。石井家は舊家で、其の主人で七代其處に住んでゐると云つた。其の石井家の祭つてゐると云ふ寺の隣に入口を持つた八幡宮には、延享年代に改築した時の棟札があると云ふので、主人と別れて二人で往つてみた。そして、其の小路の往き詰を左に折れようとしたところで、其處の草の中にも一疋の小さな青大將がゐたが、私達の跫音に驚いたのか、によろによろと姿を隱してしまつた。

左手の狹い境内には、八幡宮の祠が此方向きに建つてゐた。其の祠の傍には大きな幹の腐りかけてゐる一本の槇の老木と、彼の日、梨畑の前に見えてゐた二三本の高い老松があつた。祠の右手からは梨畑越しにレールを敷いた路が見えて、其の前には田圃の中の畦路もあつた。と、江戸君が、

「此の間の蛇も、あの木の蛇らしいですね」

と云つた。私は、

「さうか、な、あ」

と、さも氣のなさそうに云つたが、心ではたしかに石井家の蛇のやうに思つたので、石井家に對してすまないやうな氣がした。が、其の十一日になつてまた彼の蛇を殺した處へ往つてみると、其の時の車夫のやうな年とつた男がゐて、

「此の間の蛇は、死なかつたのだよ、あれから、びくびくしてたが、ゐなくなつたのだよ」

と云つたので、石井家に對して罪を感じてゐた私は、やや安心したものの、彼の蛇が復讐しようと思つて、何處からか覗つてゐるやうで鬼魅が悪くなつた。それとともに私は彼の切支丹坂の蛇のことを思ひだしたが、すぐ其の後から異狀な神經を持つた己がをかしくなつて、獨りで笑つたのであつた。

鵜

土佐の海岸になつた私の村には、もう其の比洋行するやうな人もあつて、自由主義の文化はあつた

が未だ日清戰役前の半農半漁の海村のことであるから、村の人の多くの心を支配したものは原始的な迷信であつた。

聖神と云ふ無名の高僧を祭つたと云ふ社の森には、笑ひ婆と云ふ妖婆がゐて人を見ると笑ひかけたが、笑ひかけられた者は其の妖婆の笑へなくなるまで笑はないと病氣になつて死ぬのであつた。は、は、は、と云つて笑ふ妖婆の聲は山に反響をかへした。其の聖神の社の近くにある楠の大木は伐らうとして斧を入れると血が滴り、朝になると其の切口は癒えて痕が判らなかつた。聖神の東になつた山のはづれには、三味線松と云ふ幹の曲りくねつた松があつた。其處からは時とすると三味線の音が漏れた。其の三味線松の近くには眼も鼻もない怪人があらはれることがあつた。某日の黄昏隣村から歸つてゐた村の女の一人は、眼も鼻もない怪人のことが氣になるのでこはごは歩いてゐると、前を一人の女が往つてゐる。村の女はよい道伴ができたと思つたので、急いで追ついて話しかけ、「此處は眼も鼻もないものが出ると云ひますから、こはくてこはくて困つてをりました、どうかいつしよに往つてくだされ」と、云ふと前を歩いてゐた女は、「ありや、わたしかよ」と、云つて揮り向いたが、それは眼も鼻もないのつぺらな顏であつた。

大井の小路と云ふ小路には夜よる馬の首が飛ぶやうに走つてゐた。夜海岸で投網を打つてゐると大人道が腰の蠶を覗きに來た。七つさがりに山に往つて木を伐つてゐると鼻の高い大きな男が來た。其

の大きな男は天狗であつたから木を伐りに往つてゐた者は病氣になつた。八番のあれと云ふ地曳網の網代になつた處には、疊つてどんよりとした夜には陰火がとろとろと燃えた。

高知市の北になつた法華堂と云ふ山の方から飛んで來る陰火は、新らしいおろしたての草履の裏に唾を吐いて、それで「法華堂の陰火よう」と、云つて招くと陰火は見えてゐてもゐなくても必ず傍へ來て燃えた。其の陰火は法華堂のあたりで大事の手紙を無くして斬られた飛脚の魂で、今に其の手紙を尋ねてゐるので、「狀が此處にあるぞう」と、云つて呼んでも來るのであつた。

神の峰であつたか貴陽山の山であつたか、其處には陰火が山をぐるりととり卷くことがあつて、それを見た者は必ず死んだ。陰火は到る處に燃えもすればふうはりふうはりと飛びもした。

狸も人をたぶらかした。村の老人が通つてゐると、狸が木の葉を身につけて人間に化けてゐるので「そんなことでは駄目だ、かういふふうにしろ」と、云つて狸を欺して袋に入れ、殺して汁にたいたと云ふこともあつた。

しばてんが麥のかさうれ時に出て、夕方野に遊んでゐる子供を伴れて往つた。其のじばてんは小坊主になつて人が通りかかると、「相撲とろか、相撲とろか」と、云つていどんだ。小坊主の癖に生意氣だから投げ飛ばしてやらうと思つて、相撲をとつてみると反對に投げ飛ばされるので、これはをかしいと思つてまたかかつて往くとまた投げ飛ばされる。さうして小坊主を對手にしてゐると朝になつて

通りかかつた者に注意せられ、氣が注いてみると己は刑棘と相撲をとつて血みどろになつてゐる。其のしばてんの一種のゐんかうは水に泳いでゐる子供の肛門をぬいた。

牛靈がとり憑き、犬神がとり憑き、道を歩いてゐると七人御崎が來て、それに往き逢つた者は熱病にかかつた。海では風の靜な晩、船幽靈の漕ぐよいよいと云ふ櫓の音が聞えた。

某夏の微月の射した晩、夜學會をやつてゐた仲間の少年達と臺場の沖と云ふ處へ旗奪ひに往つたことがあつた。臺場とは藩政時代に外夷に備へるために築いた砲臺で、小山のやうになつた土壘の上には大きな松などは生えてゐた。私達は其の臺場の南側の草原で旗奪をやつた。それは尖の方に繩切を結へた大きな竹竿を建て、兩組に別れた少年達が其の下に押し寄せて、敵方の防害をしながら隙を見て竹竿に攀ぢ登り、解いた繩切を味方に執らすやうに投げて、其處へも迫つて來る敵方を排し除けて首尾良く味方の陣地に持ちつける遊戯であつた。

私たちは其の旗奪を數回やつて休んでゐたところで、何人かが小さな聲で、

「あれが見えるか、あれが見えるか」

と、云ふので眼をあげると小さな一つの手が東の方を指してゐる。何だらうと思つて其の方へ眼をやると、それは八番のあれの陸の方になつた松の梢に蒼白いぼうとした月の圓さ位のものがあつて、それが見てゐるうちに螢火のやうにばらばらになつて下へ落ちてしまつた。私の頭には八番の陰火と

云ふことが思ひ出された。と、また松の上に火の團が見えて、見えたかと思ふと、またばらばらに散つた。私の頭はじやんとして體が痺れたやうになつた。私の側にゐた寅と云ふ少年は泣いた。

此の旗奉の夜の怪異は、今から考へて見ると實在の怪異であつたか、それとも怪異の恐怖の中から創作したものであつたか、それはどうもはつきりしないが、其の後にあつた一つの怪異は實在のもので、老媼茶話の中にでもありさうな話であるが、それは後になつて人間の巧智の所産であることが判つた。それは私が十二三のときのことであつた。が、村の人家の北側になつた山の麓に清導寺と云ふ寺があつて、其處の住職に對する批評を何人がするともなしにしだしたのを聞いた。其の寺は肉食妻帶の寺で其の住職には妻子があつた。

「あんななまぐさ坊主は、法力がないから、あんな山の中にはをることができんさうぢや」

「清導寺の坊さんは、法力がないと云ふぢやないか」

「黒い牛のやうなものが、夜よる本堂に出ると云ふことぢや」

「あの山には、天狗がをるから、なまぐさ坊主はをれまい」

清導寺の上になつた山の頂上には大きな岩が立つてゐて叩くとかんかんと鳴ると云ふので、村の者はかんかん岩と云つてゐた。少年仲間の久馬と云ふのが、某日其のかんかん岩へ遊びに往つて、天狗に投げられたと云つて頭の怪我を見せて、「白兎が、早う返れ返れと云うてくれたと云ふが、俺には見

えざつた」と、云つたのを覺えてゐたので、私はなるほど清導寺の谷は怖い處だと思つた。

「あの坊さんは、ほんまに法力がないぢやらうか」

「ちつともないと云ふよ」

「さうか」

「あんな法力のない坊主は、しやうがない、何人か力のある人を呼うで來にやあいかんと皆が云ひよる」

清導寺谷の下の方にさんでんと云ふ畑があつた。

「今日、さんでんの上の方を鷲が飛びよつたと云ふぞ」

「ほう鷲か」

「さうよ、鷲か」

「鷲が此處な處にをるぢやらうか」

「どうか知らんが、飛びよつたと云ふぞ」

「鷲は人を掴むと云ふぢやないか」

「掴むとも、三之助は鷲に掴まれたぢやないか」

三之助とは芝居に出て來る少年のことであつた。また、北隣の老人と隣の男はこんな話をしあつ

た。

「あれや鷲ぢやなうて、熊鷹と云ふぢやないか」

「あれや、なしぢやよ」

「なしと云ふ鳥があるかよ」

「いや、はなしぢやよ」

冗談を云つたのは北隣の老人であつた。其の鷲の噂があつてから數日して、私達をおびえさした事件が起つた。それは晝間愛かしてあつた清導寺の嬰兒が寺の傍の野雪隱の中に落ちて死んでゐたと云ふ事件であつた。そして、嬰兒にさしてあつた襁褓が庭の梅の木の枝にかかつてゐたと云つて、嬰兒は鷲に掴まれたと云ふことになつた。

「あれや、どうしても鷲ぢや」

「さんでんの上を飛びよつた鷲ぢやよ」

「能鷹でも子供位は掴む」

「子供が怖い、これから小供に氣を注けんといかん」

「あれや、お寺の坊主の力がたらんからぢや」

「力のある坊主を伴れて來にやあいかん」

「あれや見せしめぢや」

村は暫く寺の嬰兒の死んだ噂で持ちきつてゐたが、それも何時の間にか忘れられてしまつた。其の嬰兒の死んだ噂の消えた時分のこと、それは事件の起つた時からどれ位時間の隔たりがあつたか判らないが、某日の夕方、私は二三人の少年仲間とすぐ近くの疊屋と云ふ家の庭で遊んでゐた。其處は代代疊屋をやつてゐたが、肥つた白痘痕のある其處の主人が歿くなるとともに商賣をよして、其の比は老婆と年とつた娘が何もせずにゐた。私たちは其の疊屋の庭で、木の枝の削つたのを地べたに打ち込んで執りつこをする根つ木と云ふのをしてゐたところで、堀内と云ふ村の巡査がつかつかと入つて來て、私達の傍を通つて表座敷の縁側の方へ往つたが、私達は根つ木に氣をとられてゐたのでべつに注意もせずにゐると、不意に表座敷の方で獣の吠えるやうな鬼魅の悪い怒たつた人聲がする間もなく、障子のばたばたと倒れる音がした。私たちは驚いて根つ木をやめた。疊屋の表座敷を借りて祈禱などをしてゐた總髪にした山伏と巡査が組みあつたままで縁側に出たところであつたが、間もなく二人の體は庭におりてくると黒い渦を巻いた。

山伏の獣の吠えるやうな怒聲は一層私たちをはらはらさした。其の私達のはらはらしてゐる前を巡査は兩手を後手に縛つた山伏を引きたてて往つたが、其の山伏の蒼白い口髭の濃い口元に血がにじんでゐたので、鬼魅が悪くなつて顔をそむけてゐる間に、もう巡査は山伏を引きたてて入口の堀立門を

出て往つた。

「山伏が堀内さんに縛られた」

「山伏は何をしたらう」

私も子供心に山伏の縛られて往つた原因を知りたかつたが判らなかつた。私は清導寺の嬰兒の死といつしよに奇怪な事件として、時どきそれを思ひだして考へてみたこともあつたが依然として判らなかつた。ところで、二十年も過ぎてから村の古老と話してゐるうちに、其のことを思ひだしたので聞いてみると、

「あれは、山伏が寺を乗取るつもりで、子供を殺したものだよ」

と、云つたのではじめて其の疑問が解けるとともに、これは怪談になる話だと思つたのであつた。

村の怪談

私の郷里で女や子供を恐れさすものは、狸としばてんと云ふ怪物であつた。

「某さんは、昨夜、狸に化されて家へよう歸らずに、某所をぐるぐると歩いてゐた」

「某さんは、狸に化されて、朝まで某處に坐つてゐた」

「某さんは、某さんの處へ寄つて、茶を飲まして貰うてやつと正氣になつて歸つた」

などと狸に化されて、朝まで墓地を歩いてゐた人の話とか、己の家の方へ歸つてゐたと思つてゐたものが、反對に隣村の方へ往つて、其處の渡船場へ出てやつと氣が注いたと云ふやうな話は平常のことであつた。しばてんの話も、それといつしよによく聞かされた。しばてんは子供の姿をしてゐた。それは親類の許から饗應になつて歸つて來る村の男の前にちよこちよこと出て來た。

「角力をとらうか、角力をとらうか」

村の男は、なにを生意氣なと思つたが、本氣になつて子供の對手になるのも大人氣ないので、其のまま往かうとすると、子供は雙手を擴げて立ち塞るやうにする。

「角力をとらう、角力をとらう」

村の男は、子供を突き飛ばして驚かしてやらうと云ふ好奇心が起つて來る。

「とるか」

村の男は、月の光に子供の顏を透してみて、莞と笑ひながら早速雙手を突きだして、子供の胸のあたりに平手をやり、一と突きに突かうとしたが、子供は動かないで、其のはずみで己が背後へよろけ

る。彼は忌いさしいので、兩手で子供を抱き締めて拔げ飛ばさうとする。子供はふいと身をかはす。彼はそれがために前にのめる。彼は忌いましくてしかたがない。

其の男は、村の者から大石塔と云はれてゐる海岸の松原にある無緣の大きな石碑を對手に角力をとつてゐたのであつたが、朝になつて地引網へ往く者から氣を注けられてはじめて我に返つた。某者は怪しい子供に角力をいどまれたと云つて、荊棘の藪の中で、血みどろになつて荊棘と角力をとつてゐた。

しばてんは、初夏の比、麥の葉が黃ろに染まる比に好く出て、野に遊んでゐる村の少年をたぶらかした。麥の黃ろになりかけだのを、其處では麥のかさうれと云つた。其の時分には、好く海岸に大きな波が立つて海が脹らんだやうに見え、潮氣を含んでべとべとするやうな風が吹いて、麥の穗の上を白い蝶が物憂さうに飛んだ。其の麥のかさうれ時には、何時も暗くなるまで遊んでゐる少年も、陽が傾く比から家に歸つて往つた。

しばてんと關聯して、河童の話も聞かされた。それは池や川にゐて、時折村の少年を死に導いた。

「あの子はゑんかうにかうもんを拔かれた」

私の村では、河童をゑんかうと云つた。土用の丑の日には、村の農家では胡瓜を海や川に流して河童を祭つた。

狸は人をたぶらかすばかりでなく、また人に憑いて禍をした。私の村で人に憑くものでは、狸のほかに犬神と云ふものがあつた。犬神は關東のおさき狐と同じやうなもので、それは狸や狐のやうに一時的のものでなかつた。村では犬神持ちと云はれてゐる家があつて、其の家にゐる犬神は其處の家人の心のままになつて、對手の者に憑いた。其處の女房か、隣家の嚴の生育の好いのを見て、それを羨ましく思ひでもすると、犬神はすぐ其の嚴に憑いて一夜の中に其の生育を惡くするか、其處の何人かに憑いて、其の者を病人にした。また隣家に出してゐる漬物の色の好いのを見て、それが喫ひたいと思ひでもすると、其の犬神はすぐ隣家へ往つて、其の漬物の味を違へたり、家の人に憑いたりした。

其の犬神を除くには、修驗者のやうなことをやつてゐる者か來て、よりと云ふ者を立てて祈禱にかかる。よりは病人のかばりになる者で、主に女で、多くは經驗のある、何時もよりとして雇はれてゐる者であつた。其のよりは病人の傍で、祈禱者の用意して來た榊の枝に紙片をつけた幣を雙手に捧げるやうに持つて、寂寞として坐つてゐる。と、祈禱者か聲高高と祈禱をはじめる。祈禱か進んで來るに從つて、よりの幣を持つた手が顫へ出す。それは犬神がよりに移つて來た印だ。よりは額から大粒の汗をぽろぽろ落しながら幣を動かした。榊の葉がばらばらと鳴つた。紙片が切れて飛び散つた。祈

禱者はそれを見ると、祈禱を止めて睨むやうによりの女を見おろした。

「お前は何んぢや、云へ、何處から來た」

「近處から來た」

と、よりの女が怪しい聲で苦しさうに云ふ。祈禱者にはすぐ見當がついた。それが判らない時には、

「近處とは何處ぢや、云うて見よ」

と云ふと、

「安右衛門からぢや」

などと、犬神持とせられてゐる家の名を云ふ。强情なのは何處から來たとも、犬神とも何とも云はないことがある。すると祈禱者が嚇した。

「云はないと金縛りにするぞ」

「祈り殺すぞ」

と、云ふやうなことを云ふと白狀した。時とすると犬神と思つてゐたのが、狸であつたり、死靈であつたりした。

「何しに來た」

と、病人に憑いた原因を聞くと、食物が欲しかつたとか、某物が羨しかつたとか、門口を通つてゐたら某處の犬に吠えられたから、恨みも何もなかつたけれども憑いたとか、種種のことを云つた。

「それなら、早う歸れ」

と、祈禱者が命令すると、

「歸ります、歸ります」

と、云つて幣を動かしてゐたよりの女が、急に體を動かして背後に倒れる。と、女はけろりとして起きあがる。彼はもう普通の女になつてゐた。時とすると其の女は、門口へまで這つて往つて倒れることがあつた。

「歸らない、怨みがあるからとり殺す」

などと云ふ者もあつた。中には、

「握り飯をこしらへて、俺の家の門口まで持つて往つてくれるなら、歸る、」

と、だだをこねる者もあつた。病人の家では其のとほりにした。漬物が欲しいと云へば漬物を持つて往つた。貰つた方では知らないから感謝してゐるが、送つた方は舌を出した。で、私の村では、思ひまうけない處から物をもらふと、

「家の犬神が云やしなかつたらうか」

などと云つて笑つた。今はそんなことを云ふ者もなくなつたが、最近まで犬神持の家とは結婚しなかつた。

「彼處の姨さんの眼を見ろ、光つてゐるぢやないか」

犬神持の家の人は、遠つた光る眼を持つてゐると云はれてゐた。私の知つてゐる老婆は、神經的な光のある眼をしてゐた。

私の郷里は土佐の海岸であつた。今はどうか知らないが、私の郷里には好く流行神樣と云ふものが出來た。昨日まで何もなかつた野原や畑の間に、急に小さな祠が出來て、それに參詣する者が赤や白の小さな幟をあげた。

「彼處の流行神樣は、覺が歩きだした」

「盲目の遍路の目が見えだした」

などと流行神樣の噂が村の人の口から口に傳へられる。其の流行神樣の本尊は、古い名も知れない石塔であつたり石地藏であつたり、狸であつたりしたが、中でも多いのは狸であつた。

「あれは、某處の狸ぢや」

村の人は其の狸の名まで知つてゐた。狸が流行神樣になるには、村の人に度たび憑いたあげく、

「俺を神として祭れば、もう人に憑かない」

などと云ひだして、それで祭るやうになるのであつた。

何時の比であつたか、私の村に甚内と云ふ力士があつたが、其の甚内は狸に憑かれる人があると其の人の背から肩を揉んで、狸を追ひだした。これには狸も困つたであらう。ある夜、甚内が林の下を通つてゐると、一疋の狸が出て來て、

「甚内さん、甚内さん」

と呼んだ。甚内は巫山戯たことをする奴ぢや、一つ捕つて汁にでも焚いてやらうと思つて立ち停つた。

「甚内さんにやかなはんから、一つまうけさして仲なほりをしたいが、やつてみませんか」

「何をやる」

「私の仲間が城下の淺井（富豪）のお嬢さんに憑いてをるから、二人で紀州の花岡（名醫）に化けて往つて、仲間に退かしたら、うんと禮をくれるから、それをお前さんにあげます」

「何時往く」

「これから往かう、私に跟いてくるなら、すぐ往ける」

村から城下の町へは、陸路で往つても三里ばかりしかなかつた。

「どうして往く」

と、甚内が聞くと、

「ちよつと待つておくれ、備準をする」

狸は傍の木の葉を五六枚とつて、それを口で舐めて瞼に貼つたが、見る見るそれが衣服になつた。そして、木の根に這ひまはつてゐる葛を引きちぎつて胴に巻くと、それが帶になつた。甚内は、狸が人に化けるには、木の葉を舐めて貼ると聞いてゐるが、なるほどさうだなと感心して見てゐると、狸はもう立派な醫師になつて、藥籠さへかまへてゐた。

「此の藥籠をお前さんが持つて往くが好い、お前さんは私の弟子のつもりでをるが好い」

と、藥籠をさしだすので、甚内はそれを受とつて肩にした。

「では、往かう」

と云つて、狸の醫師はずんずんと歩いて往く。甚内も其の後から跟いて往つた。そして、暗い中を暫く往つたかと思ふと、もう城下町の家並が燈の中に浮き出て來た。

「や、もう城下へ來たな」

甚内は其の早いのに驚いてゐると、眼の前に大きな門が見えて、狸の醫師は其の中へ入つて往つた。甚内も續いて入つて往くと、すぐ大きな玄關になつた。玄關にはもう五六人の者が燈を持つて

出迎へてゐた。

「花岡先生のお出でぢや」

「花岡先生ぢや」

出迎人は口口に云つて狸の醫師の手を執るやうにして案内した。甚内は夢のやうな心地で跟いて往つた。往つてみると大きな座敷があつて、其處には數多料理をかまへてあつた。

「何はともあれ、まあお一つ」

出迎人の一人は狸の醫師に盃をさし、それから甚内にも盃をくれた。其の酒の味はまたとない好い味であつた。

其のうちに狸の醫師は、診察にと云つて席を起つた。甚内はやはり看を喫ひ、酒を飲んでゐたが、若し狸が失敗しては大變だと思つたので、ふと顔をあげて見た。と、隣の座敷にしめやかな話聲がする。それは狸の醫師の聲で、病人のお嬢さんは、其處に寢てゐるらしかつた。甚内は襖の際から覗きたいと思つて、注意すると小さな穴があつたので其處へ隻眼をやつた。髪の黑い姝な女の寢てゐる枕頭に狸の醫師が坐つて、其の手の脈を執つてゐた。

甚内は狸にたぶらかされてゐた。彼は村の背後になつた山の上の、土地の人からカンガン岩と呼ばれてゐる岩の穴に眼をやつて、一心になつて覗いてゐた。

其の甚内は間もなく病死した。村の人は甚内は狸を揉み出してゐたから、狸に敵を討たれて死んだと云つた。――これは私が少年の時に聞いた話である。

私の郷里には、またかう云ふ話もある。それは、某と云ふ男があつて、ある夜、路を歸つてゐると、一疋の狸が木の葉を採つて體に貼つてゐるので、某は笑つて、

「そんなことをしたつてだめぢや、俺が好く化けることを知つてるから教へてやらう」

と云ふと、狸は翌晩になつて、其の男と約束の處へ來た。其の男は用意してゐた袋を出して、

「此の内へ入つたら、思ふものになれる」

と云つた。狸がほんとにして入ると、其の男は袋の口をぐいとしめて、突然地べたに投げつけて殺した。

腕自慢の若侍があつた。彼は奇怪な狸の噂を聞いて、其の狸を退治すると云つて、ある日一人で山の中へ入つて往つた。

と、むかうの方から振袖を着た姝な女が來た。若侍は不思議に思つた。草刈娘なら兎も角、かうした處へ振袖を着た姝な女が一人で來ると云ふのは、頗る奇怪である、まてよ、もしかすると、あれ

が狸の化けたのかも判らないぞ、と、彼は横眼を使ひながら女の方に注意してゐた。壯いおどおどした女にも似合はず、荊棘の上も、萱の中もかまはず、ひらひらと歩いて來た。さては、と、彼は思つた。

女は白いあどけない顏に微笑を見せながら寄つて來た。若侍も微笑を見せて女の來るのを待つてゐた。

女の艶かしい顏が眼の前にあつた。若侍は抜く手も見せず、腰の刀を抜いて切りつけた。女は聲を立てずに倒れたが、それはまぎれもない女の死骸であつた。若侍は周章てだした。狸ではなしに人であつたら、恐れて眼が暗んで人と狸とまちがへたと云つて世間から笑はれる、もしさうであつたら、とても生きてはゐられない、と、彼は女の死骸を見つめてゐた。

三人伴れの侍女らしい女が走つて來た。若侍は當惑した。侍女らしい女は若侍の傍へ來た。

「もしや此處を、お姫樣がお通りになりはしまいか」

と、一人が云つた。若侍はさては己の殺したのはお姫樣であつたか、しまつたことをしたと思つて、全身の血が一時に氷結したやうに思つた。

「や、これは、お姫樣、何物がこんな姿に……」

と、一人の侍女は倒れるやうに死骸に執り縋つた。他の侍女も泣き叫んで死骸に執り縋つた。

若侍は茫然として立つてゐた。侍女の一人は若侍の血刀を持つた手をぐつと摑んだ。

「此の惡人、そちは何の怨みあつて、お姫樣をかうした目に逢はせたのぢや」

若侍は血刀を手から落とした。と、聲音がして山狩姿をした武士が、五六人の侍者を從へて來た。

「や、殿樣のおでましぢや」

若侍は隻手を摑んでゐた侍女の一人が云つた。山狩姿の武士は侍女の聲を聞きつけると、其の方へ寄つて來た。それは國主であつた。

「何事ぢや」と、國主は聲をかけた。

「此の者が、お姫樣を手にかけましてござります」

「なに、姫を手にかけた」

と、云つて死骸を見るなり、其の眼を怒らした。若侍は腰を拔かしたやうに坐つて、顏を土にすりつけた。

「につくい奴、何故あつて姫を手にかけた」

「恐れ入りました、」

「何故あつて姫を手にかけたのぢや、早く云へ」

と、國主は涙聲になつてゐる。

「諸人の害をなす狸を退治いたさうと思ひまして」

「たはけ者、狸と姫と區別ができないか、武士の風上にも置けない奴、せいばいして姫の仇を執つてやる」

國主は從者の一人に持たしてある刀を執つて、それをすらりと拔いた。若侍はせめて殿樣の手討にでもなれば、其の罪がつぐのへると思つて、腹を據ゑてしまつた。

「暫く、暫く、暫く」

と、云ふ聲がする。何人か手討を止める容子である。

「殿、如何なる大罪を犯したかは存じませんが、愚僧に免じて、どうか生命だけは……」

と、云ふのは國主の信仰の厚い僧正であるらしい。

「姫を手にかけたる大罪人なれば、赦すまじき奴なれども、貴僧に免じて許しつかはす」

「そはありがたきしあはせにぞんじます、然らば、此の者は今日より、愚僧の法弟といたして、姫の後世を弔はせます」

僧は若侍の傍へ寄つて來た。

「我が君のありがたきお情けによつて、一命は愚僧が貰ひうけた、今日から出家して、愚僧の法弟に

なるが好い」

と云つた。若侍は生命は既にないものと思つてゐたところであるから、非常に喜んだ。彼は隻手に小刀を抜き、隻手に髻を掴んで、ぷつりと根元から切つてしまつた。

若侍は通りかかつた村の人に聲をかけられて驚いた。彼は山の中の草の上に坐つて、頭髪を切り、それを傍に置いて合掌してゐた。

一つの不思議

もうとうに故人になつてゐるが、筆者の先輩に吉岡榮喜と云ふ老醫師があつた。其の老醫師は村の小學校の新築落成の日、美辭麗句を交へた祝詞演說をやつて、これから學校に柳櫻を植ゑてと云ふやうな事を云つたので、村の青年たちは、柳櫻の翁さんと云ふ代名詞で呼んだものだ。

其の柳櫻の老醫師は、晩年東京へ出て、甥の永山久滿君の家に滯在して、醫術上の研究をしてゐた事があつたが、其の時永山君が何かの話のついでに、

「叔父さんは、これまでに不思議と思つた事がありますか」

と云ふと、

「別に不思議と思つた事はないが、強ひて云へばただ一つある」

と云つて話した。それは其の老醫師が高知縣長岡郡十市村に開業してゐた時の事であつたが、某日自宅へ客を招く事があつて、朝早くまだ暗いうちに、隣村の魚市場へ出かけて往つた。其の隣村と云ふのが筆者の村で、其處の沙地と云ふ部落を越して仁井田と云ふ部落へ入つて來る處に聖神と云ふ處があつて、其處に聖神社と云ふ社があつた。方角を云ふと社は山を背にして南向きになり、其の前は路一つ距てて空濠になつてゐるが、其處は當時闘犬場になつてゐて、相撲場のやうな土俵を築いてあつた。そして、空濠の前は海岸の松原で、一帶に樹木の多い淋しい處であつた。笑婆が出るとか、天狗が出るとか、聖神社の近くの路傍にある楠の老木を伐らうとすると、血が出るとか、いろいろの事を云はれてゐたが、すこしも迷信を持たない老醫師は、平氣で社の前へ來たところで、空濠の上空に笙や篳篥の雅樂を奏してゐるやうな音がしてゐた。老醫師はこんな處に音樂の聞えるのはをかしいと思つたが、あまり面白いので足を止めて聞いてゐるうちに、ぱつたり止んだので其のまま魚市場へ往つたとの事である。

曾我兄弟の墓

今回開港場となつた高知港の東岸に種崎と云ふ部落があつて、其處に曾我兄弟の墓と云はれてゐる古い石碑があつた。それは路傍に面した屋敷跡のやうな地所の隅にあつて、傍に一本の松の木があつたのを筆者も少年の時に見てゐる。

明治年間の事であつた。種崎に某と云ふ者があつて、毎晩のやうに東隣の仁井田と云ふ部落へ碁を打ちに往つた。その仁井田の山の麓になつた淋しい處に清導寺と云ふ寺があつて、其處に碁の上手な住職がゐた。

好碁家某は、その日も例によつて夕飯をすますなり、仁井田へ出かけて往つた。この種崎と仁井田の間に、火除けと云つて數町の間人家のない處があつて、其處には桑畑があり、竹藪があり、又種崎の出はづれには、赤井戸と云ふ井戸枠の周圍を赤く塗つた井戸があつて、頸の無い馬が出るとか河童が出るとか云ふので、少年たちは恐れたものだ。

その時は陽が入つたばかりの時であつた、某が火除けの中央へ往つたところで、一人の老婆が路の眞中へ坐つて兩足を投げだしせつせと苧を紡んでゐたが、路が狹いので老婆が足を引つこめてくれなければ通れない。某は老婆の注意を惹くやうに咳をしたが、老婆はすまして苧を紡んでゐて、足を引つこめさうにないから某も癪に觸つて跨いで往つた。

そして、清導寺へ往つて住職敵手に碁を打ち、遲くなつて家へ歸つた。家では平生のやうに五右衞門風呂をたててあつたので、某は早速それに入つて體を洗ひながら、座敷の方にゐる女房と話してゐたところで、何者かが來て背を叩かれた。某は吃驚した。同時に敵手の聲が聞えた。

「おまへさん、何をしよるぞよ、そんな事をして」

某は曾我兄弟の古碑を洗つてゐるところであつた。其處には夜が明けたので、井戸の水を汲みに起きて來た隣の老婆が立つてゐた。

我が身の素性を探りに

八十八箇所の靈場を持つ四國には、遍路の巡禮に關する種種な物語がある。

明治二十年比のことである。高知縣幡多郡十川村烏部落の芝と云ふ豪農の門口へ、秋の某日、六つか七つに見える男の兒の巡禮が來て立つた。其の邊ではへんど笠と云ふ大人用の菅笠を冠り、杖を持ち、胸に三衣袋と經挾をかけ、脊に負摺を負ひ、手には甲掛け、足には脚絆を穿いてゐた。

それはもう黄昏で其處の農家の土藏の白壁に燃えてゐた夕陽の光が消えて、藥研の底のやうになつた谷間の村に暮色が霧のやうにかかりかけた時であつた。其の日も平和な一日の仕事を終へた主人の信義が、これから座敷へあがつて一ぱいやらうと思つて、ちよつと門口の方を見たところで、見慣れない姿をした小さな子供が立つてゐるので、不思議に思つて出て往つた。不思議に思ふと云ふことは、土佐にも八十八箇所の内の靈場があつて、年中遍路の巡禮が往來してゐるが、十川村は其の道筋からかけ離れてゐて、巡禮の來ることがないためであつた。そこで信義は、

「お主は、何處から來たら」

と云つて訊いてみた。

「ん」

少年はさう云つて、愚さうな眼をきよとときさした。信義は子供の菅笠に氣が注いた。

「お主は、へんどか」

と云つた。遍路の巡禮を四國では普通にへんどと云つてゐる。土地の有志として人にも知られてゐる信義は、伊豫にも讃岐にも往來してゐたので、菅笠に同行二人、四國八十八箇所と書いた巡禮姿は知つてゐた。

「ん」

少年は同じやうな返事をしたが、それでもんの返事の中には何かしらものを肯定するものがあつた。

「お主や一人か、伴れはないか、お父もお母もをらんか」

少年は其の時初めて連絡のある詞をだした。

「あゐ」

信義はそこで少年が兩親か何人かにはぐれたことを知つた。

「さうか、それにしてもへんどが通る處ちやないが、何處から來たら」

少年が伴れにはぐれたことは判つても、遍路が邊鄙な山の中へ入つて來た意味は判らなかつた。

「ん」

少年はまた愚さうな眼づかひをした。子供は發育の遲い質のやうであつた。